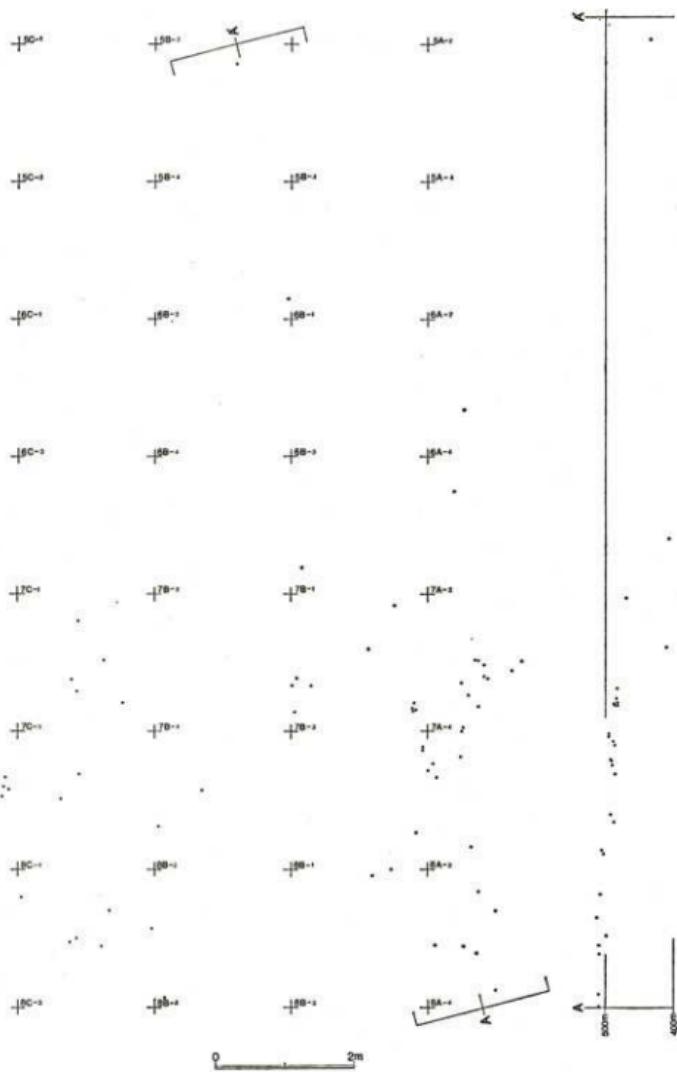


第56図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区グリッド割付け図



第57図 伊奈氏屋敷跡 I-4 区遺物分布図

## 発掘層序

Ⅰ—1区が台地部から水田面にかけての移行がわかる唯一の区であり、他はすべて水田面からの調査である。層序の全体的な所見は、マコモ層と粘質土層の互層である。土器片、加工木などが出土する遺物包含層は標高5~6mの所に位置する1層であり、縄文時代後期加曾利B式期~晚期安行Ⅱb期にかけての土器がまとまって出土している。間層を有し、他の時期の土器が存するということはなかった。

次に各地区的層序について説明を進めて行きたい。低湿地遺跡の層序の色は刻々と変化し、さらに調査区が離れているために、土層の特徴を統一することは困難をきわめた。そこで個々の土層は統一することはせずに、暗褐色純まこも層（植物遺体層）、灰白色第一粘土層、灰白色第二粘土層の三つの基本となる土層のみ全区統一し、説明を進めて行きたい。

### Ⅰ—1区（第58図）

東西土層断面図の北壁で作図する。

第1層（暗褐色シルト層）：耕作土、粘性はあまりなく、しまりが悪い。1mm程の黄色ローム微粒を含む。第2層（暗褐色シルト層）：耕作土、粘性は同上、第1層より暗色である。ローム粒が大きくなり、1~5cm程の黒色シルトブロックを若干含む。第3層（暗褐色シルト層）：耕作土、粘性は同上。第2層よりも暗い。1~5m程のロームブロック及び1~20mm程の黒色シルトブロックを含む。第4層（暗褐色シルト層）：耕作土、粘性はややある。第3層よりさらに暗色である。ローム粒は小さく1mm位が中心である。黒色シルトを多量に含み、ブロックの大きさも数cm~10cm近いものが多くなる。第5層（暗褐色シルト層）：粘性はややあり、しまりは悪いが第3層よりは良い。色調は第3層より明色であるがやや灰色を帯びる。ロームブロックが上層より多い。第6層（漆黒色粘質土層）：粘性は強であり、含水性が高い。多量の植物遺体を含む。未分解のビート。第7層（黒褐色粘質土層）：粘性ややあり、含水性は高い。やや茶色味強い。多量の植物遺体を含む。未分解のビート。レンズ状に黄白色細粒シルトブロックを含む。第8層（黒褐色粘質土層）：7・9層より黒い。性質は同上。やや植物が多い。第9層（暗褐色純まこも層）：粘性ややあり、含水性は高く、しまりは悪い。純植物遺体層であり、層全体が褐色を呈している。色調は第10層に似るが褐色味が強い。未分解ビート。基本土層である。第10層（黒褐色粘質土層）：粘性あり、含水性高く、しまりが悪い。植物の葉・茎・根などの遺体を多量に含む。未分解のビート。第11層（漆黒色粘質土層）：性質は同上である。第6層より多く植物遺体を含む。第12層（黒褐色粘質土層）：性質同上。色調は第8層と第10層の中間。第13層（黒褐色粘質土層）：粘性があり、含水性は高い。植物遺体の量はかなり少い。色調は第6層以下では最も明るい。第14層（黒褐色粘質土層）：粘性があり、含水性も高い。植物遺体の量が多くしまりが悪い。色調も黒色化している。第15層（黒褐色粘質土層）：性質同上。第14層よりさらに黒色化している。第16層（暗褐色土層）：粘性が強く、含水性が高い。しまりも悪い。植物遺体の根に鉄分が付着し赤褐色化している部分が認められる。第17層（灰褐色土層）：性質は同上。右上方では白色化が進行している。第18層（灰黄色粘質土層）：しまりは上層より良い。植物遺体を比較的多く含む。第19層（灰白色第一粘土層）：粘土質である。含水性は高いが、植物遺体はほとんど認められない。基本土層である。第20層（灰白色第二粘

土層) : 性質同上。第19層より黄味を帯びている。基本土層である。第21層(暗灰色土層) : 性質同上。植物遺体に鉄分沈着が認められる。白色化している所も認められる。第22層(暗褐色土層) : 性質同上。第23層(黒褐色土層) : ソフト化したローム層である。第24層(黒褐色土層) : ハードロームである。第25層(暗黄褐色土層) : 第23・24層から下層への漸移層で、黒色と明黄色土がまだらに混じる。第26層(暗褐色土層) : ポソボソしている。第27層(黄褐色ローム層) : 色調はやや褐色味が強い。第28層(淡黄褐色ローム層) : 全体的に脱色されたように白味を帯びる。第29層(灰黄色ローム層) : 粘性強。全体的に白味を帯びる。第28層より暗色である。第30層(灰黄褐色ローム層)。第31層(淡青灰白色ローム層)。第32層(淡灰黄褐色ローム層) : 第30層より色調は薄い。第33層(暗褐色ローム層)。第34層(暗褐色ローム層) : 第33層のソフト化したものである。第35層(灰褐色粘質土層) : 粘性が強く、しまりは悪くやわらかい。第36層(淡黄灰色粘質土層)。第37層(黒褐色粘質土層) : 粘性ややあり、含水性も高い。植物遺体を多量に含む。上半部に部分的に茶褐色砂質シルトブロックを含む。未分解のビート。第38層(黒褐色粘質土層) : 性質同上。第9層より黒味が強い。第39層(黒褐色土層) : 性質は第13層と同じであるが、黒色が強い。第40層(黒褐色土層) : 第15層とほぼ類似するが、やや黒色である。第41層(灰黑色土層) : 植物遺体層の最下層である。黒色化した植物遺体を含む。第42層(淡灰褐色粘質土層) : 粘性ややあり、含水性は少く、しまりが悪い。0.1cm~0.5cmの炭化物を含有する。0.5cm~2cmの白色粘質土を含有する。僅かに植物遺体を含む。第43層(灰褐色砂質土層) : 第42層とほぼ同類の層であるが、粘性は弱く、植物遺体が微増する。0.5cm以下の炭化物を含む。第44層(褐色砂質土層) : 0.5cm前後の炭化物を混入する。第45層(暗褐色砂質土層) : 粘性は弱い。しまりがあり、含水性が高い。植物遺体を少量含む。木の実、0.5cm~1cmの炭化物、木片を混入する。丸木舟を検出した層である。第46層(暗褐色粘質土層) : 木の実、炭化物を少量含む。第47層(灰白色粘土層) : 粘性強。炭化物を少量含有する。

以上、I-1区の層序概要を述べた。台地部にかかる層で、傾斜するローム層が認められた。第23層~第45層がこれに当たる。調査は標高3mで終了する。

## I-2区(第59図)

南北土層断面の西壁で作図する。

第1層(茶褐色シルト層) : 耕作土。第2層(暗褐色シルト層) : 粘性はややあり、しまりがない。植物遺体を若干含む。第3層(黒褐色シルト層) : 性質同上。第4層(暗褐色シルト層) : 第3層より粘性も弱く、色調も明るい。第5層(黒褐色シルト層) : 植物遺体の量は第3層と第4層の中間である。第3層より黒い。第6層(黒褐色シルト層) : 粘性が強く、含水性が高い。第7層(暗褐色純まこも層) : 基本となる層である。第8層(黒褐色混まこもシルト層) : 含水性が高く、植物遺体を多量に含む。第7層がよく原形をとどめた植物を含むのに対して、本層のものは繊細である。第9層(漆黒色シルト層) : 粘性が強く、含水性が高く、しまりは非常に悪い。第11層との境の下底部に黄灰白色的細粒シルトブロックを点々と含む。第11層(黒褐色シルト層) : 性質同上。植物遺体は大型のものが多い。第12層(黒色シルト層) : 性質同上。植物遺体がやや少い。第13層(漆黒色シルト層) : 性質同上。黒色味が強い。第14層(漆黒色シルト層) : 粘性やや有り。含水

性が高く、しまりがなくやわらかい。植物遺体は上層の方が多い。第15層(黒褐色シルト層)：性質同上。微細な砂を少量含む。第16層(漆黒色シルト層)：粘性が強く、含水性も高い。しまりはややある。第17層(黒色シルト層)：性質は同上。植物遺体を少量含む。第18層(暗灰色シルト層)：粘性が強く、含水性が高い。しまりはややある。植物遺体は細かな繊維である。第19層(灰白色第一粘土層)：基本となる層である。第20層(黒褐色シルト層)：粘性はあまりなく、含水性が高い。植物遺体が多く、しまりが悪い。第21層(暗褐色シルト層)：粘性はあまり認められない。下半ではやや粘性を帯び、灰色味が増す。植物遺体は第20層より多い。第22層(灰白色第二粘土層)：中央部にやや黒味を帯びる。基本となる層である。第23層(明灰褐色粘質土層)：粘性が強く、含水性もややある。植物遺体を少量含む。第24層(灰褐色粘質土層)：粘性が強く、含水性も多い。しまりやや有。厚さ1.5cm位のまこも層と灰白色層が互層をなし、まこも層は炭化している。このため色調はやや暗く、植物遺体の量は所により大きき異なる。第25層(暗灰褐色土層)：性質は第23層とほぼ同じである。灰白色と暗灰白色粘質土が互層をなしている。第26層(灰白色土層)：粘性が強く、含水性は低い。しまりやや有。植物遺体は微量だが大型のものを含有している。第27層(暗灰褐色土層)：上下でやや褐色味が強く、植物遺体の量も上下で多く、中間は微量である。粘性強、含水性強、しまりはやや有である。第28層(暗灰褐色シルト層)：下層の明灰綠色層への漸移層である。従って上半では黒く、下半では明色になっている。第29層(黒褐色シルト層)：まこもを多量に含有するため、しまりが無く、粘性もあまり無い。第30層(暗褐色土層)：粘性があり、含水性もややある。木の種子を多量含む、通称木の実層である。第31層(灰色粘質シルト層)：粘性強、含水性弱、しまりはやや有。植物遺体を少量含む。5mm前後の炭化物を含む。木の実もまれに含有する。第32層(黄灰色粘質シルト層)：性質同上。木の実(特にクリ・ヒシ)、樹皮を多量に含む。第33層(灰色シルト層)：性質同上。植物遺体はほとんど見られない。白い器具を水面に流した様な文様が薄く入る。第34層(暗綠灰シルト層)：性質同上。ヒシの実が少量認められる。第35層(暗綠灰シルト層)：性質同上。砂をレンズ状に含む。第36層(暗灰綠色粘質シルト層)：性質同上。毛根状の植物遺体を多く含む。炭化物、木の実を微量含む。第37層(灰白色粘質シルト層)：性質同上。第38層(暗灰白粘質シルト層)：性質同上。毛根状の植物遺体を含む。第39層(灰白色粘質シルト層)：性質同上。ヒシの実を多く含む。第40層(灰白色粘質土層)：性質同上。木の実層がやや色調を変えたような層である。第41層(黒色土層)：粘性はない。有機物とくに木の枝・植物遺体等が層をなしているものである。

調査は水の流入が多くなって来たため標高4mで終了している。

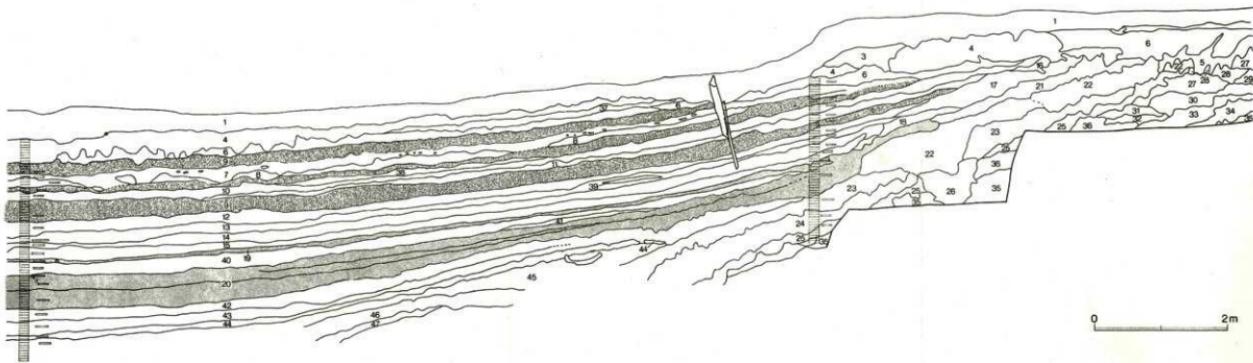
### I-3区(第60図)

東西土層断面の北壁で作図を行なった。

第1層(暗褐色土層)：耕作土。第2層(黄褐色土層)：粘性ややあり。第4層まで含水性はあまり高くない。砂質である。第3層(暗灰褐色土層)：やや灰色がかった粘土を含む。植物遺体を少量含む。第4層(黒褐色シルト層)：しまりは悪い。植物遺体を少量含む。第5層(黒褐色土層)：粘性はあまりない。この層以下含水性は高い。しまりはない。微量の砂を混入する。第6層(黒褐色土層)：植物遺体を多量に含み、しまり、粘性はない。黄灰青色シルトブロックを含む。

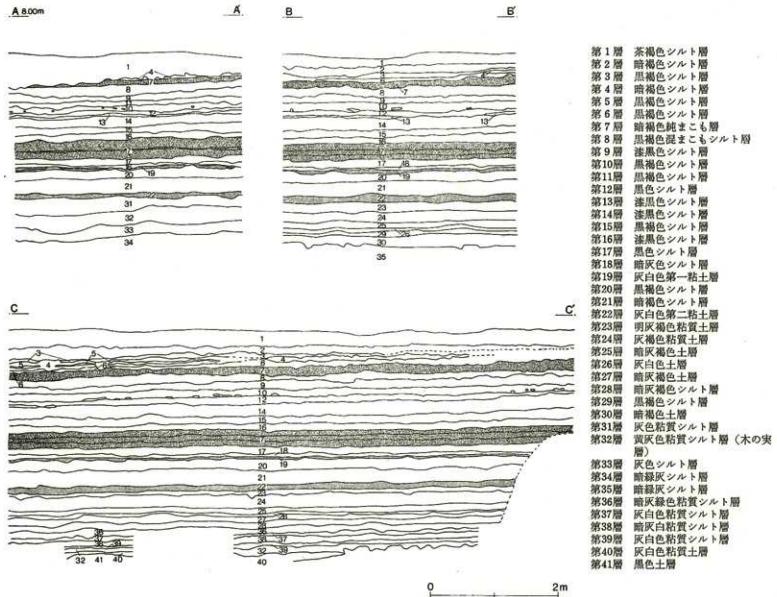
A 8.40m

B



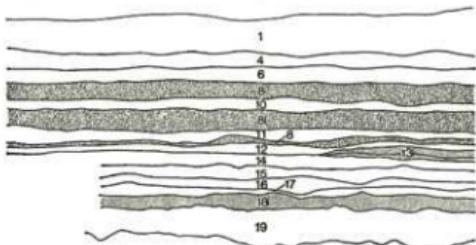
第1層	暗褐色シルト層	第13層	黒褐色粘質土層	第25層	暗黃褐色土層	第37層	黒褐色粘質土層
第2層	暗褐色シルト層	第14層	黒褐色粘質土層	第26層	暗褐色土層	第38層	黒褐色粘質土層
第3層	暗褐色シルト層	第15層	黒褐色粘質土層	第27層	黃褐色ローム層	第39層	黒褐色土層
第4層	暗褐色シルト層	第16層	暗褐色土層	第28層	淡黃褐色ローム層	第40層	黒褐色土層
第5層	暗褐色シルト層	第17層	灰褐色土層	第29層	灰黃褐色ローム層	第41層	灰黑色土層
第6層	深黑色シルト層	第18層	灰黑色粘質土層	第30層	灰黃色ローム層	第42層	淡灰褐色粘質土層
第7層	黑褐色粘質土層	第19層	灰白色第一粘土層	第31層	青灰白色ローム層	第43層	灰褐色沙質土層
第8層	黑褐色粘質土層	第20層	灰白色第二粘土層	第32層	淡灰黃褐色ローム層	第44層	褐色沙質土層
第9層	暗褐色純土とも層	第21層	暗黃灰土層	第33層	暗褐色ローム層	第45層	暗褐色沙質土層
第10層	黑褐色粘質土層	第22層	暗褐色土層	第34層	暗褐色ローム層	第46層	暗褐色粘質土層
第11層	淡黑色粘質土層	第23層	黑褐色土層	第35層	灰白色粘質土層	第47層	灰白色粘土層
第12層	黑褐色粘質土層	第24層	黑褐色土層	第36層	淡黃褐色粘質土層		

第58図 伊奈氏里敷跡Ⅰ-1区土層断面

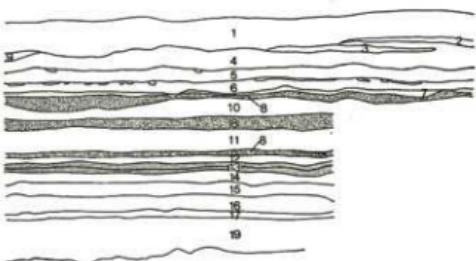


第59図 伊奈氏里敷跡 I-2 区土層断面図

A 8.00m



B 8.00m



2m

第1層 暗褐色土層  
第2層 黄褐色土層  
第3層 暗灰褐色土層  
第4層 黑褐色シルト層  
第5層 黑褐色土層  
第6層 黑褐色土層  
第7層 黑色土層  
第8層 暗褐色純まこも層  
第9層 褐色土層  
第10層 漆黑色土層

第11層 漆黑色土層  
第12層 灰茶褐色土層  
第13層 灰白色第一粘土層  
第14層 黑褐色シルト層  
第15層 黑褐色シルト層  
第16層 黑色シルト層  
第17層 灰褐色土層  
第18層 灰白色第二粘土層  
第19層 オリーブ灰色粘質シルト層

第60図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—3区土層断面図

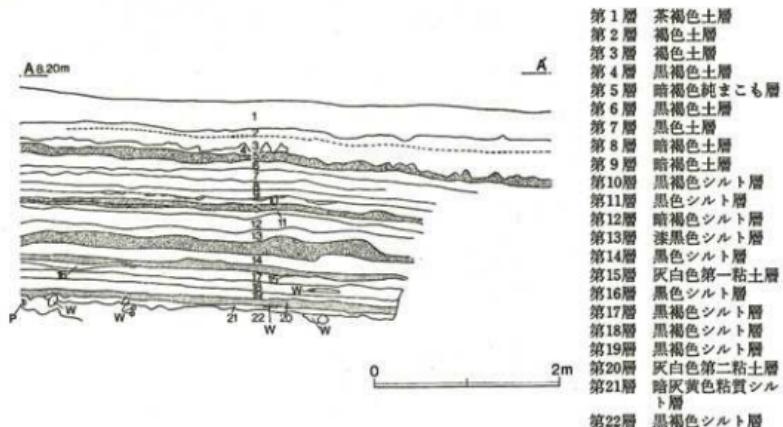
第7層（黒色土層）：粘性少しあり、しまり悪い。植物遺体は減少する。第8層（暗褐色純まこも層）：基本土層。第9層（褐色土層）：性質は第7層と同じ。第10層（漆黒色土層）：性質同上。繊維質な植物遺体を含む。第11層（褐色土層）：性質同上。大形な植物遺体を多量に含有。第12層（灰褐色土層）：色調のみ違い、特徴同上。第13層（灰白色第一粘土層）：基本土層。第14層（黒褐色シルト層）：粘性弱、しまりなし、植物遺体を多く含む。第15層（黒褐色シルト層）：性質同上。砂粒を含む。第16層（黒色シルト層）：やや粘性を増す。第17層（灰褐色土層）：第15層より粘土、植物遺体の量が増す。第18層（灰白色第一粘土層）：基本土層。第19層（オリーブ灰色粘質シルト層）：しまり有、含水性はあまりない。ヒシ他の種子を少量含む。

以上である。植物遺体は、まこもが目立った。標高4.5mで調査は終了する。遺物は検出されず。

#### I-4区(第61図)

東西土層断面の北面で作図する。

第1層（茶褐色土層）：耕作土。第2層（褐色土層）：粘性中、含水性はあり、しまりがない。第3層（褐色土層）：性質同上。第2層よりやや黒みを帯びる。第4層（黒褐色土層）：粘性少、含水性は高く、しまりなし。第5層（暗褐色純まこも層）：基本土層。第6層（黒褐色土層）：植物遺体を多量に含み、含水性が高い。しまり、粘性なし。第7層（黒色土層）：性質同上、やや植物遺体が減少する。第8層（暗褐色土層）：第7層と類似する。第9層（暗褐色土層）：性質同上、植物遺体はさらに減少して少量となる。第10層（黒褐色シルト層）：上層に黄灰色の粘土（火山灰？）をのせる。粘性なく、しまりがない。含水性が高く、植物遺体は増大する。第11層（黒色シルト層）：粘性あり、含水性は高く、しまりがない。植物遺体は減少する。第12層（暗褐色シルト層）：粘性なし、しまりなし、含水性は高い。全体的にきめが細かい。植物遺体を少量含む。第13層（漆黒色シルト層）：第14層と類似するが、植物遺体が増大する。第14層（黒色シルト層）：粘性が強い。植物遺体は減少する。第15層（灰白色第一粘土層）：粘土層である。植物遺体はほとん



第61図 伊奈氏屋敷跡I-4区土層断面図

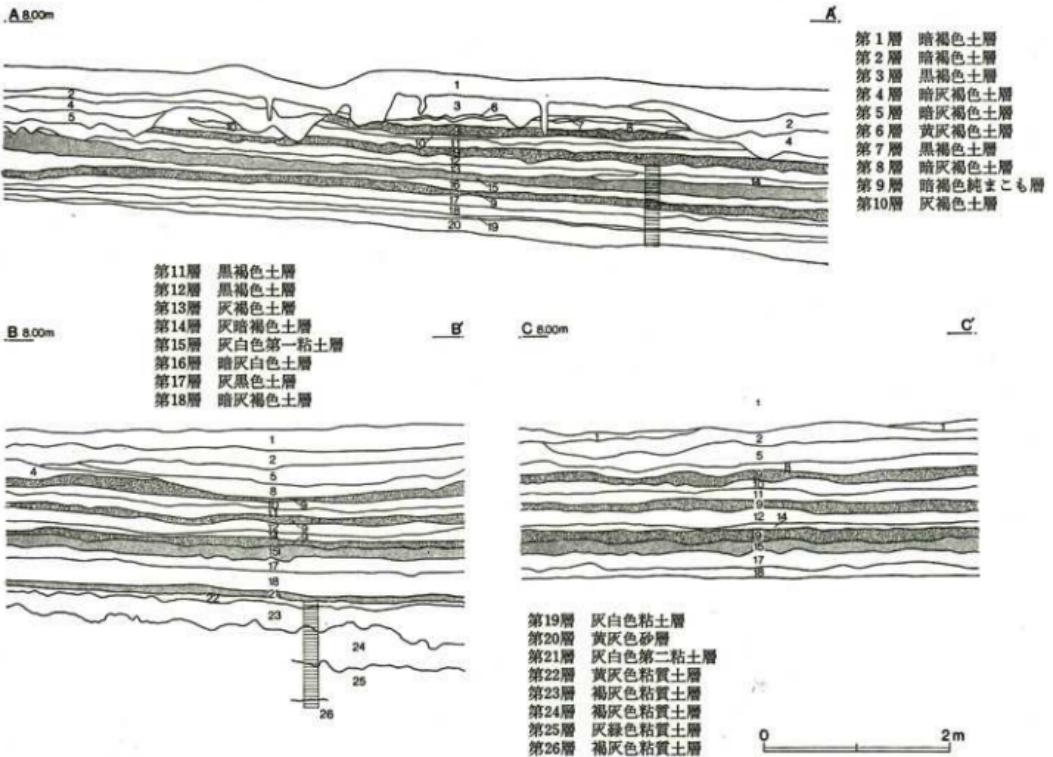
ど含まれない。基本土層。第16層（黒色シルト層）：第14層より灰色味を帯びている。第17層（黒褐色シルト層）：粘性中、しまりよい。含水性も高い。植物遺体をやや多く含む。第18層（黒褐色シルト層）：粘性なく、しまりあまりない。含水性は高い。植物遺体を多量に含む。レンズ状に粘質土が入る。第19層（黒褐色シルト層）：第18層と類似するが、やや白色化している。第20層（灰白色第二粘土層）：黄灰色化している。基本土層である。第21層（暗灰黄色粘質シルト層）：含水性高く、しまり良い。植物遺体を微量に含む。炭化物、種子、流木を少量含む。第22層（黒褐色シルト層）：粘性あり、しまり良い。土器片、種子を多く含む。

以上がI-4区の層序の概要である。第22層では丸木舟の一部、土器片多数を出土しており、標高は5~6mにかけてある。縄文後~晩期にかけての土器が出土している。土器が検出されなくなった標高5mで調査を終了した。

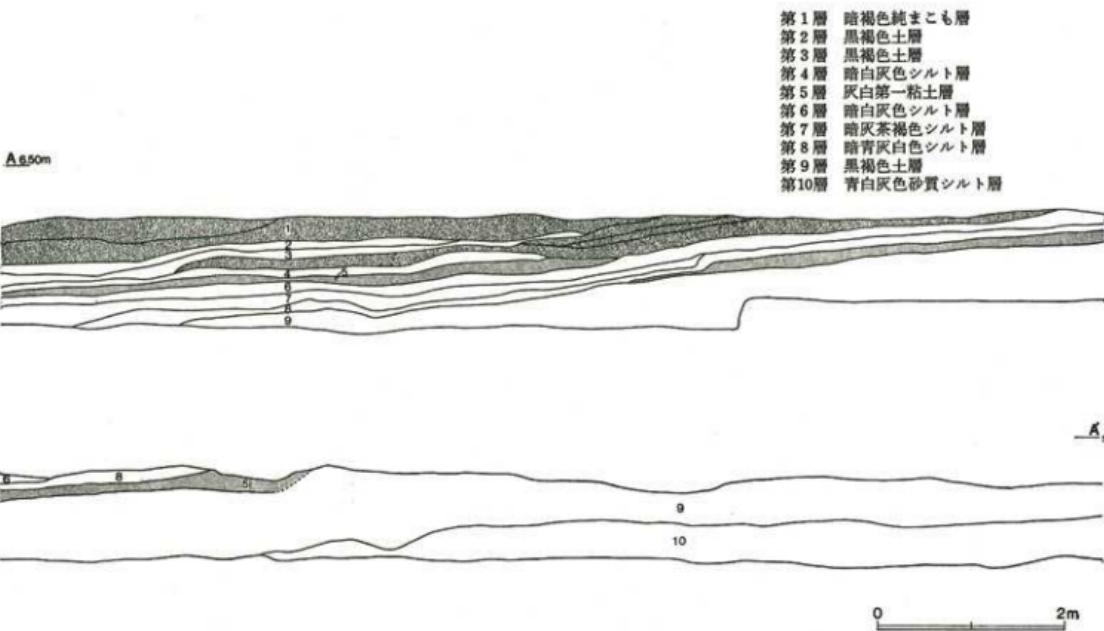
#### I-5区（第62図）

東西土層断面の南壁で作図を行なった。台地部から直交し、A-A'、B-B'、C-C'と約5m間隔で作図した。

第1層（暗褐色土層）：耕作土。第2層（暗褐色土層）：第1層より明るい。植物遺体を含む。第3層（黒褐色土層）：第2層に黒色土が混入したもの。第4層（暗灰褐色土層）：粘性あり、含水性ややあり、やや黄色を帯びている。植物遺体を含む。第5層（暗灰褐色土層）：色調はやや明るい。第4層よりも植物遺体の混入量が少い。第6層（黄灰褐色土層）：粘性、しまりあり。含水性ややあり。第7層（黒褐色土層）：粘性少、含水性は高い。植物遺体を多重に含む。第8層（暗灰褐色土層）：粘性、含水性あり。植物遺体を少量含む。やや黒色を帯びる。第9層（暗褐色純まこも層）：植物遺体層（まこもが主体を占める）である。基本土層。第10層（灰褐色土層）：粘性中、含水性有、しまり良。植物遺体を含む。第11層（黒褐色土層）：粘性はあまりない。含水性は高い。しまり悪い。植物遺体を外量に含む。第12層（黒褐色土層）：灰色を帯びる。他は同上。第13層（灰褐色土層）：黒色を帯びる。他は同上。第14層（灰暗褐色土層）：第13層より明るい。粘性が増すが他は同上。第15層（灰白色第一粘土層）：粘土層である。基本土層。第16層（暗灰白色土層）：粘性が高く、しまりがある。第15層より明るい。第17層（灰黑色土層）：第16層より暗い。植物遺体を含む。第18層（暗灰褐色土層）：植物遺体と粘土（灰白色土）の互層である。第19層（灰白色粘土層）：粘性あり、しまりがある。色調はやや青味を帯びる。第20層（黄灰色砂層）：上・中・下の三層に分けられる。上・下層は黄灰色を帯びている。砂層中心部には炭化物・種子を多量に含み灰色が強くなる。土器、木製品を検出する。第21層（灰白色第二粘土層）：基本土層である。植物遺体をレンズ状に少量含む。第22層（黄灰色粘質土層）：粘性強、以下すべての層ともしまりがある。若干褐色味を帯びる。繊細な植物遺体を少量含む。第23層（褐灰色粘質土層）：含水性は高い。繊細な植物遺体、種子（ヒシの実）を少量含む。炭化材も少量含む。第24層（褐灰色粘質土層）：粘性強。含水性は高い。種子（ヒシの実、ドングリ）、炭化材を多量に含む。漆塗弓、土器片を検出する。色調が異なるため層序番号を変えたが、台地寄りの第20層に連続するものである。第25層（灰綠色粘質土層）：粘土層。第26層（褐灰色粘質土層）：含水性が高い。草本、木本類の遺存体が極端に多く、層全体が有機物層を呈する。



新62圖 伊奈氏屋敷跡1—5区土層断面図



第63図 伊奈氏園敷跡 I-1区土壌断面図

以上であるが、東から西へ傾斜し、土層断面C—C'では水平に堆積している。A—A'の第20層下は青白色な砂質を帯びた粘土層となっており基盤と考えられる。

#### Ⅰ—1区（第63図）

東西土層断面の北面で作図する。

上層は重機により除去してしまっている。第1層（暗褐色純まこも層）：基本土層。第2層（黒褐色土層）：粘性少、含水性はあまりない。第3層（黒褐色土層）：第2層よりやや暗い。他は同上。第4層（暗白灰色シルト層）：粘性強。第5層（灰白色第一粘土層）：基本土層。第6層（暗白灰色シルト層）：黒褐色シルトと白灰色シルトが互層を成している。第7層（暗灰茶褐色シルト層）：粘性中、含水性はやや高い。少量の植物遺体、小型の種子を含む。白灰色のシルトブロックを混入する。第8層（暗青灰白色シルト層）：粘性中。第9層（黒褐色土層）：粘性弱、含水性が高い。少量の植物遺体を含む。第10層（青白灰色砂質シルト層）：粘性弱。上半は黄灰色、下半は濃青白灰色、最下部では青灰色の砂質層となる。

#### Ⅰ—2区（第64図）

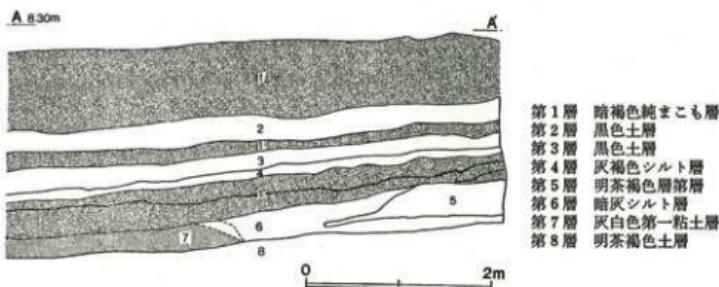
南北土層断面の東面で作図を行なう。

第1層（暗褐色純まこも層）：基本土層。第2層（黒色土層）：粘性あまりなし。含水性が高く植物遺体を多量に含み、しまりが悪い。第3層（黒色土層）：第2層よりやや明るい。他同上。第4層（灰褐色シルト層）：第3層と類似している。第5層（明茶褐色土層）：粘性あり。掘の落ち込みにあたる。第6層（暗灰シルト層）：含水性が高い。植物遺体、炭化物を若干含む。掘に堆積した層である。第7層（灰白色第一粘土層）：基本土層。第8層（明茶褐色土層）：粘性弱、砂質化している。

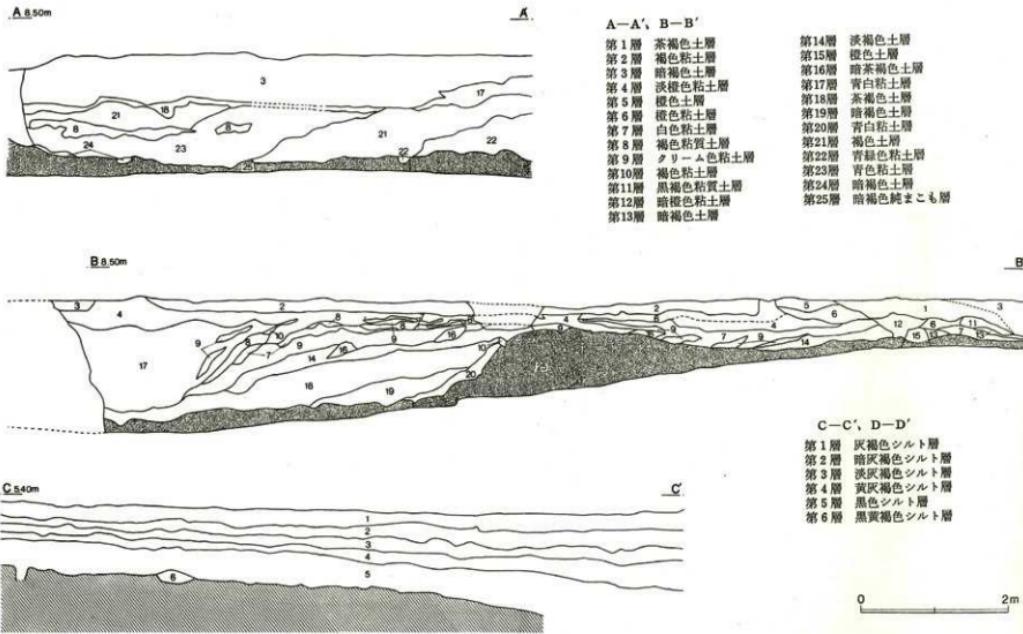
#### Ⅰ—3区（第65・66図）

A—A'、B—B'は、階段状に掘り下げた上段で、A—A'は西面を、B—B'は北面を作図した。C—C'、D—D'は最下部に残したベルトの東面、北面をそれぞれ作図した。E—E'は中央の東面を作図した。以上の結果、作図位置が異なるため3種の層序説明を行なうことにする。

A—A'、B—B'



第64図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—2区土層断面図



第65圖 伊奈氏屋敷跡I-3区土層断面図

第1層（茶褐色土層）：一部でやや粘性を帶びている。第2層（褐色粘土層）：粘性強。含水性はあまり高くない。しまり良し。第3層（暗褐色土層）：耕作土。一部粘土の流れ込みあり。若干しまり良し。第4層（淡橙色粘土層）：粘性強、含水性はあまりない。第5層（橙色土層）：粘性強、橙色・白色粘土と褐色土、黒色土を混入する。第6層（橙色粘土層）：粘性強、含水性は低い。第7層（白色粘土層）。第8層（褐色粘質土層）：粘性強、しまりよし。第9層（クリーム色粘土層）：褐色粘土と青白色粘土が斑点状に入り込む。第10層（褐色粘土層）。第11層（黒褐色粘質土層）：粘性強。第12層（暗橙色粘土層）：黒色土と橙色粘土が斑状に混っている。第13層（暗褐色土層）：粘性弱。第14層（淡褐色土層）：粘性弱、橙色粘土粒、青色粘土粒を多量に含む。第15層（橙色土層）：黄色でやや橙色部分あり。軟質砂岩ブロックを多量に含む。第16層（暗茶褐色土層）：砂質で粘土を混入しない。第17層（青白粘土層）：多色の粘土を混入する。第18層（茶褐色土層）：青色粘土、橙色粘土、黒色土を斑点状に含む。第19層（暗褐色土層）：青色粘土ブロックを多く含む。第20層（青白粘土層）：褐色土を混入する。第21層（褐色土層）：粘性強、しまり良し。青緑がかかった粘土と褐色土が塊状に混じる。第22層（青緑色粘土層）：粘性強。第23層（青色粘土層）：粘性強、部分的に褐色土ブロックを含む。第24層（暗褐色土層）：粘性弱、埋め立て跡の土留めの竹、木材等を含む層。第25層（暗褐色純まこも層）：含水性が高い。しまりなし。基本土層。

#### C—C'、D—D'

第1層（灰褐色シルト層）：植物遺体、炭化物、流木を少量含む。全層共に遺物包含層である。各層、粘性、含水性強。第2層（暗灰褐色シルト層）：植物遺体、炭化物、流木を多量に含む。第3層（淡灰褐色シルト層）：植物遺体、炭化物、流木を少量含む。第4層（黄灰褐色シルト層）：下半は暗灰色になる。他同上。第5層（黒色シルト層）。第6層（黒黄褐色シルト層）：まだら状に黒色を帶びている。以下ローム層である。

#### E—E'

第1層（黄褐色土層）。第2層（褐色土層）：テフラ、スコリアを多量に含む。第3層（黄褐色土層）。第4層（褐色土層）：テフラ、スコリアを多量に含む。第5層（暗褐色土層）。第6層（黒褐色土層）。第7層（黒褐色土層）：黄灰色の粘土を混入する（火山灰？）。第8層（暗褐色純まこも層）：基本土層。第9層（茶褐色砂層）：火山灰。第10層（黄色粘土層）：火山灰。第11層（黒褐色土層）。第12層（黄色粘土層）：火山灰。第13層（黒色粘土層）：以下いずれの層も、粘性強、含水性高く、しまり良し。第14層（黒色粘土層）：植物遺体を少量含む。第15層（黒色粘土層）：植物遺体をほとんど含まない。第16層（白灰色粘土層）。第17層（黒色粘土層）：第15層と類似する。第19層（灰白色第一粘土層）：基本土層。

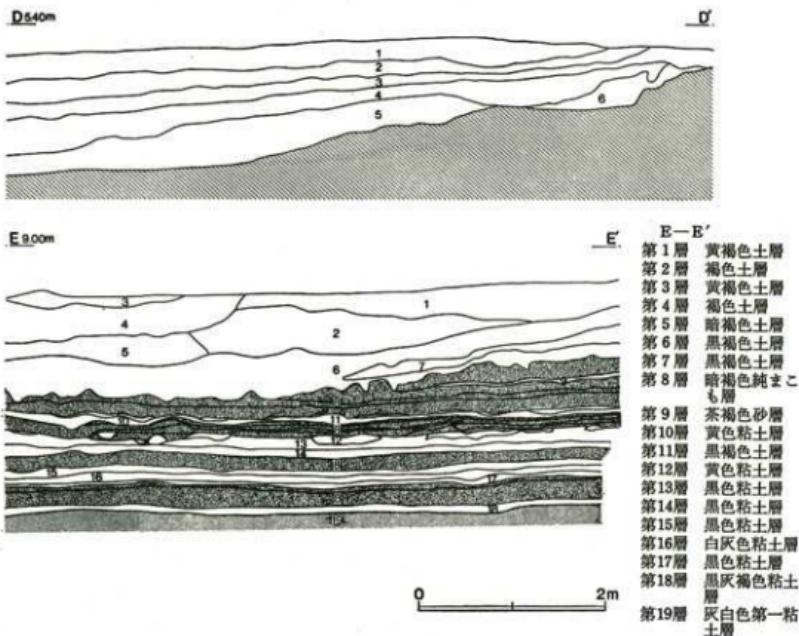
以上、層序の概要を述べた。調査はまず重機により上層を除去し、E—E'の土層断面を作成した。この時点では上層の第1層から第7層までが盛土らしいということで終了していた。つづいて区全体を標高5.4mまで削除した。この時点で区北側と西側に粘土の盛土が植物遺体の上に認められ、なお西面では埋め立ての土が流れ出ないように柵を作っているのが検出された。そこでA—A'、B—B'を作図したが、E—E'との関連はつかめなかった。C—C'、D—D'は、遺物包含層の層序である。

### I-4区(第67図)

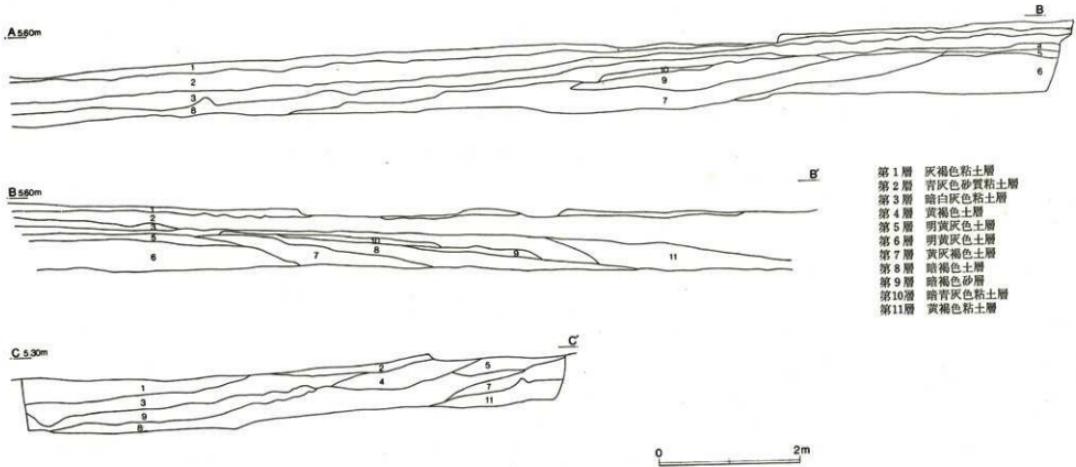
A-A'、B-B'は南東コーナーを、C-C'は東西土層断面の北壁で作図を行った。

第1層(灰褐色粘土層)：含水性中、しまりや良。少量の炭化木材、種子を含有。第2層(青灰色砂質粘土層)：砂質で色調は青灰色を呈する。最大0.5cmの少石を少量含有する。炭化木材、種子を多量に含む。第3層(暗白灰色粘土層)：含水性小、しまり良。多量の炭化木材、少量の種子を含有。層の中部からは砂が含まれ、0.3cm程の小石も含まれるようになる。下半は赤褐色化している。第4層(黄褐色土層)：砂質層で2~3cm程の小石を多量に、また、淡青灰色粘土をブロック状に含有する。第5層(明黄灰色土層)：粘性中、含水性中。第6層(明黄灰色土層)：第5層と類似するがやや明色を呈する。しまりが悪い。第7層(黄灰褐色土層)：しまり良。上半は砂質、下半は粘土質である。1cm程の小石、炭化木材、種子、青灰色・明黄色粘土(ブロック状)を少量含む。第8層(暗褐色土層)：第5層と類似する。第9層(暗黄褐色砂層)：第7層と類似するが暗い色を呈する。しまりが良い。炭化木材、種子、青灰色粘土(ブロック状)を少量含む。第10層(暗青灰色粘土層)：含水性中、しまり良。炭化物、種子、砂を少量含有する。第11層(黄褐色粘土層)：色調は第4層に類似するが、含有物は極度になくなる。

第5~6層が台地部からつづく土層であり、そこに流れ込むように7~11層が堆積しており、第1~4層はその上全体に、堆積している。



第66図 伊奈氏屋敷跡I-3区土層断面図(2)



第67图 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区土層断面図

## 土器

当遺跡から出土した土器は、総量でコンテナパット30箱にのぼっている。その大部分は縄文時代後期中葉から同晩期前葉に比定されるものであり、わずかに早期末の土器が出土している。ことに、安行式期の土器が主体を示しており、他の土器は比較的出土量が少なかった。なお、これらの土器はいずれの地区においてもほぼ同一層から出土している。

出土はI-4区から最も多く、次にI-3区からの出土が多かった。I-3区、I-2区、I-3区では、まったく土器は検出されしなかった。また主体を示す安行式期の土器の傾向としては無文土器が多く、また底部土器も見られた。

一方、表裏面に炭化物の付着が明瞭に観察される土器が多数出土しており、低湿地にある遺跡のためか非常に良好な保存状態を見せていている。

以上、記述を進めるにあたり、第1群から第5群に大別し、個々については観察表として示した。

第1群 縄文時代早期後葉

第2群 縄文時代前期中葉

第3群 縄文時代中期後葉

第4群 縄文時代後期中葉

第5群 縄文時代後期末葉～晩期前葉

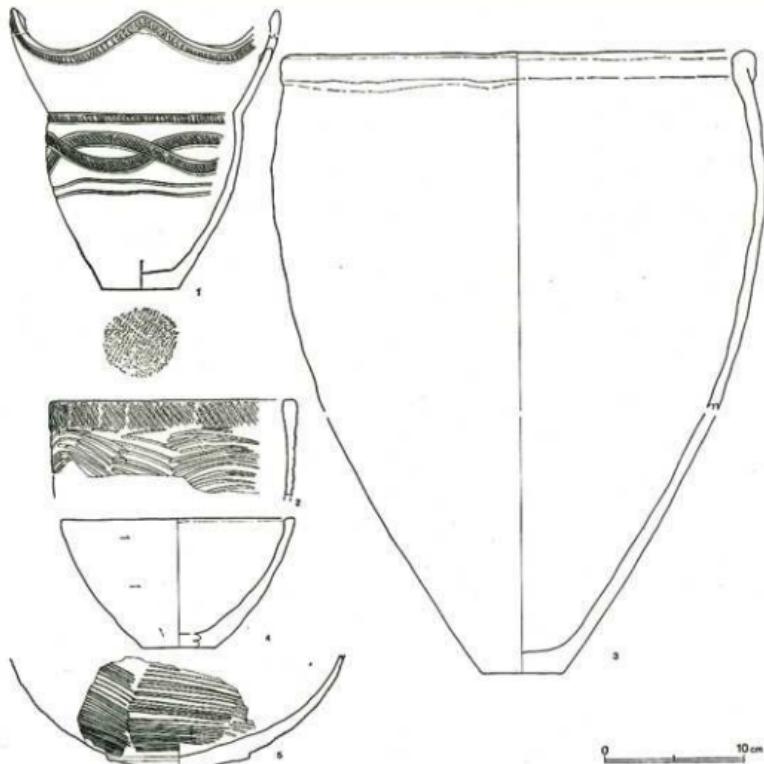
土器は、出土区ごとに説明を行なっていくことにする。

## 調査区出土土器観察一覧

### I-1区（第68・69図）

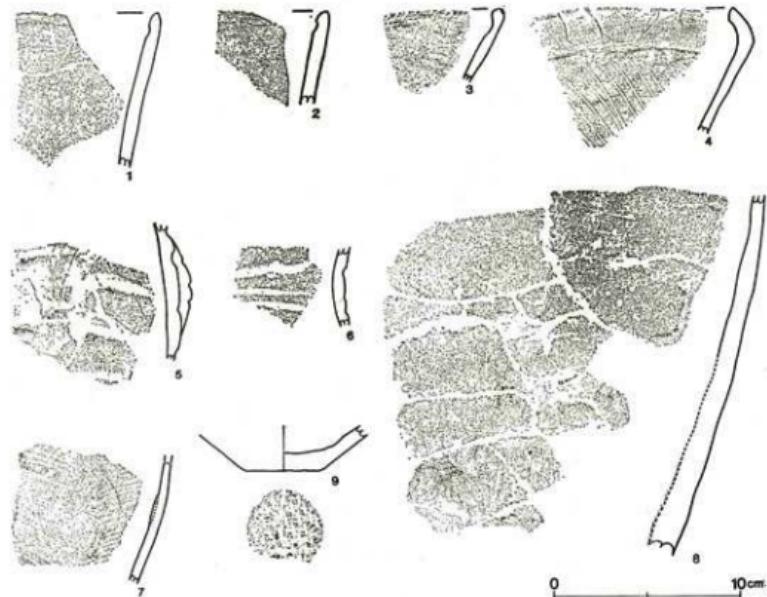
番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
68-1	4-A	4単位の波状口縁を呈している。口縁は立ち気味に内彎し、胴部で括れて、上半部が朝顔状に開き、下半部が膨らみながら底部へ移行する器形を呈する。波状口縁の一部が欠損するがほぼ完形品である。口径19.5cm、底径5.5cm、器高20cmを測る。口縁部と括部に2本の沈線間にキザミが施文されている。胴部は2本対の沈線が2本波状に施文されレンズ状の文様を5單位作っている。胴中位にも2本対の沈線が巡る。縄文はRLである。	黒色に光る粒子及び砂粒を含む。焼成は良好である。色調は黒色である。	1号丸木舟直下より出土する。
2	5-A	口縁は直線的に立ち上がる。口径18cmを測る。口縁部に縄文RLしが施文される。胴部には横走する条線が描かれる。	胎土、焼成、色調は同上。内面に黒色の炭化物が附着している。	
3	5-A -1	口縁はやや内彎し、胴部上半でやや膨らみを持ちゆるやかに底部に至る深鉢形土器である。口唇部は外側におりかえられ肥厚している。口径33.4cmを測る。無文土器である。	胎土、焼成同上、色調は暗褐色を呈する。	

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
68—4	5—D <sub>2</sub>	無文の土器で、桃状を呈する浅鉢である。口唇部はやや丸味を帯びており、内側に若干肥厚する。口径17cm、底径5cm、器高9.4cmを測る。器面は、左→右に向って器面調整が行なわれている。	胎土、焼成同上。色調は黒褐色を呈する。内面中～下半に黒色に光る付着物がある。	
5	4—D	横走の条線が器面全体に施文されている。底部付近の破片であり、内面は研磨されており、浅鉢形を呈する土器と推察される。	砂粒、黒色の粒子を含む。焼成は良好である。色調は黒褐色を呈する。	
69—1 3	4—A <sub>7</sub>	無文の土器である。あるいは口縁部に無文帶を有する土器の一部かもしれない。口縁内側に一条の沈線が巡る。3は口唇部にヘラ状工具によるキザミが巡っている。	白色粒、砂粒を多量に含む。焼成良。色調1・2は灰白色、3は黒色を呈する。	



第68図 伊奈氏屋敷跡I-1区出土土器実測図

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
69-4	4-A <sub>4</sub>	口唇部が内屈する深鉢形土器と思われる。口縁肩部以下に、ヘラ状工具により斜位の多条の沈線が描出されている。	砂粒を含む。焼成良、色調黒色を呈する。	
5・6	5-A	棒状工具による圧痕を有する紙長のコブ状の貼付文を有する、深鉢形土器であろう。沈線によるモチーフが器面をかざる。	砂粒を多量に含む。焼成良。にぶい橙褐色を呈する。	
7	5-A <sub>4</sub>	横走の浅い条線が施された土器である。内面に厚く炭化物が付着している。	胎土、焼成、色調は4に同じ。	
8	5-A <sub>4</sub>	無文の土器である。	砂粒、小石粒を含み、全体的にザラついている。焼成やや不良、色調にぶい黄褐色を呈する。	
9	5-A	底部である。底面には2本越2本浸の網代を有する。	砂粒、黒色に光る粒子を含む。焼成は良好である。色調は黒色を呈する。	

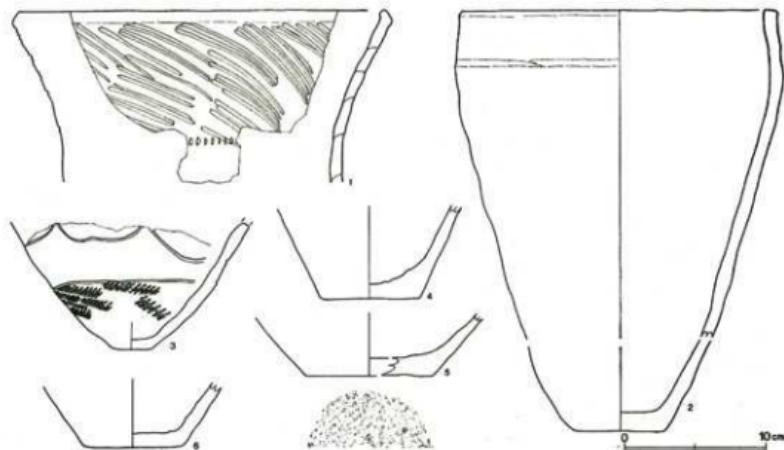


第69図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ-1区出土土器拓影図

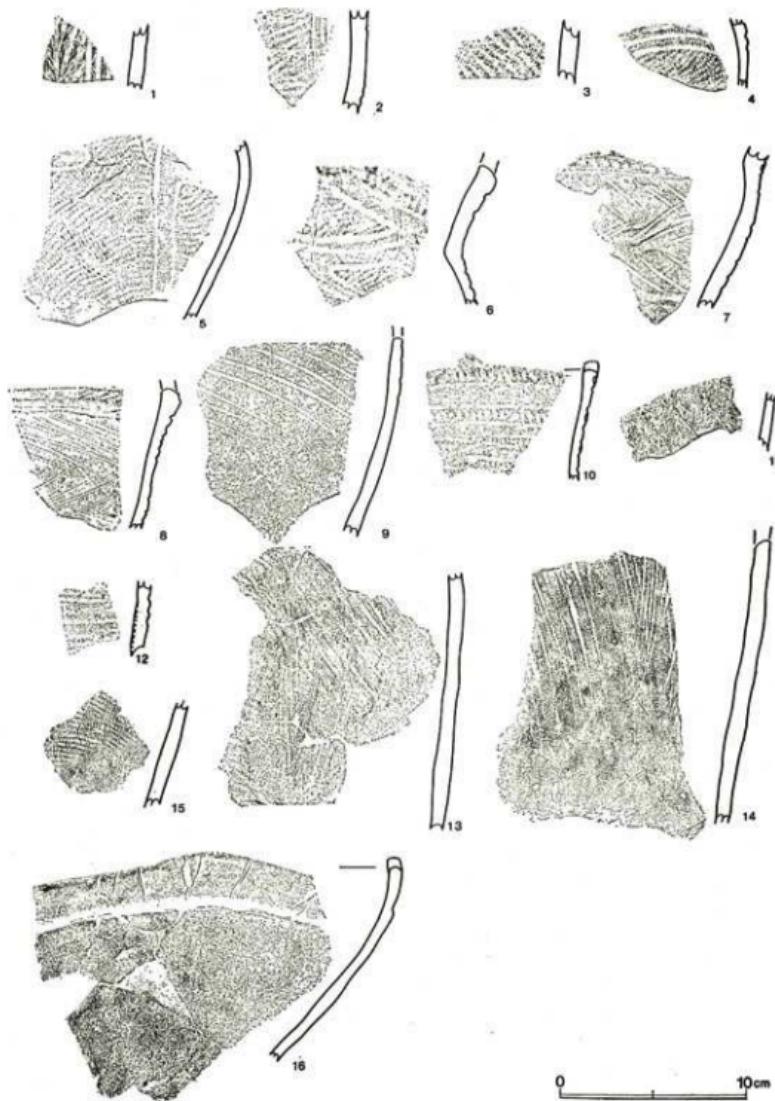
## I-2区(第70・71図)

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
70-1	4-A <sub>1</sub>	口唇部が内屈し、口縁が開く平縁の深鉢形土器である。口径26.4cmを測る。内唇部は無文であり、括れ部にヘラ状工具によるキザミが巡る。口縁部は横走の幅広の条線が施文される。頸部には無文帯を有する。	砂粒を含む。焼成良、色調にぶい褐色を呈する。	
2	5-A <sub>1</sub>	口縁部で内傾し、ゆるやかに底部に向う、平縁の深鉢形土器である。口径21cm、現高23.8cmである。無文土器である。	砂粒を多量、小石を少量含む。焼成良、色調灰白色を呈する。	
3	4-A	底部付近の土器である。上部には棒状工具による弧線文が認められる。下半にも沈線が巡り、以下原体LRの縄文が粗に施文されている。	胎土、焼成同上。色調黒褐色を呈する。	
4 6	4・5 6-A	底部片である。底径4は7cm、5は9cm、6は7cmを測る。5は1本越1本潜の網代痕を有する。	胎土、焼成同上。色調4は赤褐色、5・6は明灰褐色を呈する。	
71-1 2	1	貝殻状工具による、縱走、斜走の条痕が施文される。	胎土に繊維を若干含む。焼成は良好である。色調は淡褐色を呈する。	
3	2	原体RLの縄文が施文されている。	胎土に繊維を含む。焼成は良好。色調は褐色を呈する。	
4	3	竹管状工具による平行沈線が横走する。地文に原体LRの縄文が施文される。	白色粒、砂粒を含む。焼成良。色調褐色を呈する。	
5・6	4-A	深鉢の胴部破片。棒状工具による沈線間が磨消されたものである。地文に原体LRの縄文が施文される。6は、屈曲部分であり、上部には列点が描かれている。	砂粒を含む。焼成良。色調、5は黒色、6はにぶい黄褐色を呈する。5は内外面に黒色の付着物が認められる。	
7・8	4-A	深鉢の胴部破片である。横走する2本の沈線間に同様工具による波紋文が施文され。7は上部に棒状工具による列点が、8は原体LRの縄文が施文されている。	胎土、焼成同上。色調7は外面褐色、内面黒色を、8は黒色を呈する。7は外面上半に炭化物が付着している。	
9・11 13・14	5-A <sub>1</sub>	深鉢の底部付近の胴部破片である。地文に斜行する条線が施される。	胎土、焼成同上。色調は黒褐色を呈する。11は外面に炭化物付着	
10	5-A	口唇部に突起を有する。平縁の深鉢形土器である。棒状工具による2本の沈線間にキザミが施されたものが、4段にわたり巡っている。	胎土、焼成同上。色調は黒色を呈する。内外面に炭化物が付着する。	

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調 等	備 考
71-12	5-A <sub>a</sub>	幅広の横走の条線が施文されている。下部の土器断面部には黒色に光る炭化物が附着しており、土器が欠損した後も使用したものと思われる。	胎土、焼成同上、色調にぶい褐色を呈する。	
15	5-A	底部付近の縄文土器片である。原体RLの縄文が施文される。	胎土、焼成同上。色調外面明褐色、内面黒色を呈する。	
16	4-C	小波状を呈する鉢形土器である。口縁部でやや内凹し、体部はゆるやかに底部に移行する。口縁部には段を有している。	砂粒を含む。焼成良。色調黒色を呈する。	



第70図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ-2区出土土器実測図



第71図 伊奈氏屋敷跡I—2区出土土器拓影図

## [一四区(第72~84図)]

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
72-1	4-A <sub>2</sub>	胴部に括部を有する深鉢形土器である。口縁部に添い太い隆帯によって文様が作出されている。括部に2本を単位とする沈線が巡る。	砂粒を含む。焼成やや悪い。色調にぶい黄橙色を呈する。	
2	5-A <sub>2</sub> -I	口縁が内傾し、緩やかな脛らみをもって底部に至る深鉢形土器である。口径23cm、現高24.5cmを測る。平縁を呈し、口唇部は肥厚している。胴上半部を沈線で区画した4帯の隆起縄文帯が巡っている。さらに文様を分割する小突起が付されている。縄文は原体RLによる。胴下半部は斜走する条線が施文されている。	砂粒を含む。焼成は良好。色調は上半黒褐色、中位黒褐色、下半にぶい褐色を呈する。外面胴部には炭化物が付着する。	
3	5-A <sub>1</sub> -I	大形の波状を呈し、胴部で強く括れる深鉢形土器である。胴上半部のみ現存している。口径推定22.5cmを測る。口縁に平行した2条の沈線区画に原体RLによる縄文が施され、それが2帯平行して描出されている。波頂下には指頭圧痕を有する縦長の瘤が貼付され、文様を分割している。また、縄文帯上には継位に刻目の入った瘤が付される。胴部括れ部には帯状に縄文帯が巡る。	胎土、焼成同上。色調黒色を呈する。	
4	5-A <sub>2</sub> -I	口縁が内傾し胴上半が膨らんだ深鉢形土器である。72図2とほぼ同様の形状を示している。推定口径28.5cmを測る。胴上半には沈線で区画した3帯の隆起縄文帯が巡っている。また、破片であるため単位は明確でないが口縁から垂下する短い隆帯が施され、文様を分割している。胴下半部は無文となっており、左上→右下方向への荒い器面調整を認めることができる。	砂粒を多量に含む。焼成良。色調は上半黒褐色、下半は橙褐色を呈する。外面口縁部、内面部付近に炭化物の付着が認められる。	
73-1	5-A <sub>2</sub> -I	「く」の字状に屈曲した口縁が朝顔状に開き、胴上半で張る深鉢形土器である。推定口径21.4cmを測る。口縁から屈曲部さらに胴上半部にかけて文様がみられる。口縁は小さな連続する波状が巡る。波状に平行して2本を単位とする沈線が描かれている。一方胴上半部には2本の沈線が巡り、胴下半部の無文帯と区画している。口縁とその区画内には沈線によって三叉文、渦巻状文等が描出されている。なお、胴部に施文される区画文は安行式期では、胴部の最大径付近に施されている。残存1/4	胎土、焼成同上。色調黒褐色を呈する。	残存1/4

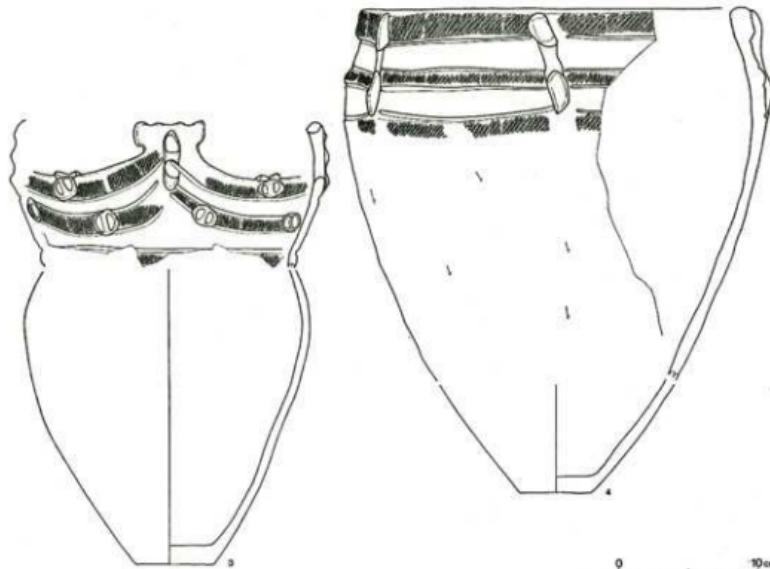
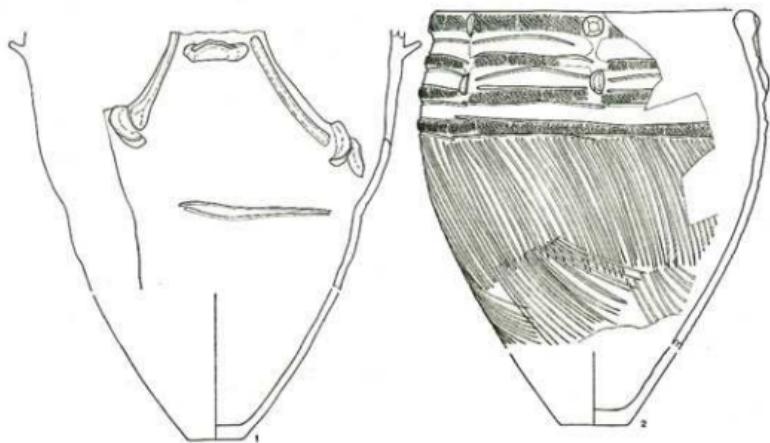
番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調 等	備 考
73—2	5—A <sub>2</sub> —II	口縁が内傾しながらもや立ち上がりを見せており、深鉢形土器である。沈縫のみにより文様が描かれている。口径（推定 27.4 cm）、現存高 28.5cm を測る。横長の区画文が、2段巡っている。さらに文様を分割するように横位に刻目に入った縱長の瘤が貼付される。胴上半には下向きの連弧文が描かれ、胴部無文帯と区画している。	胎土、焼成同上。色調はにぶい橙褐色を呈する。	残存 1/4
74—1	5—C	沈縫区画内に文様が施された土器である。瘤を文様の中心に置き、所謂玉捨三叉文のモチーフを有する土器である。原体 L R による文様が施されている。胴部径（推定 12cm）を測る。沈縫間はナデが丁寧に行なわれ滑沢を帯びている。	胎土、焼成同上。色調暗褐色を呈する。	
2	5—C	口縁が外反し、胴部が球状を呈する深鉢形土器である。口径（推定 23.7cm）を測る。胴部中央にはエラ状に張り出した隆帯が一条巡っている。隆起帯および隆起縄文帯によって文様が描出されている。また、エラ状の隆帶上部には縱長の刺突が施されている。なお要所には瘤が貼付される。	胎土、焼成同上。色調は明褐色を呈する。	
3	5—D <sub>2</sub>	浅鉢である。口縁が内凹しており、丸味をもちらながら底部に至る。口縁が梢円形を呈しており、長径部には 2 個の突起、短径部には 1 個の頂部に刻目を有する突起が貼付される。胴部には、沈縫による流水文状の文様が描かれる。原体 R L の文様が、口縁部、胴中位、底部に施文される。口径は、（推定長径 11.5cm、短径 10cm）を測る。	黒色に光る粒子、砂粒を含む。 焼成良、色調黒褐色を呈する。	
4	5—D <sub>1</sub>	波状で、底面が丸味を呈する浅鉢形土器である。口径 18cm を測る。波頂部は、隆帯等によって飾られており、口縁部の波状に合わせて施文された沈縫区画内に原体 L R の文様が施文されている。さらに波状間に一つおきに、沈縫区画間に瘤状突起や刻目のある隆起帯がつけられる。	砂粒を少量含む。焼成良。色調は上半が明褐色、下半黒色を呈する。	
5	5—D <sub>2</sub>	口縁部が「く」の字に屈曲し、胴部でふくらみを有する浅鉢形土器である。口径 19cm、器高 9cm を測る。口縁に 1 本の沈縫が巡り、その直下に渦巻文と背合わせの横位の弧状沈縫が交互に描かれている。胴部との区画には横長の刻目を有する隆起帯が巡る。胴下半には上向きの連弧文、沈縫が巡る。地文には原	砂粒を含む。焼成良。色調はにぶい黄褐色を呈する。	

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調 等	備 考
		体 RL の縄文が施文される。		
74-6	5-C	口縁が内彎する浅鉢形土器かと思われる。一条の沈線を中心として向い合った弧状の沈線文が胴部に描出されている。底部付近には2本の沈線が巡る。	砂粒、焼成同上。色調は灰白色を呈し、黒色斑がまだらに入る。	
7	5-E	平縁を呈する土器であり、口縁部の屈曲状態から台付土器かと推察される。口径25cm。沈線によって区画された隆起縄文帯が4帯施されている。原体RLの縄文である。以下、条縁によるモチーフが描出されている。	砂粒を少量含む。焼成良。色調黒褐色～灰褐色を呈する。	
8	5-E	台付土器の一部である。屈曲部には継目が施された隆起帯が巡る。	砂粒、金雲母粒を含む。焼成良。色調は淡褐色を呈する。	
9	5-D	無文の碗状を呈する土器である。底部はあけ底を呈するものである。口径19cm、底径6.4cm、器高11cmを測る。口縁部付近は、右→左、胴部には左上→右下方向への器面調整がなされている。	砂粒を多量に、小石粒を少量含む。	
10	5-F	注口土器であり、口縁部付近を欠く。胴部中位に原体LRの縄文を地文として、3本を単位とする沈線が巡っている。他は、無文である。底部には網代痕を有する。	砂粒を含む。焼成良。色調はにぶい黄橙色を呈する。	
11	5-D	底部を欠くため明確でないが、浅鉢ないし皿状を呈する土器である。口径（推定20cm）を測る。口縁部に小突起を有するものの、器面は無文の土器である。右下→左上への器面調整がなされている。	胎土には黒色、白色の砂粒を含む。焼成は良好である。色調黒褐色を呈する。	
75-1	4-A	口縁でやや外反し、胴上位で軽く括れる、平縁の深鉢形土器である。口径20cm、現存高15.5cmを測る。器面全面に、左上→右下の条縁が粗く網目状に施文される。一部に、条縁を分割するように沈線が垂下している。	小石粒を多量に含む。焼成良。色調灰白色を呈する。	
2	5-A —1	口縁部はやや内傾し、胴上半でわずかに膨らみ、緩やかに底部に至る平縁の深鉢形土器である。口径25cmを測る。所謂紐縄文系の土器であり、口縁と胴上半に列点による紐縄文が表現されている。地文は上位では継目の条縁が、さらに下半には右下→左上への条縁が施文されている。	胎土に砂粒を含む。焼成良。色調は黒褐色を呈する。内面下半に炭化物の付着が認められる。	
3		口縁がやや内傾し、胴上半でやや張りをも	黒色に光る粒子、白色粒子、砂	

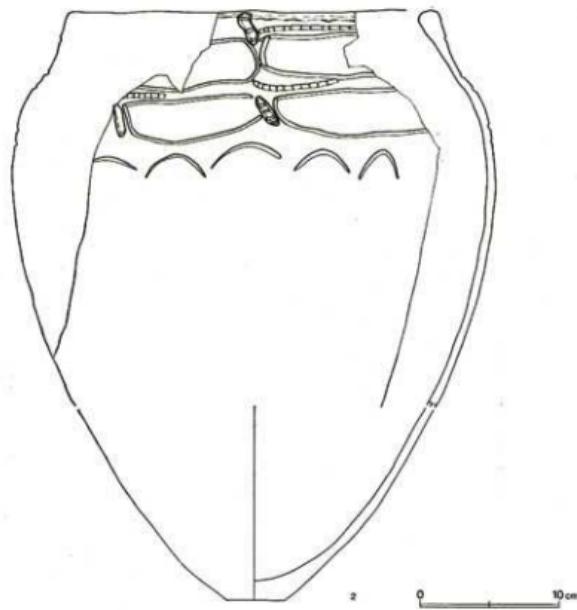
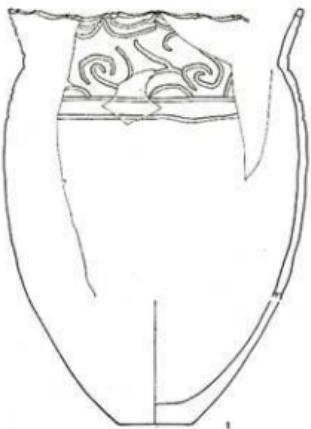
番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
		ちながら底部に至る平縁の深鉢形土器である。口径20cmを測る。口縁と胴上半には割目文による紐線文が巡る。紐線文は沈線により区画されている。紐線文間に斜行する条線が施文される。胴部の条線は浅く一部に施文されている。	粒を含む。焼成良。色調明黄褐色を呈する。	
75-4	5-A <sub>1</sub> -I	口縁が直線的に開く、深鉢形土器である。口縁内側には、段を有する。口縁と胴上位には割目文を施した粘土紐が巡る。紐線文間に横行する条線が施文され、分割するように継位の沈線が2本描かれている。胴部は斜行する条線が施文される。地文には浅く繩文が施文される。	砂粒を含む。焼成良、色調は淡橙色を呈する。	
5	5-A <sub>1</sub> -I	口縁が内側する平縁の深鉢形土器である。竹管による押引を有する粘土帯が貼付される。地文に横走する条線を施文し垂下する沈線により分割し、一つおきに磨消したものである。全体に滑沢を帯びている。	砂粒をやや多く含む。焼成良、色調赤褐色を呈する。	
6	5-A <sub>1</sub> -I	口縁が直立する平縁の深鉢形土器である。口縁部には棒状工具による押圧をもつ粘土紐が貼付される。横行する条線が継位に施文される。	砂粒、黒色に光る粒子を多量に含む。焼成良。色調明褐色を呈する。	
7	5-A <sub>1</sub> -I	口縁部に2帯、くびれ部に1帯隆起繩文帯が巡る。繩文帯は沈線により区画される。口縁隆起繩文帯間は綾杉状の条線が施文され、それを分割するように継位に2本沈線が描かれる。	胎土、焼成同上、色調淡橙褐色を呈する。	
76- 1~4	5-A <sub>1</sub>	無文の深鉢土器である。76-1~4は、口縁が内傾し、胴上半でやや張りをもちながら底部に至る。1は口径25cm、現高43cm、2は口径(推定43cm)、現高38cm、3は口径(推定30cm)、現高23.5cm、4は口径36cm、現高29cmを測る。1は口唇部が肥厚しており、口縁部は横位の、胴部上半は右下→左上への、胴部は継位の器面調整が成されている。3は継位の器面調整が行なわれている。4は口唇部が内側にそがれた様な形態をしており、口縁部では継位の胴部では継位の器面調整が成されている。77-1は直線的に開く器形を呈している。口唇部がやや肥厚している口径(推定37cm)、現高35cmを測る。2は口縁部が内側にそがれており、口縁部の外側に粘土を折り返している。口径22cm、現高19cmを測	共に胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調、76-1はにぶい赤褐色、2は暗褐色、3は明橙褐色、4はにぶい橙色、77-1は暗褐色、2は黒褐色を呈する。	
77- 1~2				

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調 等	備 考
		る。口縁部は横位の、胴部には縦位の器面調整が施されている。		
78— 2~8 79— 1~10 78—1	4—A 5—A 5—F	底部を一括した。78—1、4、5、6、7 8は網代痕を有する。78—1は屈曲部に原体 L Rの繩文が施文され、瘤が貼付される。2 4・5は条線が施文されている。3は2本単 位の沈線が横走し、地文に原体Lの無筋の繩 文が施文される。他は無文である。内面に炭 化物の付着が認められるものが多い。	胎土には砂粒を含む。焼成は良 好である。色調。78—1は黒褐色 色、2・4・5、79—8は灰黃褐色 色を呈する。79—1、4はにぶい 赤褐色他は明褐色を呈する。	
80—1	4—C	口縁が内傾しながら開く浅鉢形土器であろ う。口唇部に刻目を有し、口縁部は一条の沈 線が巡る。	胎土・焼成は良好である。色調 は明灰黄色を呈する。	
2	4—D	沈線間に原体R Lの繩文が施文される。	黒色の砂粒を含む。焼成良。色 調。灰白色。	
3	5—F	注口土器であろう。渦巻状の文様が施文さ れる。	胎土・焼成良。色調暗褐色を呈す る。	
4	5—A <sub>2</sub> —I	口縁に竹管状工具による集合沈線が横方向 に施文される。口唇部には、縦長の瘤が貼付 される。口縁には地文に繩文が施文される。	胎土・焼成良、色調黒褐色を呈 する。	
5・9 6~8 10	5—A <sub>2</sub> —I 5—A <sub>2</sub> —IV	波状口縁を呈する土器である。口縁部にそ って数帯の陸起繩文帯が施文され、波頂部・ 波底部には縦長の、または横長で縦位の刻目 が施された瘤が貼付されたものである。6、 8、10は沈線により区画がなされている。繩 文は原体R Lが施文される。	胎土・焼成同上。色調。5、9 10は明褐色を呈する。他は褐色を 呈する。	6と8は同一 個体。9と10 は同一個体。
11・12	5—A <sub>1</sub>	幅広の沈線区画内に繩文R Lが施文され、 横長の縦位に刻みをもつ瘤が配されている。	胎土・焼成同上。色調は明褐色 を呈する。	
13・14 17	5—A <sub>2</sub> —I	平縁の深鉢形土器で、沈線により区画され た3帯の繩文帯が施文されるものである。13 は縦長の瘤が貼付される。14の繩文帯間は研 磨されており、縦長で横位の刻目が施された 瘤が貼付される。	胎土・焼成良、色調は明褐色を 呈する。	
15	5—A <sub>2</sub> —I	横位の弧線を描き繩文を施文したものであ る。沈線間に三叉文が描出される。口縁部 には瘤が貼付される。	胎土に砂粒を含む。焼成良、色 調灰褐色を呈する。	
16	5—A <sub>2</sub> —I	2帯の陸起繩文帯が巡り、間はナデられる。	胎土・焼成・色調同上。	
81—1	5—A <sub>2</sub> —I	沈線間に原体L Rの繩文が施文される。	胎土・焼成良。色調褐色を呈す。	

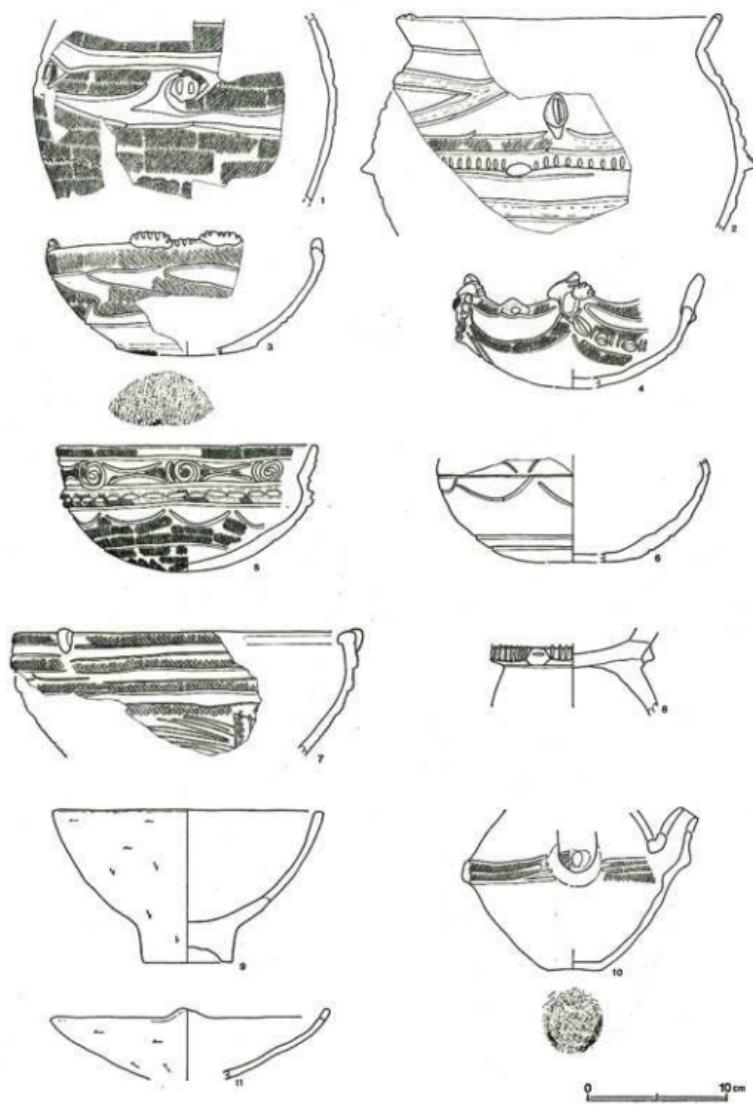
番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調 等	備 考
81—2	5—A	口唇部に指頭圧痕が認められるものである。口縁部には原体RLの繩文が施文される。	胎土・焼成良。暗褐色を呈する。	
3	5—A <sub>1</sub> —II	沈線で区画された口縁部に原体Lの繩文が施文される。下部には弧を描く沈線を有する。	胎土・焼成同上。色調にぶい褐色を呈する。	
4	5—A	沈線により横位の文様が描かれたものである。	胎土・焼成良。黒色を呈する。表面に炭化物が付着する。	
5	5—A	沈線区画内に施された横位の波形文が2帯巡るもの。口唇部には突起を有する。	胎土・焼成良。色調暗灰黄色を呈する。	
6	5—A	沈線により工字状文が描かれる。	胎土・焼成良。黒色を呈する。	
7	5—E <sub>1</sub>	口縁が大きく外反する。隆起縄文帯が巡り、間に斜位の沈線が施文される。要所には刻みをもつ瘤が配される。台付土器と推察されるものである。	胎土・焼成良。色調は暗灰黄色を呈する。	
8	5—D <sub>1</sub>	口縁端部が強く外反する。浅鉢土器と推察される。口縁部には三叉状文を描く。胴部は2本の沈線内に縄文LRが施文される。無文部は磨かれ滑沢を帶びている。	砂粒を少量含む。焼成は良好。色調は表裏面黒色を呈し、内部は灰褐色を呈する。	
9	5—B	口縁部に沈線が巡り、把手の部分は貫通している。小形甕と思われる。	砂粒を多く含む。焼成良、色調は暗褐色を呈する。	
11	5—A	角底土器である。底には瘤が貼付される。	胎土・焼成良、黒褐色を呈する。	
81— 10・13 82— 1～4 6 82—9	5—A <sub>1</sub> —II 5—A <sub>1</sub> —II 5—A <sub>1</sub> —II 83— 1～6	紐縄文系の土器である。81—9・11・13、82—1・8～10、83—2～6は沈線と列点によって紐縄文が表現され、他は、粘土紐を貼付し、表面を半截竹管工具により押捺したもので表現されるものである。多くのものは地文に条線が施文されるものである。81—10、82—7・10、83—1・2は、紐縄間に同手法による斜位及び弧状文が描かれる。82—8は区画内に縄文が描かれる。なお83図の土器の地文は無文となっており、口縁部付近はよくナデられているものである。	焼成はすべて良好である。81—9は砂粒を含み、色調は褐色を呈する。11・13はにぶい黄褐色を呈する。10は黒色に光る粒子、小石粒を含み、色調はにぶい黄褐色を呈する。82—1～8・10、83は砂粒を多量に含み、色調は、まだら状を呈するが、にぶい黄褐色、にぶい黄橙色、暗褐色、黒色を呈する。82—9は白色粒・砂粒を多量に含み器面はザラつく。色調はにぶい黄褐色を呈する。	82—6と83—1は同一個体である。
81—12	5—E	台付土器の台部である。無文を呈している。	胎土・焼成良好。色調灰褐色を呈する。	
84— 1～2	5—A <sub>1</sub>	器面に浅い条線が施文されるものである。1は口唇部がやや肥厚し、その下に左上→右下に斜走する条線が施文されるものである。	砂粒を含む。焼成は良好である。色調は1が明褐色。2が黒褐色を呈する。	



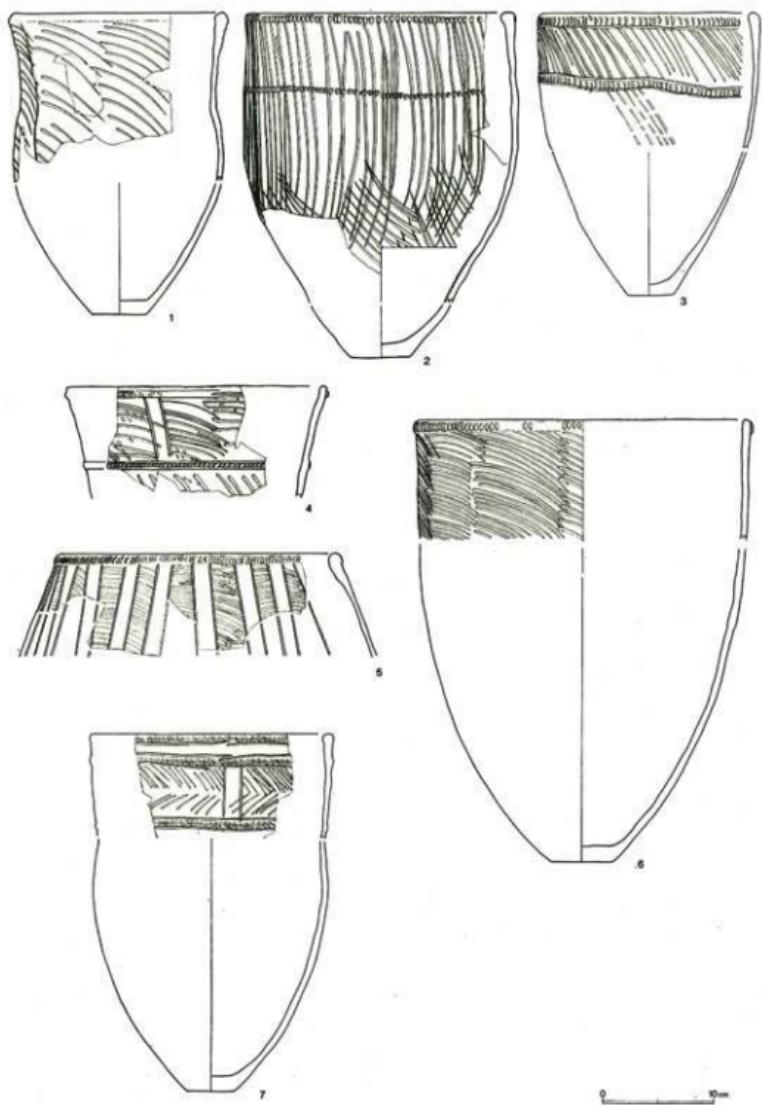
第72図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区出土土器実測図(1)



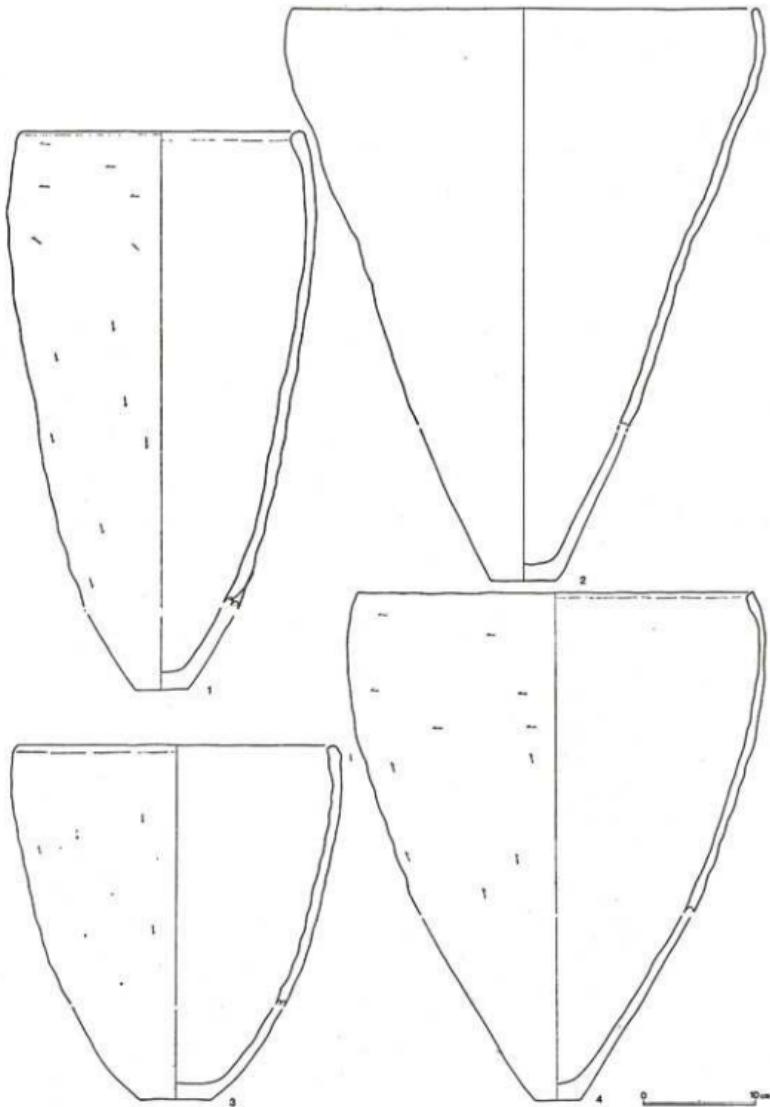
第73図 伊奈氏屋敷跡 I - 4 区出土土器実測図(2)



第74図 伊ノ氏屋敷跡1—4区出土土器実測図(3)

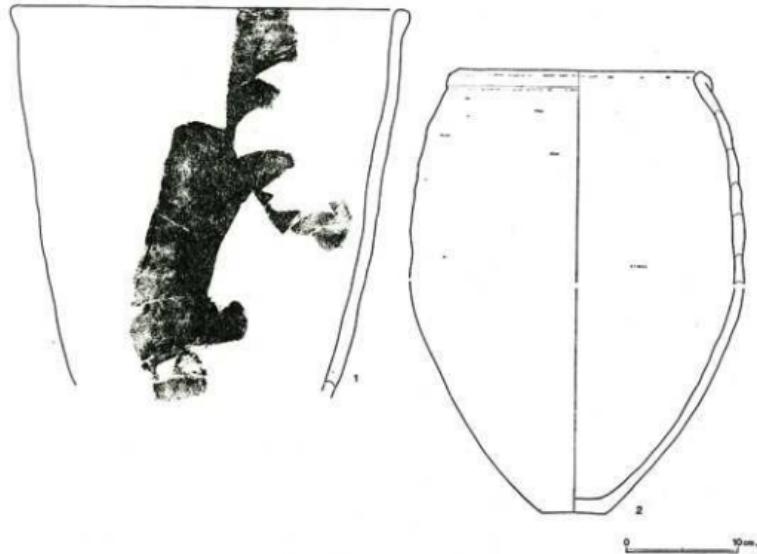


第75図 伊奈氏屋敷跡I-4区出土土器実測図(4)

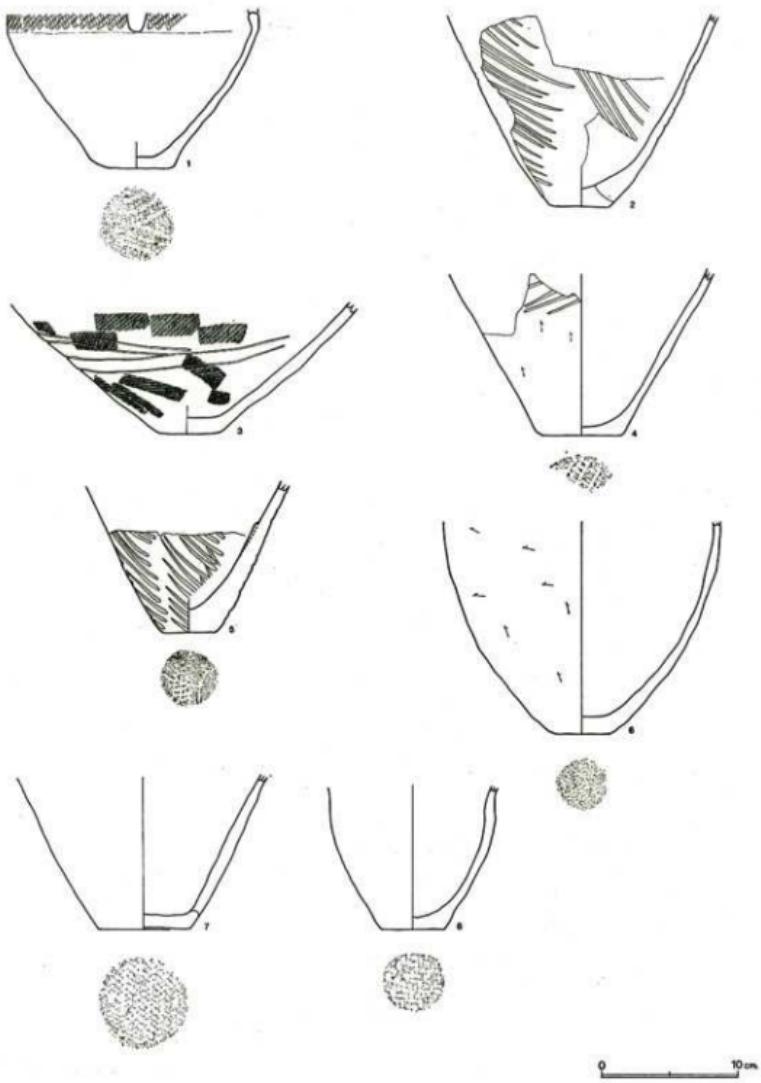


第76図 伊奈氏量敷跡1—4区出土土器実測図(5)

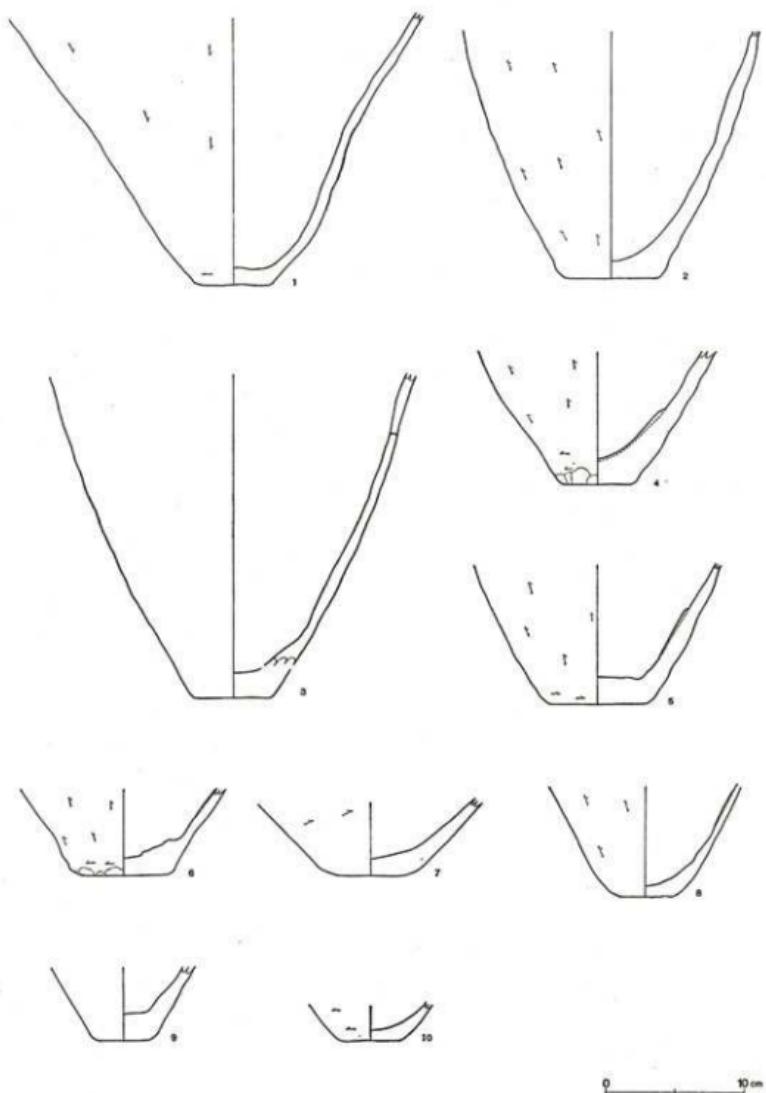
番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
		2は、口縁直下より、左上→右下へ密な条線が施文され、その下部には縱走する条線が認められる。		
84— 3～5 9	5—A <sub>a</sub> —IV	無文の土器である。 口縁が内凹する器形を呈し、口唇部は肥厚しないものである。外面は荒く器面調整を行なわれ、内面は丁寧に調整される。	胎土には砂粒・小石粒を含む。 焼成は良好である。3は暗褐色を呈する。4・9は黒褐色を呈する。5は明黄褐色を呈する。	
84— 6～8 10	5—A <sub>a</sub>	無文の土器である。口縁部が外側に折りかえり、段を作出しているもの。7は折りかえし部に指頭圧痕が施文される。	胎土・焼成は良好。色調6・8は黒褐色、7・10は明黄褐色を呈する。	
11	5—A	底部付近の土器である。上端には棒状工具による沈線が一条巡る。地文は、原体R Lの繩文が、密に施文されている。	胎土には黒色に光る粒子を含む。焼成良。色調暗褐色を呈する。	



第77図 伊奈氏里塚群1-4区出土土器実測図(6)



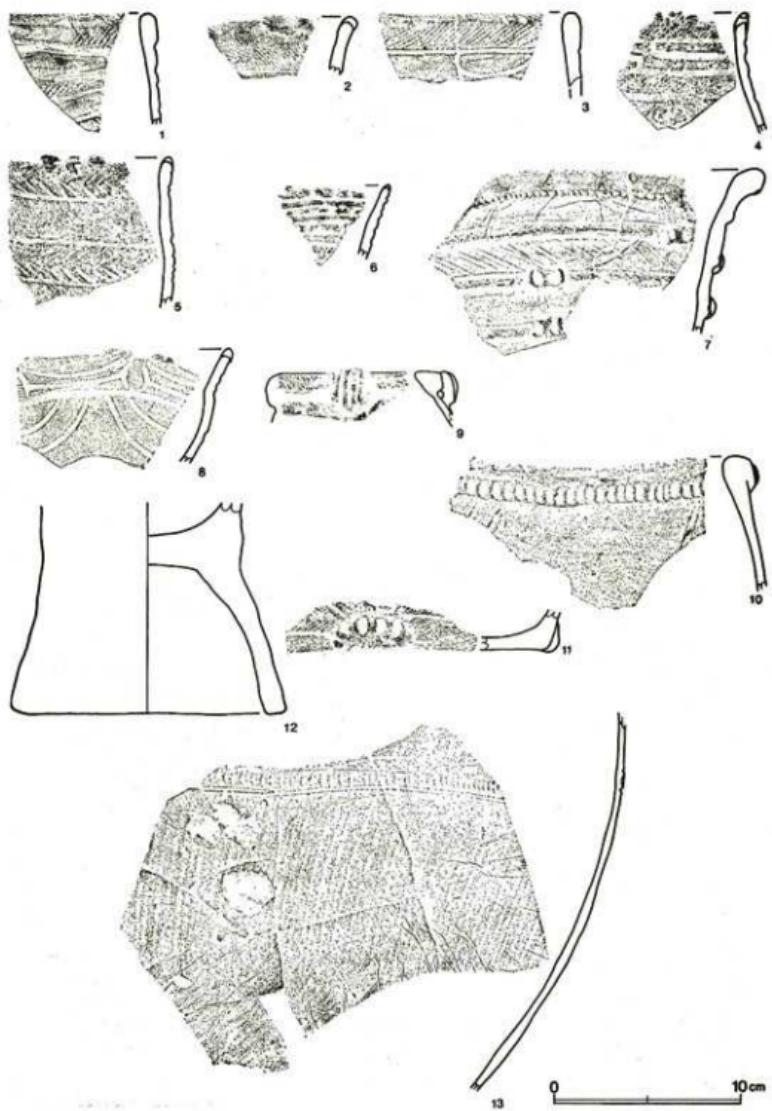
第78図 伊奈氏里敷跡1—4区出土土器実測図(7)



第79図 伊奈氏屋敷跡 1—4区出土土器実測図(8)



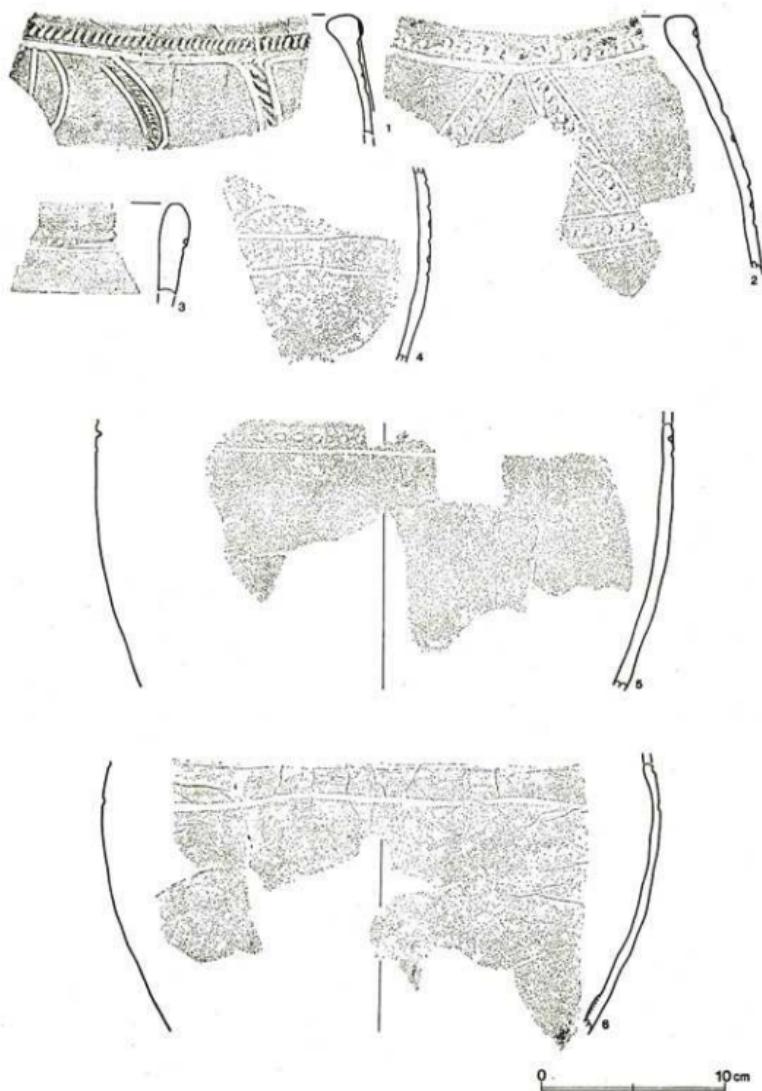
第80図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区出土土器拓影図(1)



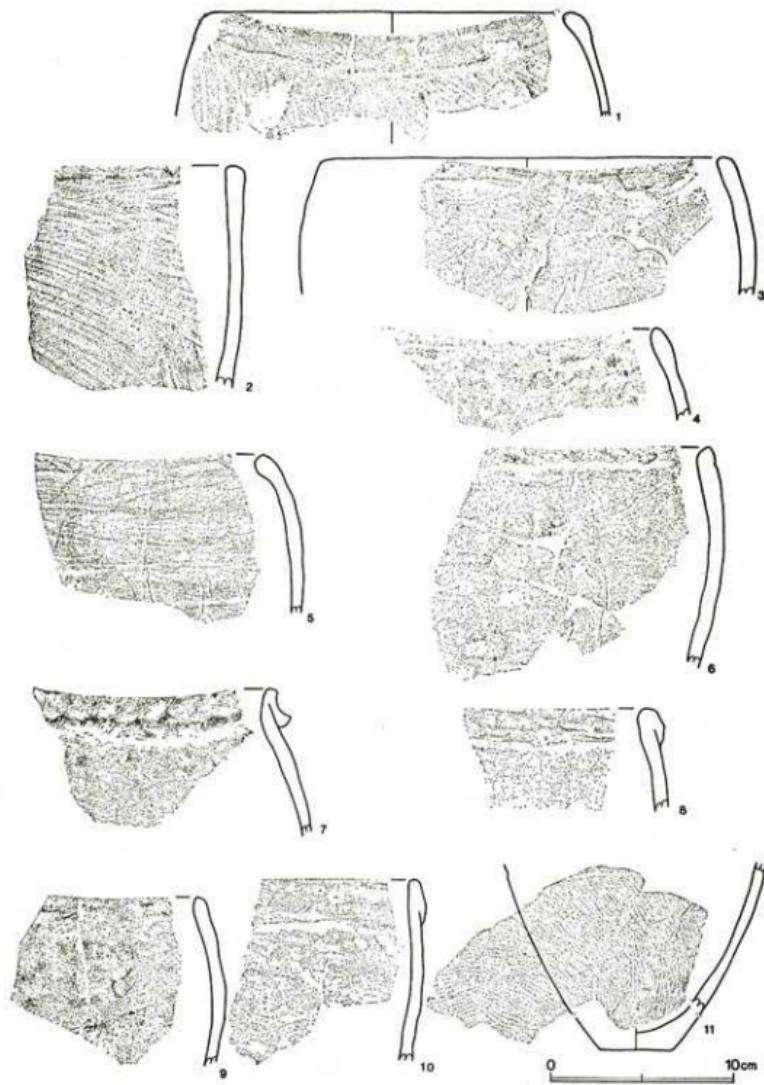
第81図 伊奈氏里敷跡Ⅰ-4区出土土器拓影図(2)



第82図 伊奈氏里敷跡I-4区出土土器拓影図(3)



第83図 伊奈氏屋敷跡I-4区出土土器拓影図(4)

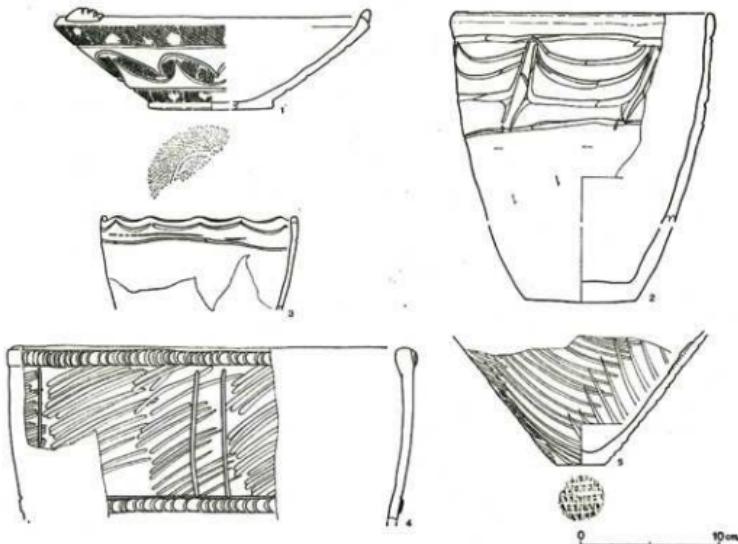


第84図 伊奈氏屋敷跡I-4区出土土器拓影図(5)

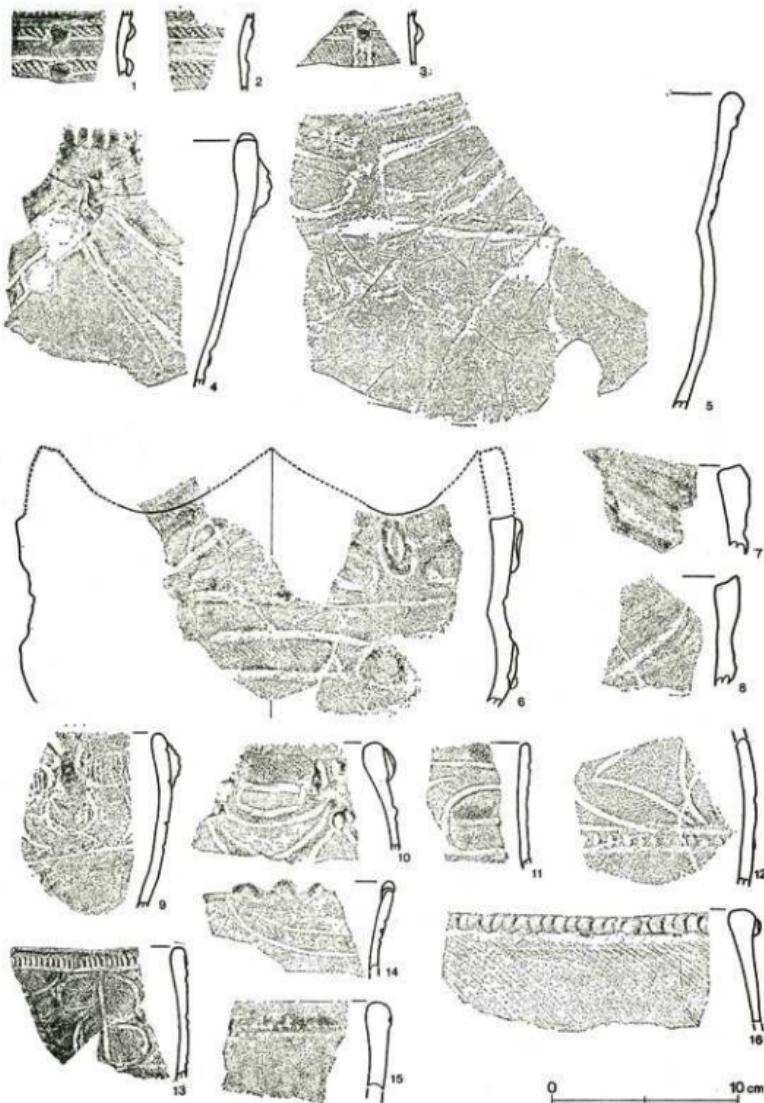
## I-5区(第85~87図)

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
85-1	5-D <sub>5</sub>	口縁部が直線的に開く皿状に近い浅鉢である。口径23cm、底径9cm、器高6.5cmを測る。口唇部には刻目を有する瘤が貼付される。文様は、沈線で区画した口縁、胴部の弧状を呈した入組文内、底部に原体RLの羅文が施文されるものである。	胎土・焼成は良好である。色調は黒色を呈する。	
2	5-C	口縁が直立気味に立ち上る平縁の深鉢形土器である。口径19.2cm、現高15cmを測る。沈線で文様が施文されるものである。口縁に2本の沈線が巡り、2本単位の垂線で縱位に分割し、弧線が施文される。6単位を呈する。	砂粒をやや多く含む。焼成良。色調黒褐色を呈する。	
3	5-A <sub>2</sub>	口縁部が小波状を呈する小形深鉢形土器である。口径15cm、現高16.8cmを測る。口縁に平行して波状に沈線が巡り、さらに胴部との分割のために2本の沈線が巡る。地文は無文である。	砂粒を多量に含む。焼成は普通よりやや劣る。色調両面共に黒色を呈する。	
4	5-A <sub>4</sub> -I	口縁がやや内傾する。紐縄文系の深鉢形土器である。口径30cmを測る。口縁部には2帯粘土紐を貼付し、刻目文を施している。さらに縦に分割するために平行垂線が施文される。地文には左下→右上の条線が施文される。	砂粒を多量に含む。焼成良。色調灰褐色を呈する。	
5	5-A <sub>4</sub>	底部の土器である。地文には斜走する条線が施文される。単位は5単位である。底部には網代痕が施文される。	砂粒を多量に含む。焼成はやや悪い。色調は灰白色を呈する。	
86-1 ~3	5-A	薄手の土器である。2帯の隆起縄文帯が巡り沈線によって区画されている。要所には瘤が貼付される。下半には瘤下に平行な蛇行垂線が描かれる。地文に条線が施文される。	砂粒を含む。焼成良。色調にふい赤褐色を呈する。	同一個体である。
5-4	5-A <sub>1</sub> -IV	口縁が直立し、胴部で張る。波状の深鉢形土器である。波頂・底部には縦長で横位の刻目を有する瘤が貼付される。文様は、隆起帯刻文が口縁及び括部に巡り、波頂部では三角状に区画される。	砂粒でザラ付く。焼成はやや悪い。色調はにぶい黄褐色を呈する。	同一個体である。
6~8	5-A <sub>1</sub> -IV	口縁が内傾し、胴上位で括れる。波状の深鉢形土器である。口縁に縦長で横位の刻目を有する瘤が貼付される。文様は隆起縄文帯により描かれ波頂下では三角状に区画される。	砂粒を多量に含む。焼成良。色調は黒褐色を呈する。	同一個体である。

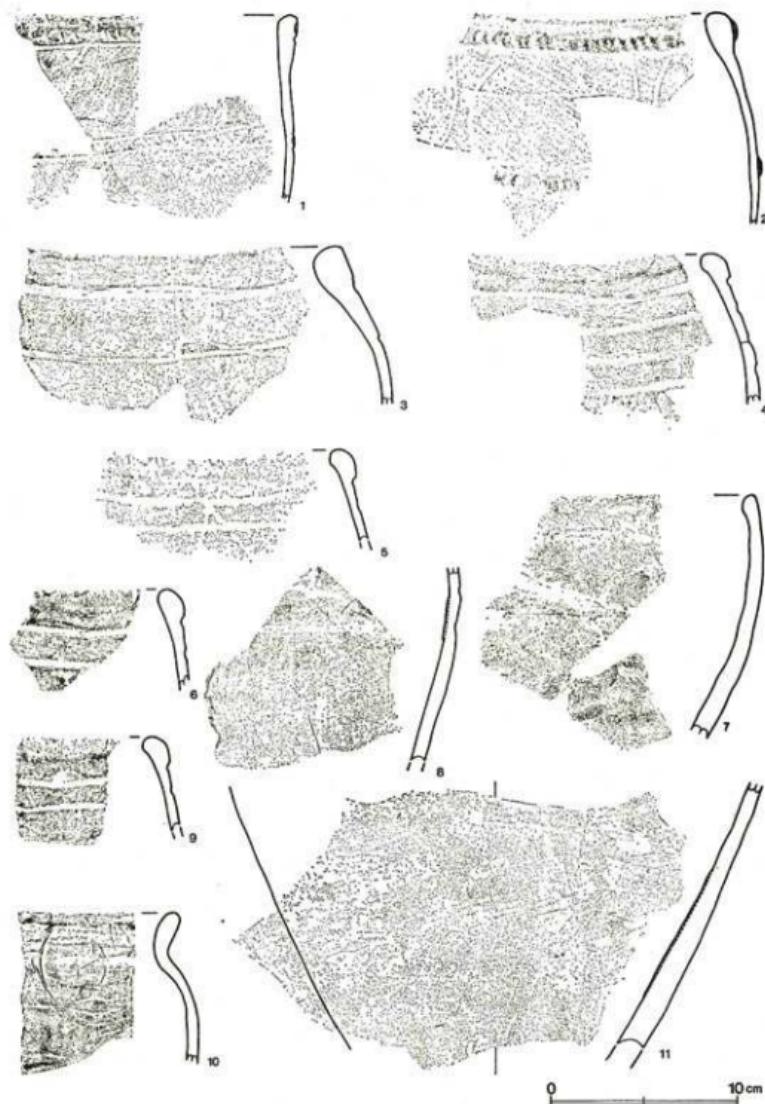
番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
9・13	5-A <sub>1</sub> — I	9は瘤が貼付された両側の沈線区画内に縦位の沈線が施文される。13は口縁に刻目が巡り、そこから垂下する沈線を中心にして上下に弧線が描かれ区画内には細密な矢羽状沈線が施文される。	胎土・焼成同上。色調は黒褐色を呈する。	
10	5-F	隆起繩文帯が口縁及び弧状に描かれる。各所には瘤が貼付される。	胎土・焼成同上。色調にぶい黄橙色を呈する。	
11	5-A <sub>1</sub> — I	2帯の繩文帯間に、弧線文が描かれ区画内に繩文が施文される。	黒色に光る粒子を含む。焼成良。色調は黒色を呈する。	
86-16 87- 1・2	5-A <sub>1</sub> — I	組織文系の土器である。86-16は粘土紐を貼付し、その上に刻目を加えたものであり、87-2は弧線が描かれている。	胎土・焼成同上。色調は86-16が明橙褐色、他は黒褐色を呈する。	
86- 14・15	5-A <sub>1</sub>	沈線と刺突により文様が描かれている。	胎土・焼成良好、黒褐色を呈する。	
87- 3~6 8・9	5-A <sub>1</sub> — II	口唇部が肥厚した、内凹する土器である。口縁に段を有し、横位の沈線が描かれる。	砂粒を多量に含むが、焼成は良好である。色調にぶい黄橙色。	4・5・6・ 9は同一個体
87- 7・10 11	5-B	無文の土器である。10は口縁が「く」字状に括れている。	胎土・焼成同上。色調は、11同上。10は暗褐色を呈する。	



第85図 伊奈氏屋敷跡 1-5区出土土器実測図



第86図 伊奈氏屋敷跡I-5区出土土器拓影図(1)



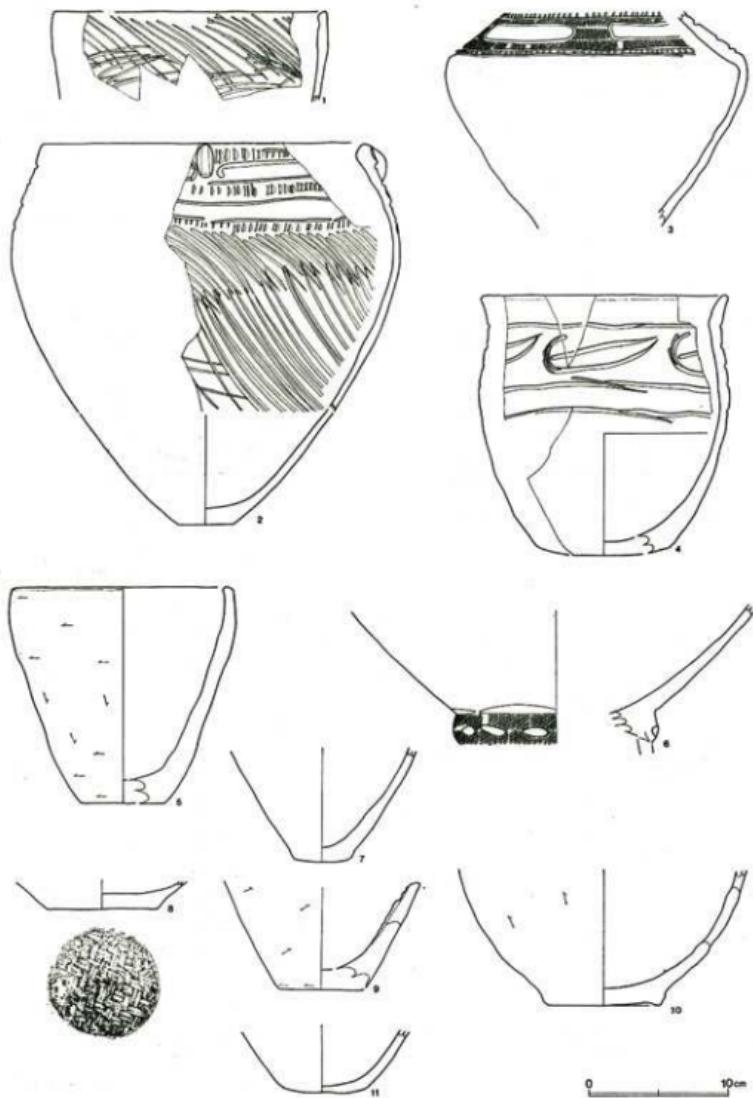
第87図 伊奈氏屋敷跡1-5区出土土器拓影図(2)

## I-3区(第88~95回)

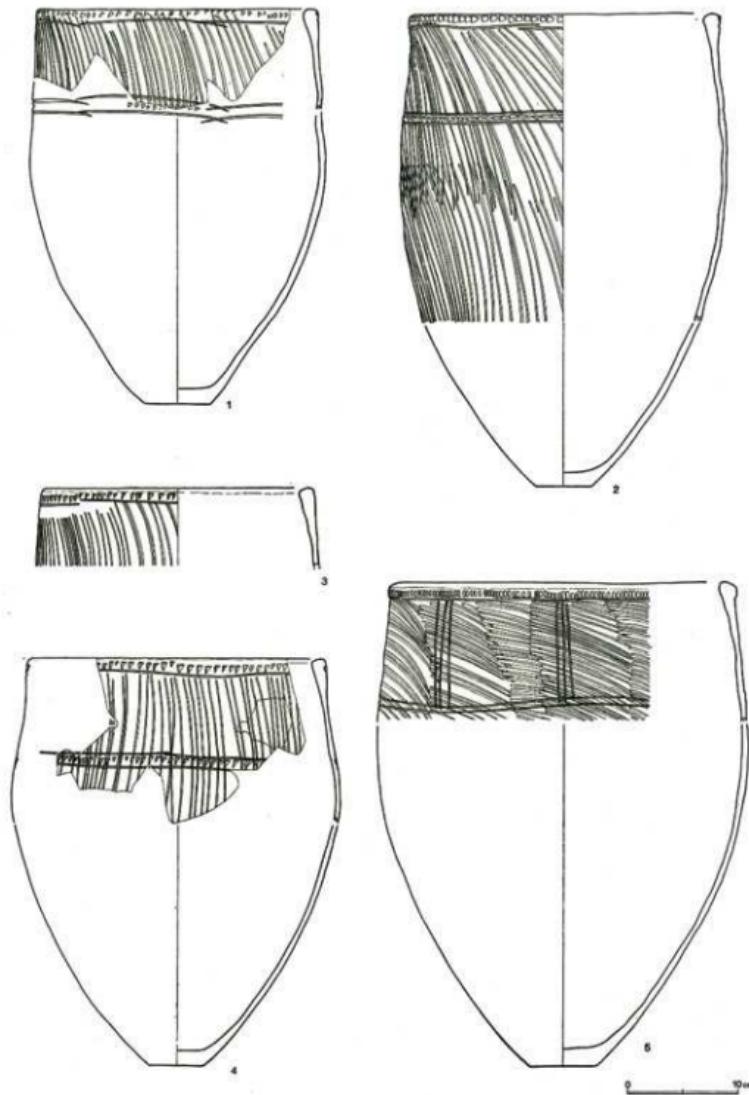
番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
88-1	4-A.	口縁がほぼ直立する平縁の深鉢形土器である。口径(推定20cm)を測る。口縁の内側に一条の沈線が巡る。文様は綾杉状沈線が施される。施文順位は基本的には上からである。	砂粒をやや多く含む。焼成良好。色調外面浅黄色、内面暗灰黄色を呈する。	
2	5-A. -I	口縁が内傾し、胴上半で脛らみ小さな底部に至る平縁の深鉢形土器である。口径(推定24cm)を測る。3帯の沈線と列点による紐線文が口縁に巡る。口縁部には綫長の瘤が貼付され、横走の沈線が垂下し状文を作っている。胴部には斜行する条線が施文される。	黒色に光る粒子、砂粒を含む。焼成は良好である。色調は黒色～褐色を呈する。	
3	4-B	胴部で「く」字状に屈曲する算盤玉状の形態をした、甕形土器である。括れ部と胴部屈曲部とに2条の横線にはさまれた刻み目が巡り、間には横長の枠状文が描かれている。地文に原体LRの縄文が施文され内は磨消されている。胴部はナデられており無文である。	砂粒を含む。焼成は良好である。色調は外面は黒色、内面は灰黄褐色を呈する。	
4	5-C	口縁が「く」字状に屈曲し、胴部がやや張る、平縁の鉢形土器である。屈曲部と胴中位に沈線が巡り、その間に弧線文が5単位描かれている。胴部は無文である。	砂粒を少量含む。焼成は良好、色調は黒褐色を呈する。	
5	5-C	口縁が直立し、直線的に底部に至る平縁の鉢形土器である。口径16cmを測る。無文土器であり、口縁部及び底部付近は横位の胴部は綾位の器面調整が行なわれている。	砂粒をやや多く含む。焼成は普通である。色調灰褐色を呈する。	
6	5-E	台付土器の接合部である。接合部には原体LRの縄文が施文されており、13個の刻目が配されている。さらに赤色の顔料が塗られている。	胎土、焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。	
7 11	5-A.	底部の土器である。8には底面に網代痕が認められる。10の底部は高台状を呈している。	砂粒、小石粒を含む。焼成は良好である。色調は8が黒色、他はぶい黄褐色を呈する。	
89- 1~4	5-A. -I	紐線文系の土器である。口縁部が内傾し、胴部でやや脛らみ、ゆるやかに底部に向う深鉢形土器である。口径1は26cm、2は28.5cm現高28cm、3は22.5cm、4は27cmを測る。5は口径32cmを測る。1~4は口縁及び頭部に刻目文が配されたものである。刻目文は沈線で区画がなされている。地文は斜行、垂下する	共に砂粒を含み、焼成は良好である。色調1はぶい褐色、2は黒褐色、3は黒褐色、4は橙色、5は黒褐色を呈する。4は部分的に炭化物が付着している。	
89-5	5-A. -I			

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
		条線が全面に施されている。5は口唇部に刻目が巡っており、それを区画する沈線が1条、頭部に2条巡りその間を分割する3本単位の平行沈線が垂下している。地文には横走条線が施文される。		
90-1 2 3・4	5-A <sub>4</sub> 5-A <sub>1</sub> 5-A <sub>4</sub>	無文の土器である。1は口縁部が内傾し、胴上位で張り底部に至る平縁の深鉢形土器である。口径23.8cm、現高32cmを測る。口唇部はあまり肥厚しない。口縁部では横位に、胴部では縱位に器面調整が行なわれている。2は口縁部が内傾し、緩やかに底部に至る、折り返し口縁の深鉢形土器である。口径21cm、現高21.5cmを測る。口縁では横位、胴部では縱位の器面調整が行なわれている。3、4は底部から胴部にかけてのもの。	いずれも砂粒を多量に含むが焼成は良好である。色調1は灰白色2は明灰褐色、3はにぶい黄色、4は黒灰褐色を呈する。	
91-1 1・2	1	1は横位の条痕が施文される。2は尖底の土器である。	胎土に纖維を含むが焼成の良い土器である。色調橙色を呈する。	
	3 4-A <sub>4</sub>	口縁部がやや反る器形を呈する。棒状工具による押引き文で口縁部文様帶を区画し、横位の沈線を多數巡らす、それを分割する蛇行する沈線が垂下しているものである。	胎土・焼成は良好である。色調は黒褐色を呈する。	
4・5	4-A 4-C	沈線が横位、斜位に施文されるものである。4は2本の斜行する沈線間が丁寧にナデられている。	小石粒を含む。焼成は良好。色調は暗褐色を呈する。	
	7 4-A <sub>4</sub>	口縁が直立し、胴部が屈曲し底部に至る浅鉢である。口唇部に指頭圧痕を有する。口縁及び内面は丁寧にナデられ滑沢を帯びている。	砂粒を含む。焼成は良好である。色調、内外面共に黒色。器肉はにぶい黄褐色を呈する。器面は黒色になるよう調整したかもしれない。	
91-8 92-7	5-A	斜位に交差する沈線が施文される。	胎土・焼成は良好。色調黒色を呈する。	
		口縁部に棒状工具による押引きと沈線が交互に施文され、2対の瘤が貼付されたものである。地文は無文である。	小石粒を含む。焼成良好。色調外面黒色、内面暗褐色を呈する。	91-8、92-7は同一個体
9・10	4-A <sub>3</sub>	口縁部に繩文帶を有する。口縁及び胴上位には弧線文を描き区画内には原体RLの繩文が施文される。さらに弧線文を分割するため頭部に棒状工具による押引きと沈線が巡る。口縁部には縱長の瘤が貼付される。	砂粒、黒色に光る粒子を含む。焼成はやや良。色調暗褐色を呈する。	

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
91—11 92— 1・2	5—A <sub>1</sub> —I	隆起縄文帯が3帯巡るものであり。沈線により区画が行なわれている。瘤が上下に2個貼付される。胴部には斜走する条線が施文される。器面に炭化物を付着している。	胎土・焼成良好、色調黒色を呈する。	91—11と92—2は同一個体
92— 3・4	4—A	ヘラ状工具により、三角文状の押引文を巡らし、下部は2本の曲線内に縄文を施文する。無文部はナデられている。	胎土・焼成、色調同上。	
5	4—A	口縁部下に隆帯が巡り、以下沈線が施文され、縄文が磨消されたものである。	胎土・焼成良。色調黒褐色を呈する。	
6	5	隆起縄文帯が弧状を呈するものである。中位には縱長の刻目を有する瘤が貼付される。	胎土・焼成良。色調内外面暗褐色、器肉は明黄褐色を呈する。	
8	5—E	台付土器の台部である。2本の沈線間に原体RLの縄文が施文される。	砂粒を含むが焼成は良好である。色調黒褐色を呈する。	
9	5—C	上部で屈曲し、小さな底部に至る注口土器である。横走の沈線区画内にRLの縄文が施文される。屈曲部には縱長の刻目を有する横長の瘤が貼付される。	砂粒を含むが焼成は良好である。色調内外面共に黒褐色を呈する。器肉は暗灰色を呈する。	
10	5—F	注口土器の注口部である。	胎土・焼成良、色調明黄褐色。	
92—11 93— 1・2 9—10 12—14 95—4	5—A <sub>1</sub> —I 5—A <sub>1</sub> —I 5—A <sub>1</sub> —I	縦線文系の土器である。 口縁部及び胴部には沈線区画内に列点を有する縦線文が巡る。地文には斜走する条線が施文される。いずれも平縁を呈する深鉢形土器である。92—11は口縁はほぼ直な立ち上りを示し、口唇部が内側に肥厚している。若干胴部が膨らみをもつ薄手の土器である。93—1もそれとほぼ同様である。93—5及び9—10の土器は底位に2本ないし4本の沈線が垂下しており、それによって文様を分割している。口唇部は他の土器と異なり外側に肥厚している。	胎土には砂粒を多量に含む。焼成は良好である。色調は93—2・3・5は黒色を呈する。他は暗褐色を呈する。	93—2・3は同一個体である。
93—11	5—A <sub>1</sub> —I	口縁が外反する深鉢形土器を呈すると思われる。沈線区画内に縄文が施されており、曲線的な文様構成を持つ土器である。口縁部には円形状の列点が巡る。	砂粒を多量に含むが焼成は良好である。色調は褐色を呈する。	
94—1 2～5 95—2 4	5—A <sub>1</sub> —I 5—A <sub>1</sub> —I	無文の土器である。95—4以外は深鉢形土器と思われる。1は口縁の内傾する土器である。口唇部は内側に肥厚している。2は外側に折返して段を有している。95—4は、胴部が「く」の字状に屈曲している。注口土器か	胎土・焼成同上。色調は94—2・5、95—2・4はにぶい黄橙色を呈する、他は褐色を呈する。	

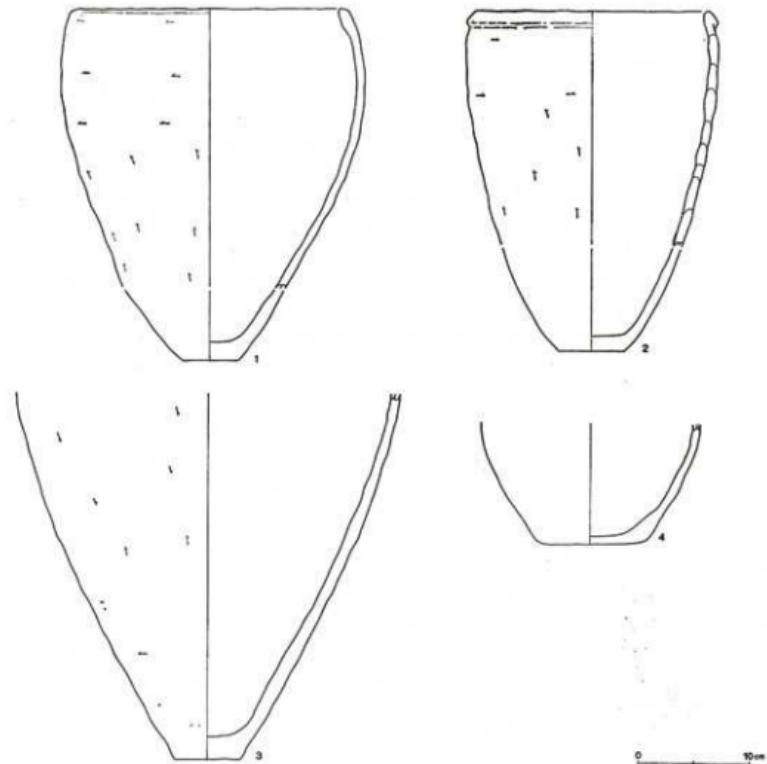


第88図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ-3区出土土器実測図(1)



第89図 伊奈氏屋敷跡II-3区出土土器実測図(2)

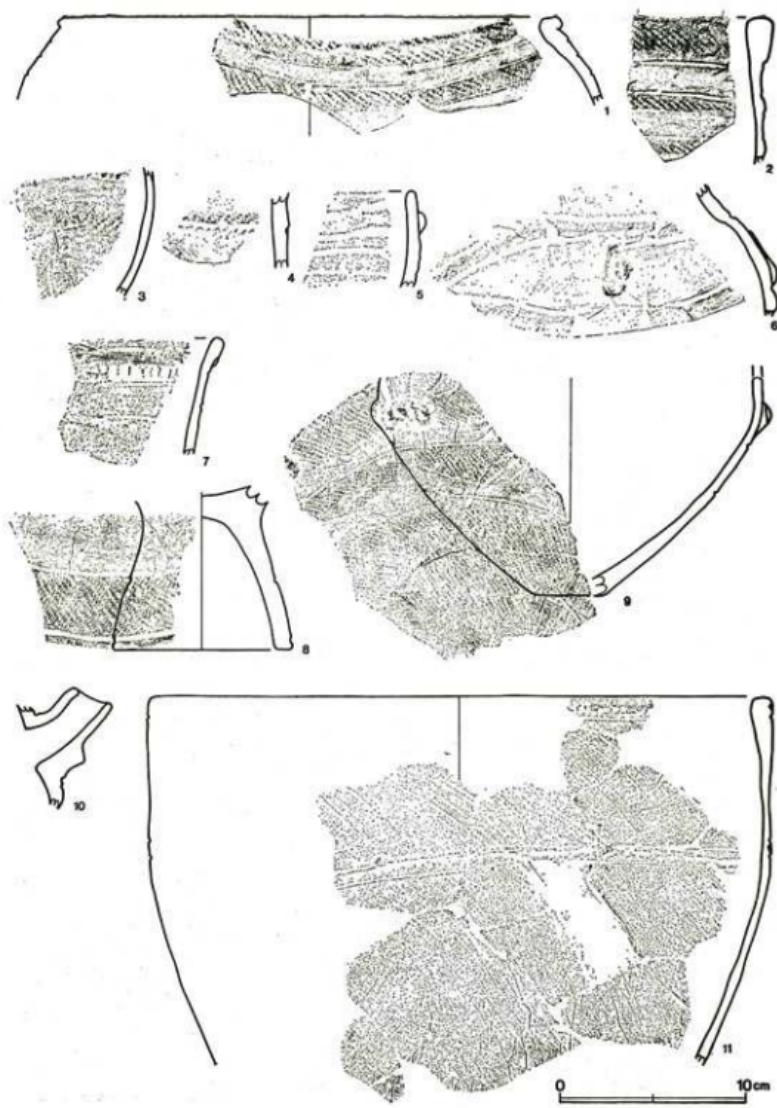
番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調 等	備 考
94-6		もしれない。 口縁がやや内傾する土器で胴部に2本の沈線が巡り口縁部文様帯と区画している。口縁の文様帯は継位に細かく分割されており、区内には一部に継位の波形状沈線が描かれる。	黒色に光る粒子を含む。焼成は良好である。色調黒色を呈する。器面に炭化物が付着している。	
94-7.8 95-1		口縁が折返され外側に肥厚している。胴部は沈線によってモチーフが描かれる。	砂粒を多量に含むが焼成は良好である。色調褐色を呈する。	
95-3		小形の壺形土器である。沈線が胴部に巡る。	胎土・焼成同上。色調褐色を呈する。	



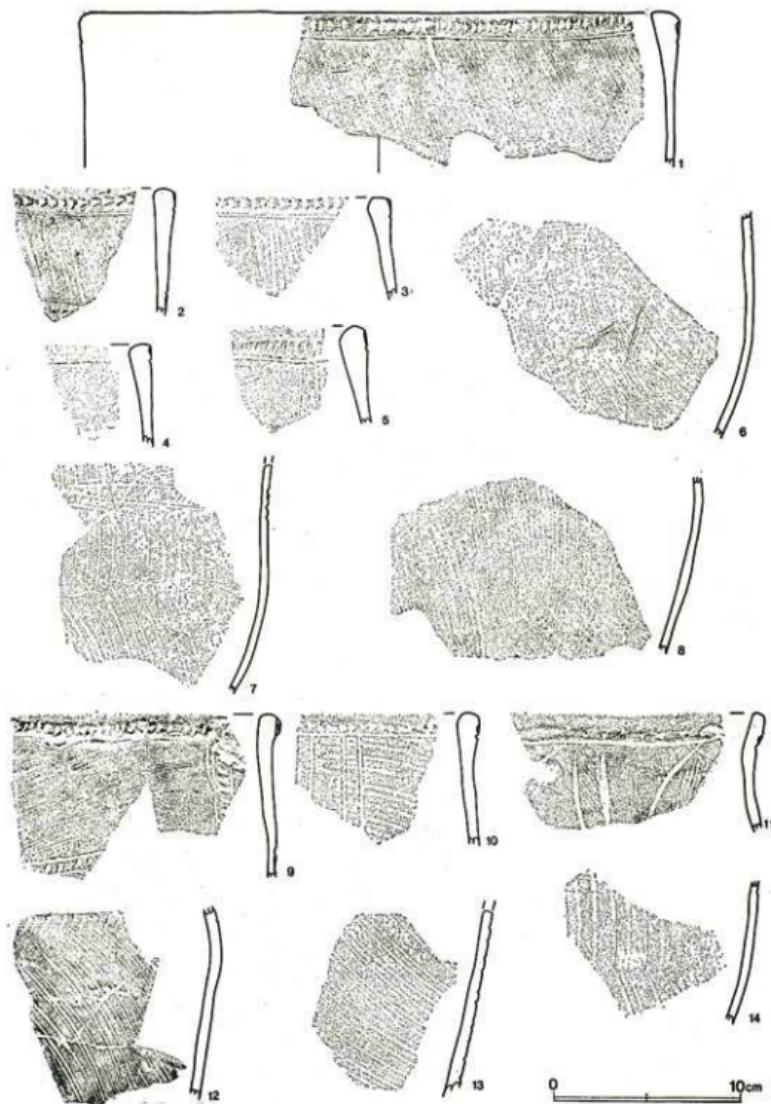
第90図 伊奈氏屋敷跡II-3区出土土器実測図(3)



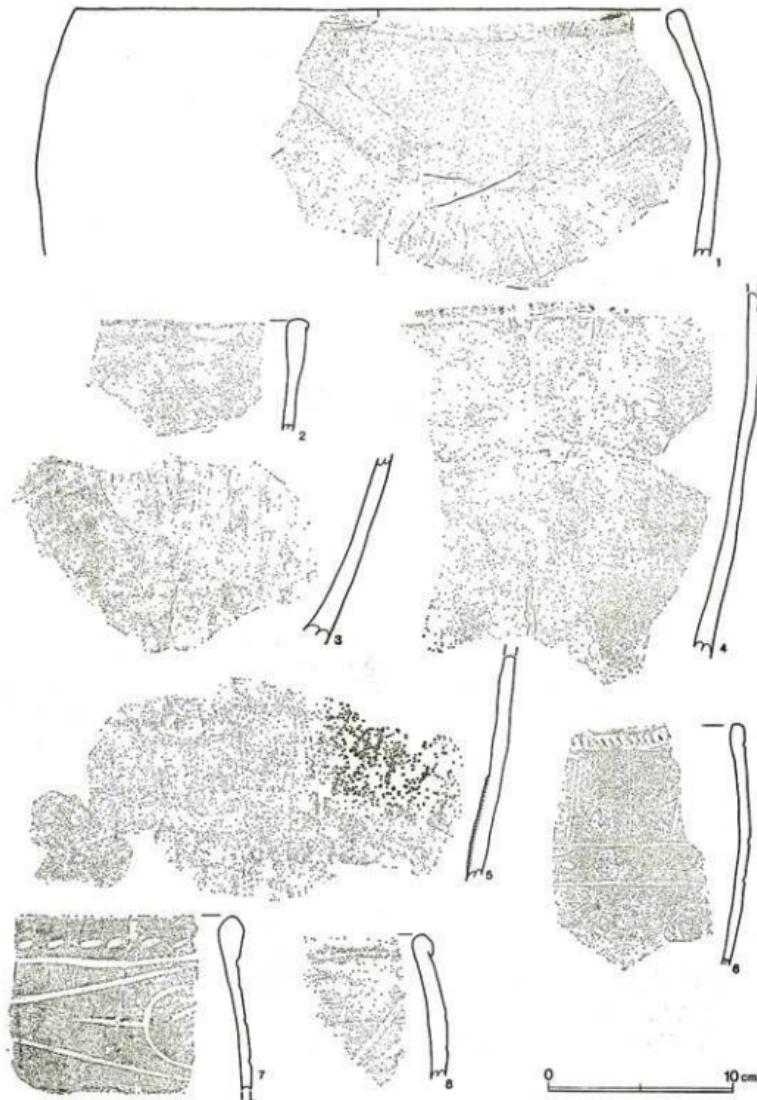
第91図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—3区出土土器拓影図(1)



第92図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—3区出土土器拓影図(2)



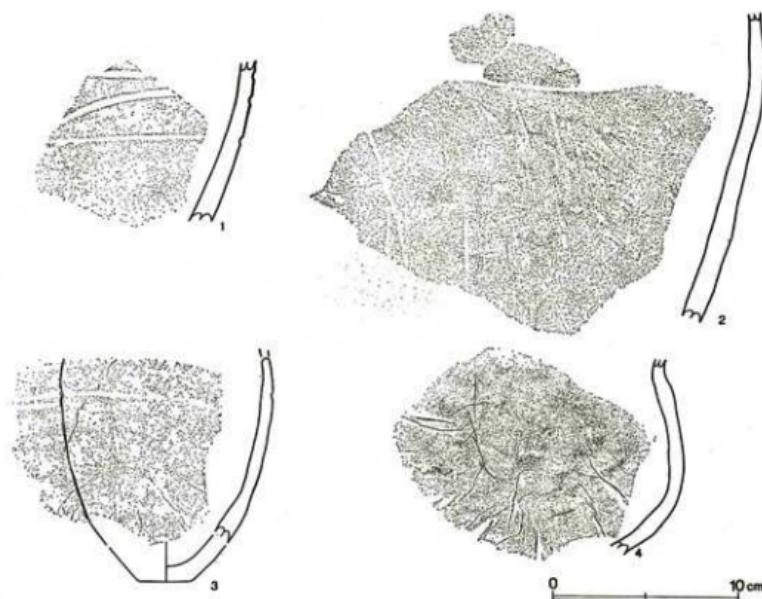
第93図 伊奈氏屋墓跡I—3区出土土器拓影図(3)



第94図 伊奈氏里敷跡Ⅰ—3区出土土器拓影図(4)

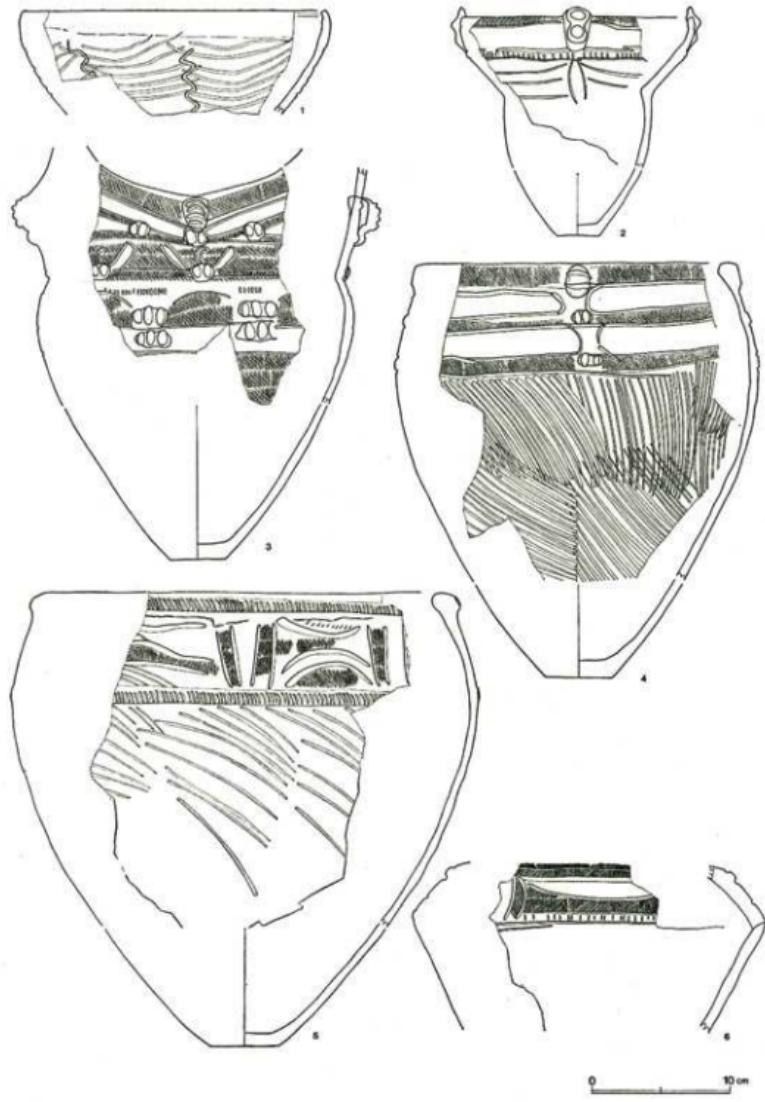
I-4区(第96~98図)

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
96-1	4-A <sub>4</sub>	口縁部がほぼ直立し、胴部中位から頸部状に開く深鉢と考えられる。口径22.5cmを測る。口縁部の内側に、沈線が1条巡るものである。口縁部に無文帶を有し、胴部には棒状工具により、横位の弦文が数条施文され、さらに蛇行する垂線が分割している。口縁部及び内面は丁寧にナデられており、滑沢を帯びている。	砂粒を少量含む。焼成は良好である。色調は、外面黒色を呈し、器内は灰褐色を呈する。	
2	4-A <sub>1</sub>	口縁部が直上し、胴上位で括れ、胴部で張る平緩の深鉢形土器である。口径17cmを測る。口縁屈曲部には2本の沈線が巡り、区画	砂粒を多く含むが、焼成は良好である。色調黒色~灰黄褐色を呈している。口縁部には炭化物が付	

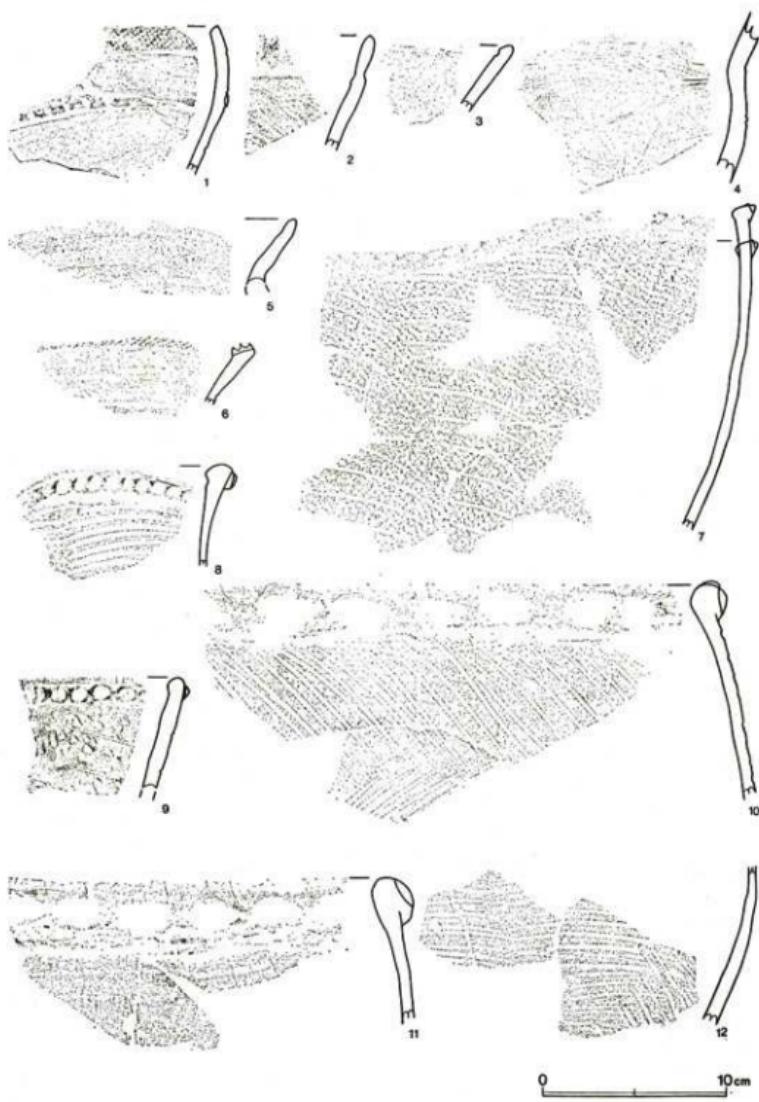


第96図 伊奈氏屋敷跡I-3区出土土器拓影図(6)

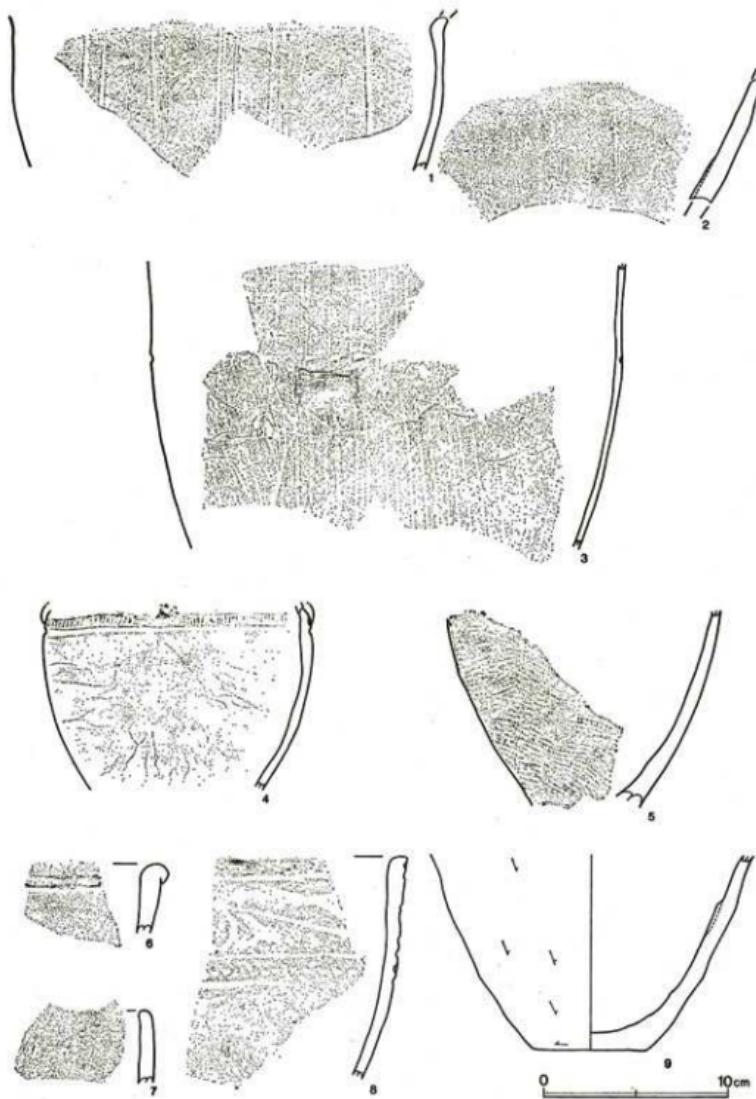
番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
96-3	5-A <sub>1</sub> —II	内には刻目が施文され、胴部と分割している。口縁部上半には横位の沈線が描かれ、原体LRの繩文が施文される。また円形圧痕を有する瘤が貼付される。胴部には上向きの弧線文が3条描かれている。弧線連結部には縱位の向いあつた弧線文が描かれている。器面内外共に丁寧に整形し滑沢を帯びている。	着している。	
4	5-A <sub>2</sub> —I	口縁がやや外反し、胴上位で一度括れ、胴部でやや張り小さな底部に至る波状口縁の深鉢形土器である。4単位を量する波底部の土器である。隆起繩文帯が口縁に施文され、胴上位括れ部までには隆起帶刻文と瘤によりモチーフが描かれる。括れ部上部には原体RLの繩文が施文され、その上から2本1対の斜行沈線やわらび手状の曲線が描かれる沈線内は磨消されている。胴部には下向きの弧線文及び2本の沈線が巡り、区画内には原体RLの繩文が施文される。連結部には縱位の棒状工具による押圧を有する横長の瘤が施文される。	胎土・焼成は良好である。色調は黒色を呈する。	
5	5-A <sub>3</sub> —II	口縁が内凹し、胴部で張る。深鉢形土器である。口径(推定24cm)を測る。胴上半には3帯の隆起繩文帯が巡る。1帯目には横位の刻目を有する縱長の2・3番目には縱位の刻目を有する横位の瘤が貼付される。瘤をつなぐ平行沈線間は縱位に結ばれ、棒状文を構成している。原体RLの繩文が施文される。胴部には、縱走・斜走する条線が施文される。	黒色に光る粒子、砂粒を含むが焼成は良好である。色調は黒褐色～明褐色を呈する。	
6	4-B	口縁が内凹し、胴部で張る、平縁の深鉢形土器である。口径(推定32cm)を測る。口縁及び胴上位には粘土紐を貼付し竹管状工具による押引きを施したものが巡る。紐繩文間には、2対の平行垂線、背合わせの弧状線が描かれ、沈線間に繩文が施文される。胴部には斜走する条線が施文される。	砂粒を多く含み、焼成はやや悪い。色調は灰黄褐色～灰褐色を呈する。	
		肩部が「く」の字状に張る、算盤玉状の形態を呈する壺形土器である。口縁が欠損するものである。文様は肩部にみられる。横位の沈線及び、上向きの弧線文が描かれ、連結部には2本の縱位の弧線文が描かれている。区画内には原体の繩文が施文されている。肩部には刻目を配した平行沈線が巡り、無文の胴部と分割している。	砂粒を多く含むが、焼成は良好である。色調は黒褐色を呈する。	



第96図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区出土土器実測図



第97図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ—4区出土土器拓影(1)



第98図 伊奈氏屋敷跡Ⅰ-4区出土土器拓影図(2)

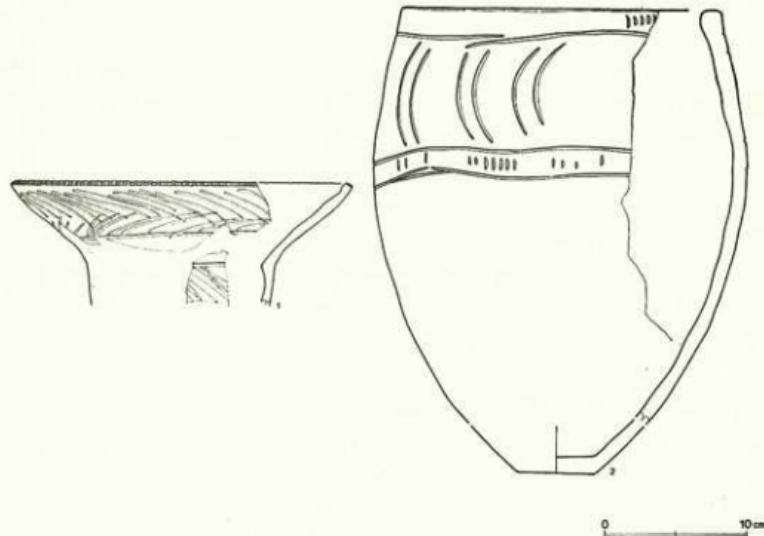
番号	分類	器 形・文 標 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調 等	備 考
97-1	4-C	口縁部が内側する鉢形土器と推察される。口縁部には原体L Rの縄文が施文され、沈線によって区画されている。下位には刻目を有する平行沈線が巡るものである。器面は丁寧にナデられており、滑沢を帯びている。	胎土・焼成は良好である。色調は黒褐色を呈する。	
2	4-A <sub>a</sub>	口縁部に段を有し、口縁内側には竹管状工具による平行沈線が巡る。地文には縄文が施文され、その上から斜行する沈線が施文される。	砂粒を含むが焼成は良好である。色調はにじい黄色を呈する。	
3	4-A <sub>a</sub>	口縁部内側に沈線が巡るものである。	小砂粒を多量に含むが焼成は良好である。色調にじい黄色である。	
4	4-A	頸部で屈曲し、胸部で張る土器である。胸部上部は荒い格子目文が施文される。	胎土・焼成は良好である。色調は黒褐色を呈する。	
5~6	4-B	肩部が「く」の字状に張る、算盤玉形状の形態を呈する変形土器である。沈線区画内に原体L Rの縄文が施文される。口唇部は一部欠損しているが表面と共に炭化物が付着している。	6は黒色に光る粒子を含む。共に砂粒が多く含む。焼成は良好である。色調5は黒色、6はにじい黄褐色を呈する。	
7~9	4-A <sub>a</sub>	7は、口縁部が内傾し、張りながら底部に至る深鉢形土器である。波状を呈する。口縁部には粘土紐が貼付され、上に棒状工具による圧痕が施文される。地文には縄文が施文され、さらにその上に斜走する沈線が荒く描かれる。8は内側に沈線が巡る。	共に砂粒を多く含む。焼成は良好である。色調は7・9はにじい赤褐色、8はにじい黄橙色を呈する。	
10・11	4-A <sub>a</sub>	口縁部が内側している。口唇部は肥厚しており、指頭状圧痕が施されている。10は横位の波状条線が、11は垂下する条線が施文されている。	胎土・焼成は良好である。色調は10が黒褐色、11がにじい黄褐色を呈する。	
97-12 98- 1~3	4-A <sub>a</sub> 5-A <sub>a</sub>	条線を有する胸部破片である。97-12の条線は横走しており、98-1~3は垂下している。なお98-3は胸部に棒状工具による列点が巡るものである。条線は列点まで垂下し、さらに、下半に施文したものである。	胎土に砂粒を含む。焼成は97-12がやや悪いが他は良好である。色調は黒褐色を呈する。	
98-4	5-C	小形の鉢形土器と思われる。上部には、刻目を有する、2本の平行沈線が巡るものである。	胎土・焼成は良好。色調黒褐色を呈する。器面には炭化物が付着している。	
5	5-A	底部付近の土器である。底面近くまで縄文が施文されている。原体L Rの縄文が施文される。	胎土・焼成は良好である。色調は褐色を呈する。	

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
98-6	5-A <sub>1</sub>	口縁部が外側に折返されたものであり、口縁下は沈線状を呈する。無文土器か、あるいは口縁部の無文帯の一部である。	砂粒を多量に含むが焼成は良好である。色調はにぶい黄褐色を呈する。	
7	5-C	波状口縁を呈する、小形の鉢形土器と推察されるものである。口縁部は肥厚せずやや内傾している。	砂粒・小石粒を含む。焼成は良好である。色調灰黄褐色を呈する。	
8	5-A <sub>1</sub>	口縁がほぼ直上している。口縁部及び胴上位に列点が巡り、沈線により区画されるものであり、いわゆる縦線文系の土器である。区内には沈線によるモチーフである斜行及び曲線が描かれ、三叉状文が施文されている。	胎土・焼成は良好である。色調黒褐色を呈する。表面に炭化物が付着している。	
9	5-A <sub>1</sub>	底部の土器である。 無文であり、上部は左上→右下、底部では右→左の器面調成が行なわれているものである。	胎土・焼成は良好である。色調は褐色を呈する。	

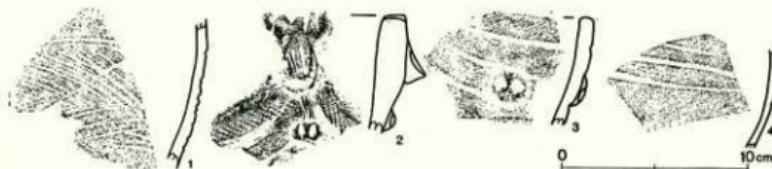
I-4 東区（第99・100図）

番号	分類	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調等	備考
99-1	4-A <sub>1</sub>	胴部中位より屈曲し朝顔状に口縁が開く深鉢形土器である。口径24.5cmを測る。平縁を呈しており、口唇部には指頭状の圧痕を有する。口唇部内側には一条の沈線が巡っている。文様は屈曲部に幅広の2本の平行する沈線を施文し、無文部を作出し、それによって口縁部文様を胴部文様と分離している。口縁部には横位の綾杉状文があり、胴部には斜行する沈線が施文されている。	胎土・焼成は良好である。色調はにぶい褐色を呈している。	
2	5-A <sub>1</sub> -V	口縁部が内傾し、胴部で張りゆるやかに底部に至る深鉢形土器である。口径23cm、現高29.5cmを測る。口縁部と同上半部には沈線で区画された列点が巡る。いわゆる縦線文系の土器である。沈線は一回で施文されず、何回かにわたって施文されている。区内には2本対の綾位の弧線文が描かれている。	砂粒を多く含み、器面に多く露土している。焼成は良好である。色調はにぶい黄褐色を呈する。	
100-1	4-A <sub>1</sub>	横位に沈線が巡り、下部は綾杉状の沈線が施文されている。	胎土・焼成は良好である。色調はにぶい黄褐色を呈する。	
2	5-A <sub>1</sub> -V	波状口縁の波頂部の土器である。波頂部は突出し、逆三角形を呈している。突出部上端には刻目を配し、綫長刻目を有する綫長の瘤	砂粒を多く含む。焼成は良好である。色調は黒褐色を呈する。	

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調 等	備 考
		を貼付している。また口縁部には、隆起縄文帯が施文されている。波頂下には綫長の刻目を有する横長の瘤が、貼付されている。縄文は原体R Lである。		
100-3	5-A	口縁部は肥厚してなく直線的である。斜位の沈線が施文され、区画内には原体L Rの縄文が施文されている。円形の刻目を有する瘤が貼付される。	胎土、焼成、色調同上。	
4	5-A	薄手の胴部破片の土器である。横位に3条沈線が施文される。	胎土・焼成同上。色調は褐色を呈する。	



第99図 伊奈氏屋敷跡I-4 東区出土土器実測図



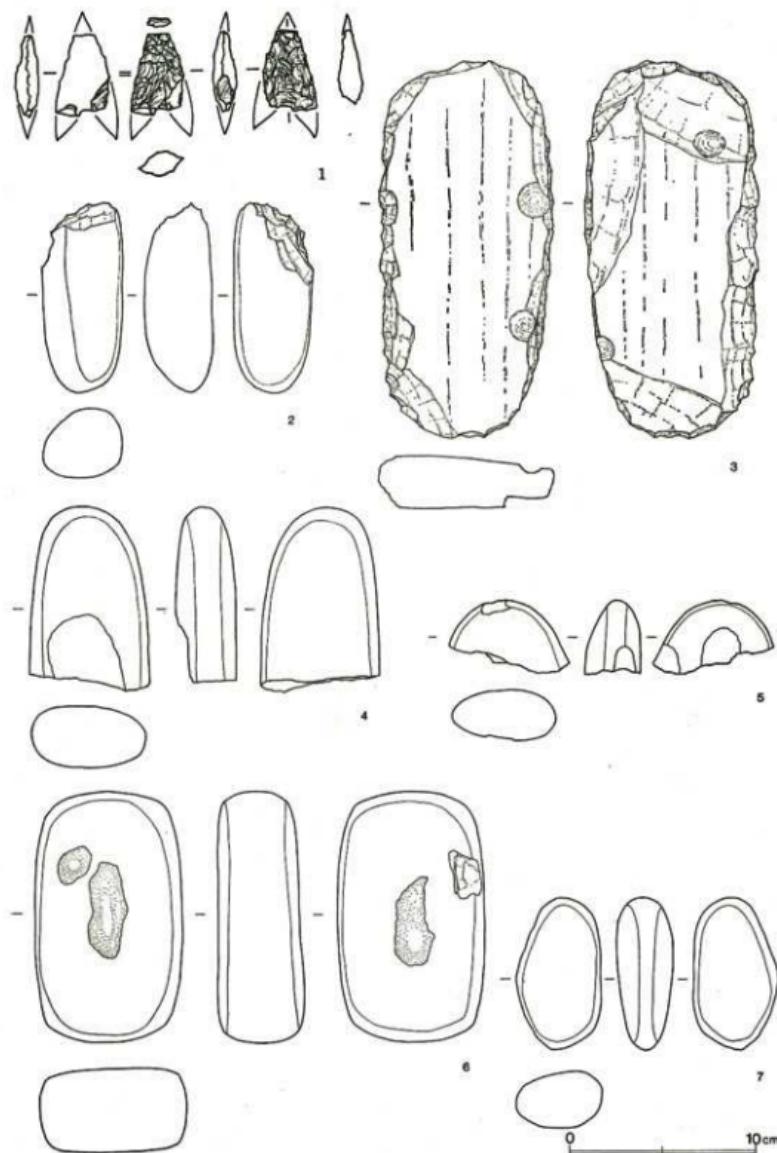
第100図 伊奈氏屋敷跡I-4 東区出土土器拓影図

石器（第101・102図）

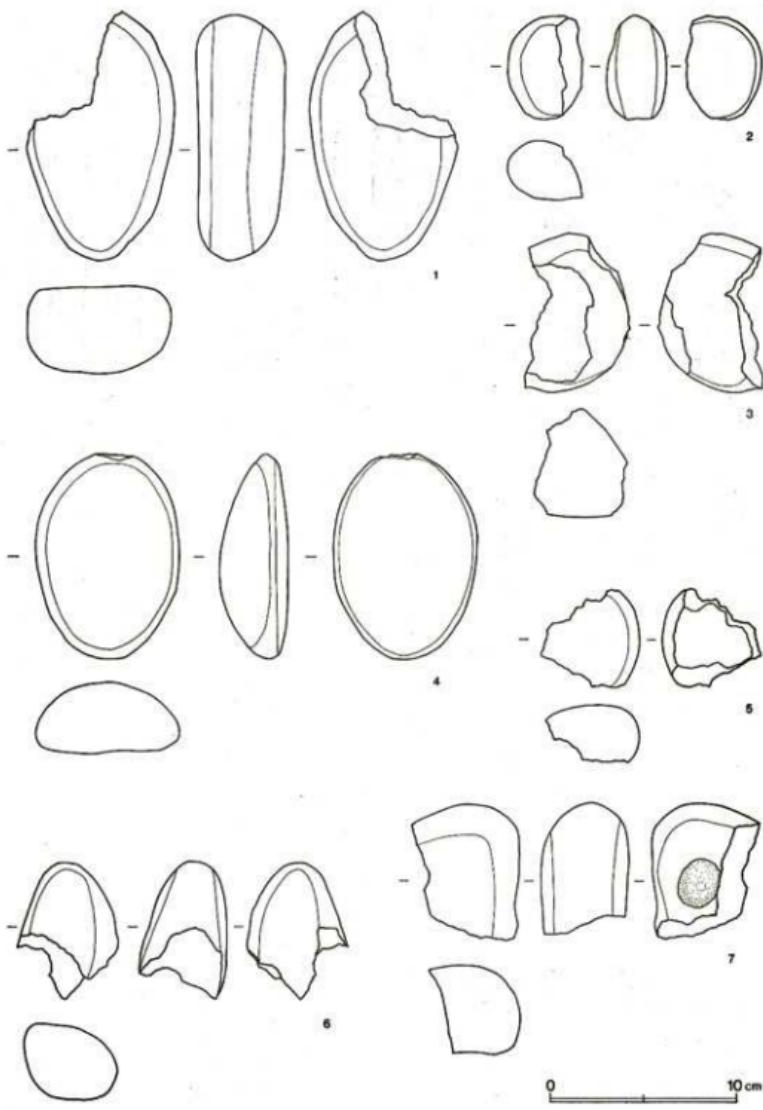
- 101-1. 石鎌 Ⅰ-1区出土。全体としては二等辺三角形を呈するものと思われるが、先端部及び両脚部は欠損している。赤褐色を呈するチャート製である。石鎌のみの縮尺である。
2. 碓器 Ⅰ-1区出土。舟直下出土。裏面が比較的平坦で表面が盛り上がる長楕円形の礫を素材として、その一端に先端方向から打撃を加えて刃部を作出している。自然面には滑らかなところが認められる。粘板岩製である。
3. 碓器 Ⅰ-4区2Aグリッド出土。草履形の扁平礫を素材としてほぼ全周に打撃が加えられている。両面とも平坦部は摩滅している。また、表面の右側縁近くには一定の間隔を保って上下ひとつずつの凹がある。なお、鋭い刃部は作出されていない。緑泥片岩製である。
4. 磨石敲石 Ⅰ-2区出土。全体としては扁平なスタンプ状を呈する。周辺部には敲打痕を有する。表裏両面及び下端の平坦部には顕著な磨滅痕が認められるところがある。火熱を受けたために赤褐色に変色している。また、左側縁部から裏面にかけてカーボンの付着が認められる。砂岩製である。
5. 磨石 Ⅰ-4東区出土。ほとんどの部分が現存していないので全体の形状は不明である。両面に若干の磨滅痕が認められる。全体に火熱を受けた赤褐色を呈する。安山岩製である。
6. 磨石敲石 Ⅰ-2区出土。全体は長方形によく整っている。両側縁及び上下両端には敲打痕を有する。両面とも滑らかに磨られており、横方向に走る顕著な線状痕が認められる。しかし、中ほどには敲打によると思われる若干の凹みも認められる。表面左上部には凹み石にみられるものと同様の凹みを有する。安山岩製である。
7. 軽石 Ⅰ-4区出土。明瞭な加工の痕跡は認められないが、この地域では自然堆積の場合にはこうした大きなものが入っていることはほとんど考えられないので、何らかの目的でどこからかもたらされたという可能性は高いと思われる。そのためあえてここに図示した。

第3表 伊奈氏屋敷跡縄文時代石器計測表

番号	器種	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石質	備考
101-1	石鎌	Ⅰ-1区	(2.2)	(2.5)	(0.7)	チャート	
2	碓器	1区舟直下	10.3	4.3	3.7	粘板岩	
3	碓器	Ⅰ-4区	20.4	9.5	2.8	緑泥片岩	
4	板岩	Ⅰ-2区	(10.0)	6.6	3.3	細粒砂岩	焼けている
5	磨石	Ⅰ-4区東区	(4.0)	(6.5)	(2.8)	閃綠岩	"
6	磨石・敲石・凹石	Ⅰ-3区	13.5	8.1	4.5	安山岩	"
7	軽石	Ⅰ-4区	8.2	4.6	3.0	"	
102-1	磨石・敲石	台地部1245	13.3	8.1	4.7	山安岩	焼けている
2	敲石	台地部461	5.7	(4.1)	3.2	"	"
3	磨石	台地部108	8.5	(5.7)	(5.8)	"	"
4	"	台地部232	11.1	7.8	3.8	多孔質	"
5	"	台地部230	(5.3)	(4.4)	(3.1)	安山岩	"
6	"	台地部207	(7.5)	(5.5)	(4.2)	"	
7	磨石・凹石	台地部244	(7.3)	(5.8)	(4.8)	"	"



第101図 伊奈氏屋敷跡石器実測図(1)



第102図 伊奈氏屋敷跡石器実測図(2)

第102図は台地部から出土したものである。

102-1. 磨石凹石 台地部出土。四分の一ほど欠損している。表面は凹面状に浅く窪み、裏面には比較的小さく深い凹を有する。全体に火熱を受けてやや変色している。安山岩製である。

2. 蔽石 台地部出土。欠損部分が多く、全体の形状は明らかではないが、残存部分からするとあまり大きいものではないことが推定される。石質のためにあまり明瞭ではないが、蔽打の痕跡は認めることができる。全体に火熱を受けている。安山岩製である。

3. 磨石 台地部出土。多くの部分が欠損しているが、裏面が平坦で表面は分厚く盛り上がる円錐を使用していることは推定される。全体に火熱を受けており、赤褐色を呈する。安山岩製である。

4. 磨石 台地部出土。平面形は橢円形を呈するが、断面形はなだらかな山形となっている。機能面は裏面の平坦部であると思われるが、石質のために線状痕は認められない。安山岩製である。

5. 磨石 台地部出土。ほとんどの部分を欠失している。火熱を受け、全体が赤褐色を呈する。安山岩製である。

6. 磨石 台地部出土。ほぼ下部は欠損し、上半部のみ現存している。裏面の平坦部には縦方向に走る線状痕が認められる。全体に火熱を受けている。安山岩製である。

7. 磨石 台地部出土。ほとんどの部分が欠失している。表裏両面とも縦方向に走る線状痕が認められる。裏面はやや窪む。全体に火熱を受けている。安山岩製である。

#### 木製品

低湿地遺跡の特徴として、木製品が検出される機会が非常に多いという点があげられよう。当遺跡においても例外にもれず、丸木舟、弓、杭等が鮮明な色のまま発掘された。順をおって説明を行っていく。

#### 丸木舟（第103図1・2）

1-1、2区でそれぞれ出土したものであり、木をくり抜いて作られたものである。共に舟の幅が上下で10~15cmの差が認められる。1はたち上がりが低く、深さは8cmを測る。図面上部の舟底が厚さ1~1.5cmにわたり炭化しており、薄くなっている。2はたち上がりが高く、深さは20cmを測る。図面下部舟底は炭化している。また、舟底両端が削られており、少し上っている。

#### 櫛（第104図1）

櫛の頭部が残存している。歯の部分は欠損してしまっており、飾りの部分のみである。縦長の瘤のまわりに三角形の透かし彫りが施されている。全面に漆が塗られている。

#### 刳物（第104図2、3）

2は口縁部であり、外面には3本の沈線が巡る。3は底部付近のものである。いずれも内外面に極暗赤褐色の漆が塗られている。

#### 加工材（第104図4~7）

4~6は一括出土である。いずれも焼曲しており、幅4mm、深さ0.5mm以下の楕円状の溝が數本走る。小片であり、形状、溝も不統一であるため、人為的なものであるか、そうでないものか不明瞭である。7は厚さが1.5cmの一定の厚さを呈しているため板材としたものである。木目が平行であるため、あるいは木目にそって割れた自然木かもしれない。

第4表 木製品計測表

番号	種類	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	径 (cm)	番号	種類	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	径 (cm)
103-1	舟	I-1	370	60・45	5		105-2	弓	I-5	(67)			2
2	舟	I-2	485	55・45	5		3	弓	I-3	(65)			1.7
104-1	柵	I-4		(8)	1		106-1	柵?	I-3	(44.5)	1.5		2
2	刎物	I-5			0.7	15	2	加工木	I-5	(34.2)			0.9
3	刎物	I-5			0.7		3	丸太材	I-3	(23)			2
4	加工材	I-2		(5)	2		107-1	丸太材	I-4	(74)			6
5	加工材	I-2		(3.5)	0.5		2	丸太材	I-4	78			6.7
6	加工材	I-2		5.5	2		108-1	丸太材	I-4	55			6
7	加工材	I-4	15	5.5	1.5		2	丸太材	I-3	(62)			3.2
8	弓	I-3	80			1.3	3	丸太材	I-3	48			4.9
105-1	弓	I-5	(151)			2.2	4	丸太材	I-4	39.4			3.6

## 弓(第104図8、第105図1~3)

第104図8は木の枝の部分を利用したものであり、素材の取り方は長い枝の必要な長さとする両端に深さ2~3mmの切れ目を輪状に入れ、そこから折り取ったものと思われる。下部の基の太い部分は枝を裂き細くしている。次に上下端部に刻みを入れ弓弭を作出している。第105図1は、2本が同一個体であり、左下端と右上端が約20cm間をおいて接合するものである。また、下半は欠損している。先端部は50cm手前から序々に削って半円形に作り、幅6mm、深さ5mmの溝を縦に掘っている。弓弭は刻みを入れてコブ状に削り出している。なお、弓の側縁には径3mm前後の穿孔した穴及び途中まで開けられた穴が認められる。人為的なもの、あるいは虫食いであるかもしれない。第105図2は赤漆塗の飾り弓である。柵が1本入っている。その上に逆時計廻りで幅5mmの皮が2対4ヶ所巻かれている。弓弭は細く削り込まれたものである。第105図3は、細長くやや彎曲した枝ぶりを量しており、また上端部が瘤状になっているため弓弭の部分として使用されたものとして弓と分類したものである。上端より45cm薙の所まで炭化している。

## 柵(第106図1)

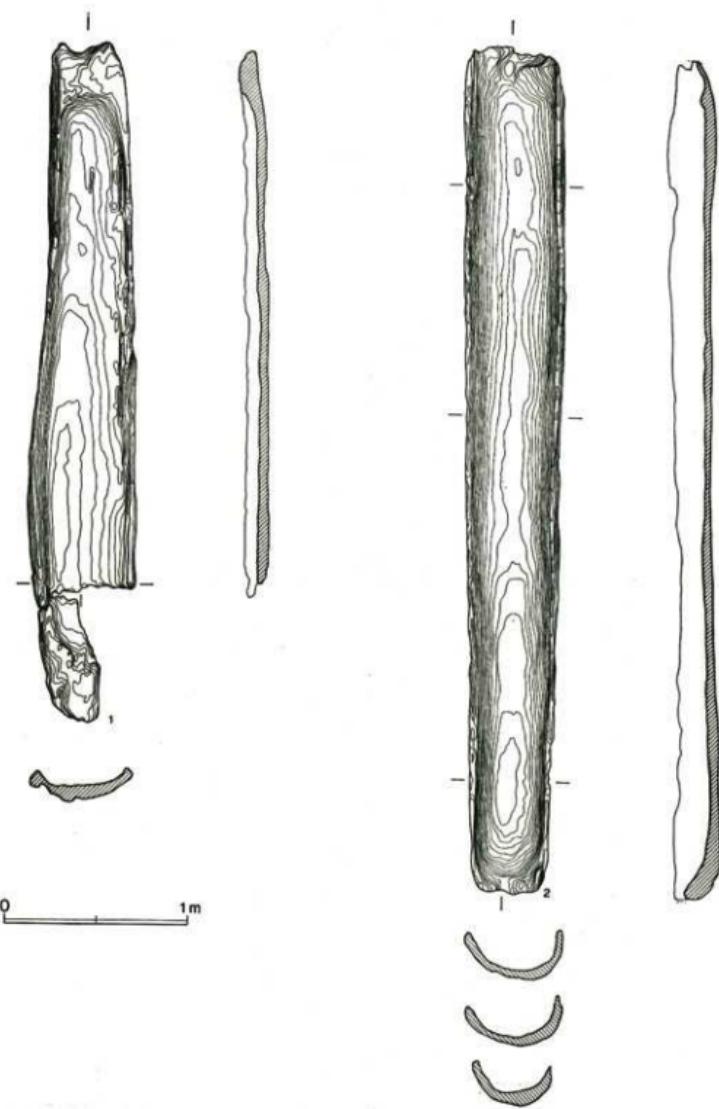
先端部が縦に残存しているものである。柵の部分は丸く作出してあり、水かきの部分は、平らに削り入る。幅は6cm程と推察される。全体的によく磨かれている。

## 加工木(第106図2)

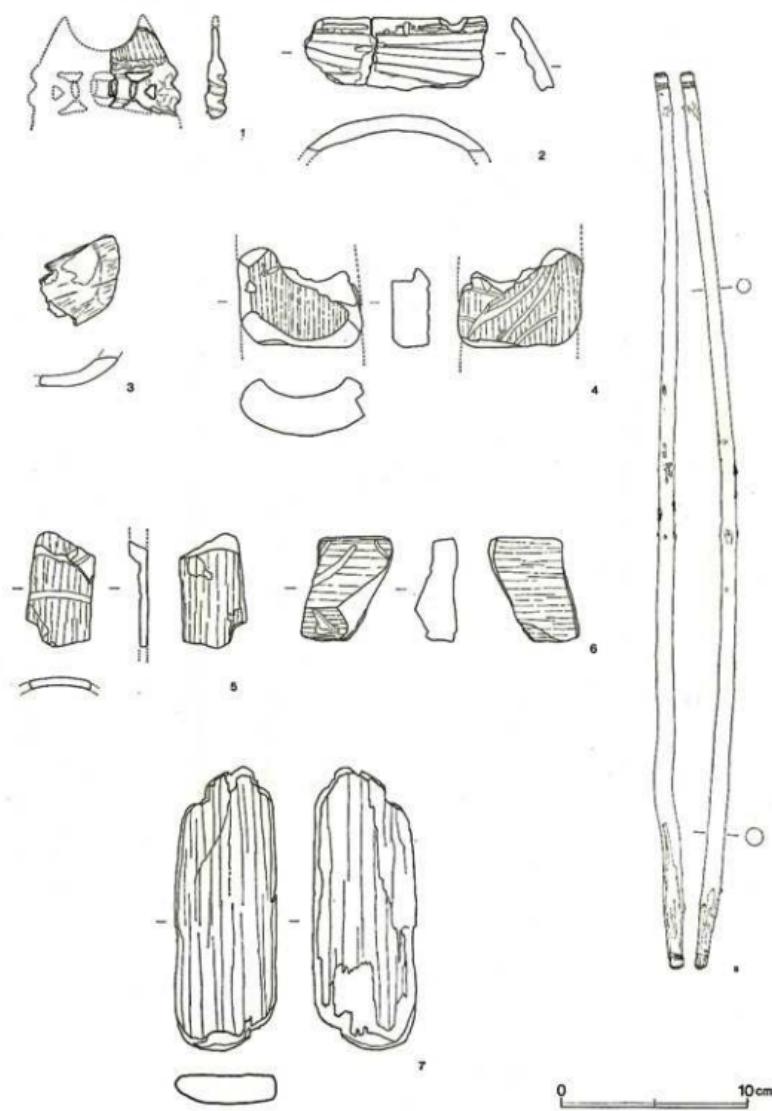
厚さ9mmのよく磨かれた板材の側縁に2ヶ所のえぐりが施されているものである。木目に沿って縦に割れており、用途は不明である。えぐりは、丸く加工された先端部より、7cmと19.5cmの所に作られている。

## 丸太材(第106図3、第107図、第108図)

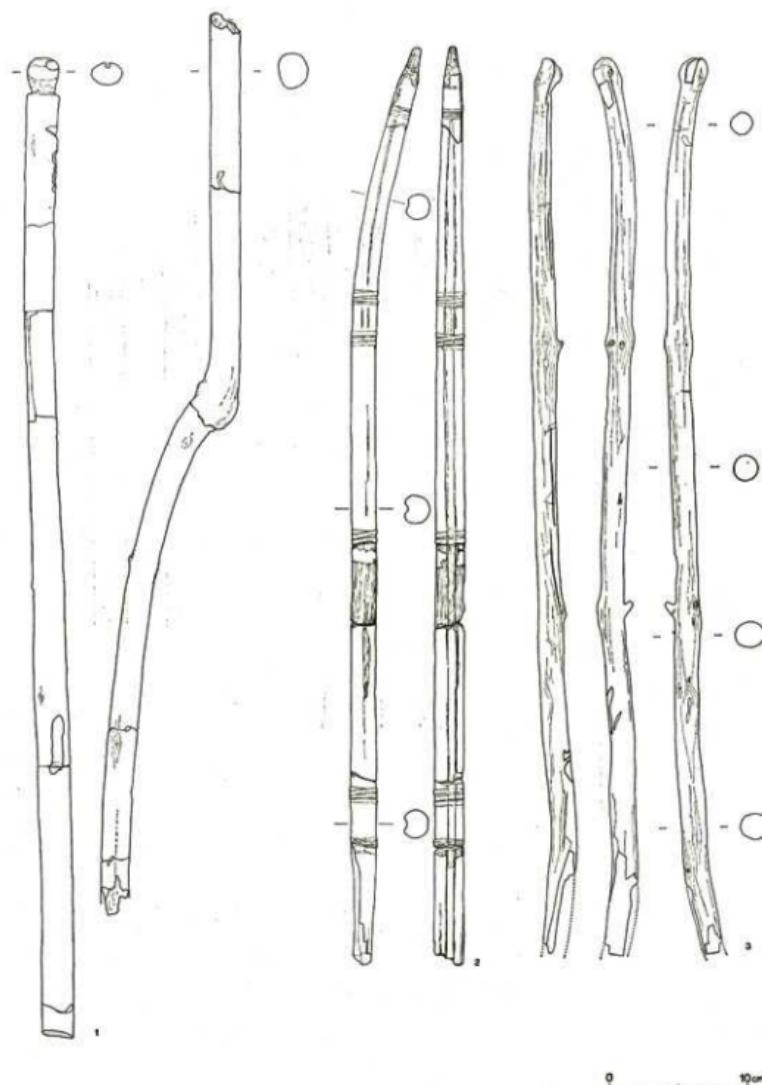
丸太を切断し、使用したと思われるものを一括した。第106図3は両端が欠損しているが、皮が剥がれており、直線的であるため丸木材としたものである。径が2cmを量しており弓の可能性もある。第107図1・2は大形であり、2は78cmを測る。第108図1は中形であり、3・4は小形である。いずれも直線的な木材が用いられており、鋭利な刃物で上端から中心に向けて何打か切り込みが入れられ、中心部は折り取られている。切り込み部分はややさしく立っている。



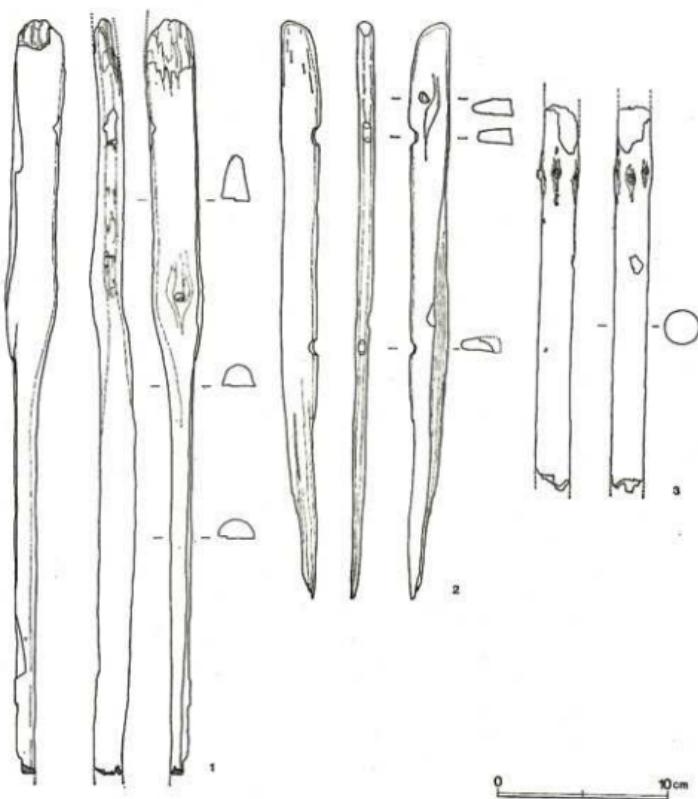
第103図 伊奈氏屋敷跡木製品実測図(1)



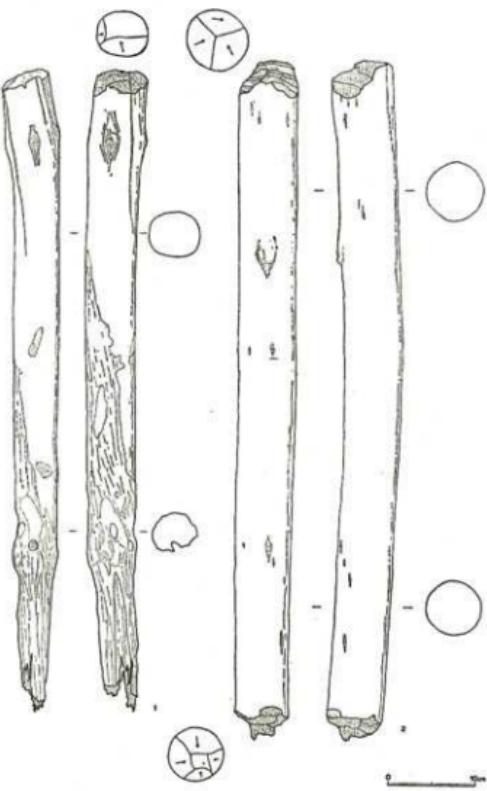
第104図 伊奈氏屋敷跡木製品実測図(2)



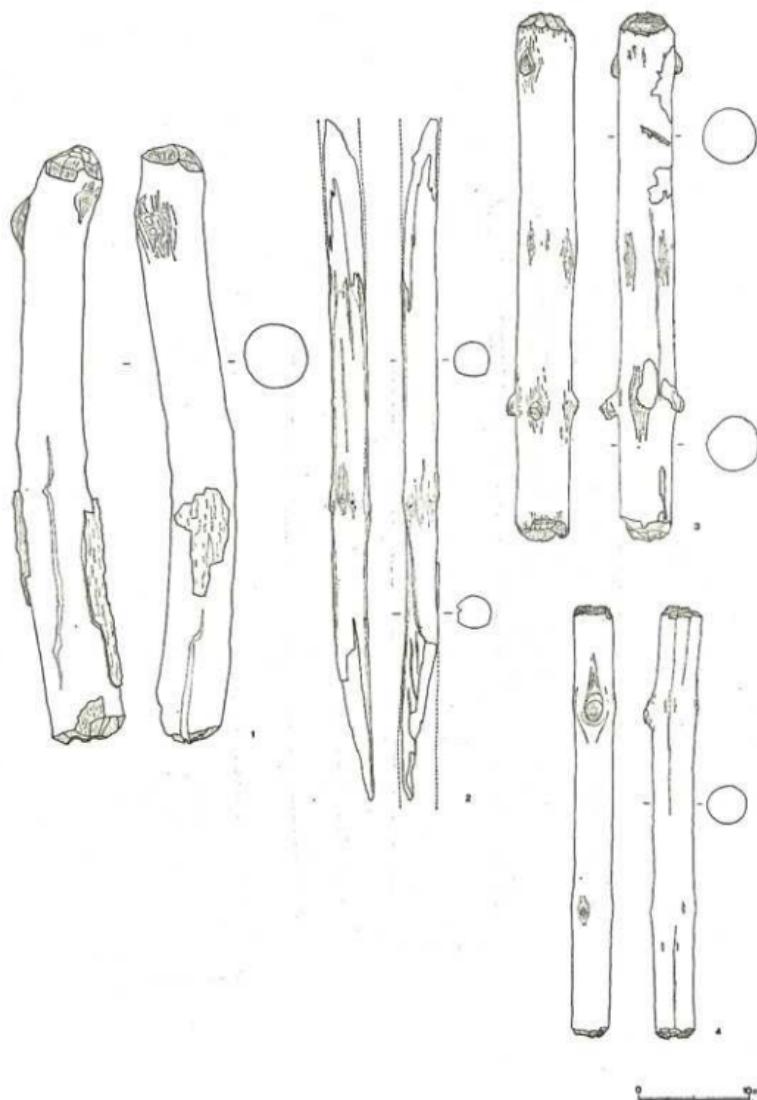
第105図 伊奈氏屋敷跡木製実測図(3)



第106図 伊奈氏屋敷跡木製品実測図(4)



第107図 伊奈氏里敷跡木製品実測図(5)



第108図 伊奈氏屋敷木製品実測図(6)

### (3) 中・近世

#### 裏門の堀（第64・109図）

位置は伊奈屋敷跡北東端の台地が最も狭まった鞍部にあり、北東の台地と画するに最適な地である。堀は台地上に入れた裏門地区の調査区とⅠ-2区に確認された。

堀は台地を区切るように、南西から北東に向って走り、確認された長さ37.9mを測る。台地上ではほぼ直線であるが、北東斜面を下るにつれてやや東へ屈曲する。

堀の幅は2.8m前後であるが、南西端では3.3mを測る。深さは台地中央付近で1.1mを測るが、他は0.7mと浅い構造である。

堀は箱堀であるが壁に傾斜を持つ、いわゆる箱兼研堀である。縦断面は台地中央部が高く、台地に沿って緩やかに下っていく。台地中央部の堀底の標高は7.3mを測るが南西端では5.7m、北東端では6.0mである。このように確認部分で1.3~1.6mの比高差があり、現状の堀り込み面が当時の状況だとすれば、台地中央部の堀底に水が届くと北東・南西両端の堀は冠水することになる。台地最高位の堀の水が底から0.6mの深さになれば、台地中央9.8mの範囲を除いてすべて冠水することになる。最も高いこの付近に橋が掛けられたと考えられるが、橋桁の痕跡はなく掛橋のようなものが渡された可能性がある。

堀の掘削された土層は、台地鞍部中央付近ではローム層に掘り込まれていた。南西に近づくにつれて、二次堆積である黄灰色粘質シルト層に掘り込まれるが、南西端から7m中央寄りまでは下底面にロームが見られる。しかし南西端では堀上半部が黄灰色粘質シルト層に、下半部が基盤の灰白色砂層に掘り込まれていた。南西端から25.8m北東へ行ったD-D'のセクションでは下底面が明黄色ローム層に掘り込まれていたが、壁の多くは2次堆積の暗茶褐色シルト層に構築されていた。Ⅰ-2区内では厚い粘土層が堆積しており、堀の確認は不明確であったが、堀の確認できた東北端では明茶褐色土および粘質明灰色シルト層に掘り込まれていた。

堀の堆積土は中央部と端部では全く違い、中央部ではロームを主体とした土であり、粘性もなく、堀の中央部が常に冠水していたとは考えられない。中央部に比べD-D'のセクションではやや粘性を帯びたシルト層が主体となり、北東・南西両端部では灰白から暗灰色の粘質シルト層になり、冠水していたと考えられる。

堀の南西端セクションの表土に近い標高7.9mには極く薄い火山灰が一層確認され、標高7.6~7.7mでも薄い火山灰が3層確認された。火山灰は堀が埋没したのち0.5m以上の間を置いて見られ、最上層の火山灰は耕作土直下のまとも層中にまばらに見られ、2~3層もまとも層の中に点々とあった。4層はシルト層中にあり、連続して確認できた。1層の火山灰はやや黒っぽい河原砂のようであり、2層もやや黒っぽく0.2~0.3mmの砂質である。3層は黄色を呈しやや砂質であり、4層も黄色で細粒砂質である。

遺物が出土していないため掘削時期は不明であるが、火山灰層のいずれかが天明3年に降下したものとすれば、堀の掘削時期はそれ以前の伊奈陣屋創建時あるいはそれ以前まで遡ると考えられる。

### 堀障子・土塁（第110・111図）

発掘区は伊奈屋敷跡西方の原市沼に突出する位置にある。検出された堀は伊奈屋敷跡の縁辺の土塁に沿って湾曲している。堀はいわゆる堀障子で、方形の区画が土塁側と沼側に2列確認できた。確認できた各区画は合計14区で全長およそ23mである。

以下各区画を北側から土塁寄りをA区、沼寄りをA'区とし、南へG・G'区まで設定して説明する。G'区については明確に残存していたが、水による崩壊が進んだため、詳細不明な点が多い。

各区は3本のトレンチと1グリッドにより確認されたため詳細な平面形態の比較はできないが、E・E'区が他区に比べ南北に長い形状を持つ。またF・G区は南側の幅が広い形状である。これらはいずれも敵の残し方に左右されたものである。各区の平面形態と敵を考え合わせると、土塁側から沼側への敵は通っているようであるが、土塁側と沼側を隔する南北の敵は屈折している。その位置はBとC、EとFの間である。おそらくA・B、C・D・E、F・Gの3区画に分担して掘られたため、3区画の南北方向の敵は屈折したのではなかろうか。3区画の違いは以下に述べる深さ、断面形にも区別が見られる。

堀の全体の幅はG-G'が6.8m、F-F'が6.6mであり、北へ行くほど狭くなっているようである。これは沼側の各区の幅の違いによっており、F'は3.35mであるが、E'では2.3m、B'では1.8mを測ることに起因しているようである。土塁側の各区の幅はFが南北敵に規制されてやや狭く2.5m、Cが傾斜面を含め3.6mを測る。長さはEとE'が最も長く4.55mと5.0mを測るが、他は3m前後である。

深さは最深がD'・E'の0.85・0.86mであるが、FとF'は0.28・0.3mと浅く、施設として機能したのか疑問である。他区は0.6m前後が多い。

堀底の標高は土塁側に比べて沼側の方が低い傾向にあり、B'で6.55m、D'が6.71m、E'が6.72mと低く、F'が7.12m、Fが7.17mと高い。隣接するE'・F'では0.4mの比高差がある。

堀底の断面形は平底が主体であるが、D・D'・E・E'区はU字形となり、この区画のみ前記したように深いのが特徴である。

敵の断面形は台形で、傾斜角は44°から73°を測るが、主体は60°から70°である。D・D'・E・E'は44°から58°であるが、A・A'・B・B'が62°から73°と急傾斜である。

堀の土層は最下層に壁の崩壊土と思われる砂質土が約0.1m堆積した後、短期間で埋ったと思われる粘質土が充满していた。粘質土の上層には黄灰褐色で、下層はグライ化のため青灰色を呈し、部分的に砂質土を混入する。土層を見るに一部に砂層がラミナになる部分があるが、自然の湧水、雨水程度であり、水掘としては利用されなかったと考えられる。

堀付近の基本土層はロームの下に黄白色粘土層があり、標高7.8m付近で灰青色砂層に変わる。灰青色砂層中の標高7.3m付近には0.1mの厚さで白色粘土を含む明黄褐色砂層を挟んでいる。堀の掘削は白色粘土を含む明黄褐色砂層の下まで到達しており、敵の最上部に一部黄白色粘土層を乗せるだけで、壁も底も灰青色砂層によって構成されている（第111図H-H'）。

E区堀底の3.5m上の標高10.7m前後には、土塁の底面がある。土塁は確認されただけで高さ0.8m、幅2.3mを測るが、現存部分で推定高2m、幅6mと考えられる。土塁の堆積土は、青灰色砂

質土層と黄白粘土色の互層で、版築状に築き固められていた。後者が土塁の下層にあることを考えると、堀の掘削土を順次上に積み上げて土塁を築いたことがわかる。また伊奈屋敷の台地を巡る土塁と敵堀は同時期と予測できる堀の堆積土はこの土塁の崩落土が主体であったと考えられ、短期間の埋没であると推測できることから、自然埋没以外に人为的な埋め立ても予測できる。いずれにしても砂層に掘り込まれた堀が崩壊せずに残ったのは、短期間の埋没によるものであろう。

堀からの出土遺物がないため、掘削時期は不明である。しかし堀陣子の形状から戦国期に遡る可能性が高い。

#### 埋め立て地（第65・66・112図）

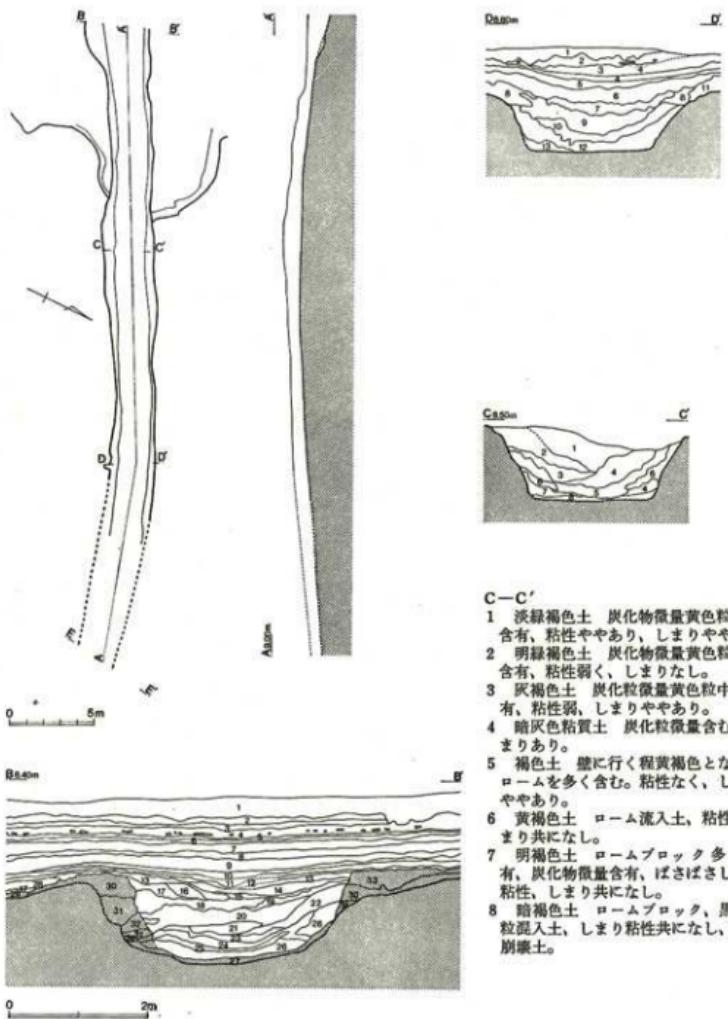
位置は伊奈屋敷跡北西の裏門西側にあり、II-3区とその北側に入れたトレンチおよび、I-4区南端部に僅かに確認された。

II-3区においては発掘区の北側方に厚い粘土層が確認できた。台地寄りでは0.7m 前後の厚さがあり、途中で下のまとも層との関係であろうか約0.3m の厚さになる。さらに沼寄りでは埋め立ては深くまで達し、厚さも1.4m を測る。埋め立ては順次沼側へ広げて行き、3回に分けて行なわれたようである。まず埋め立ての最も薄い部分の沼側に茶褐色土を入れ、次いで台地から最初に埋め立てた部分の上を覆い、順次沼側へ白色からクリーム色の粘土を入れている。最後は沼側に橋をつくり、その間へ部分的に青白色粘土を含む茶褐色土を入れているが、1・2回の埋め立て土層が沼への傾斜を見せるのに対し、最後の埋め立ては水平の堆積を見せる。

橋はまず太さ約10cmの杭を50cm間隔に打ち込み、橋の上方に横へ太さ5cmの竹を通し、そこへ持たせ掛けるように間隙なく竹を並べ、その下部へ6~8本を竹で縛った束を3束程敷いている。これによって埋め立ての土が流れ出さず、沈まないような工夫がなされている。

橋は東西方向に走ること、I-4区南端部に埋め立て粘土が見られることから、その幅は約14m を測る。地表観察ではこの埋め立ての位置に水田位よりやや高い平坦部があり、台地縁辺に沿って南へ連なっている。おそらくこの平坦面が埋め立てによって形成されたものである。

出土遺物はI-4区とII-3区間のトレンチから検出された近世後期の磁器だけである。埋め立てられた粘土の下にはまとも層があり、その上位には薄い褐色火山層が確認された。この火山灰層は裏門の堀南西端に見られた最上層の火山灰とほぼ同一の組成である（堀口万吉氏の現地調査時採集資料分析結果による）。天明3年の火山灰と推定できるならば埋め立て時期もそれ以降であろう。また田中家蔵の嘉永3年の絵地図には、すでにこの位置に神社があることから、それ以前と考える。

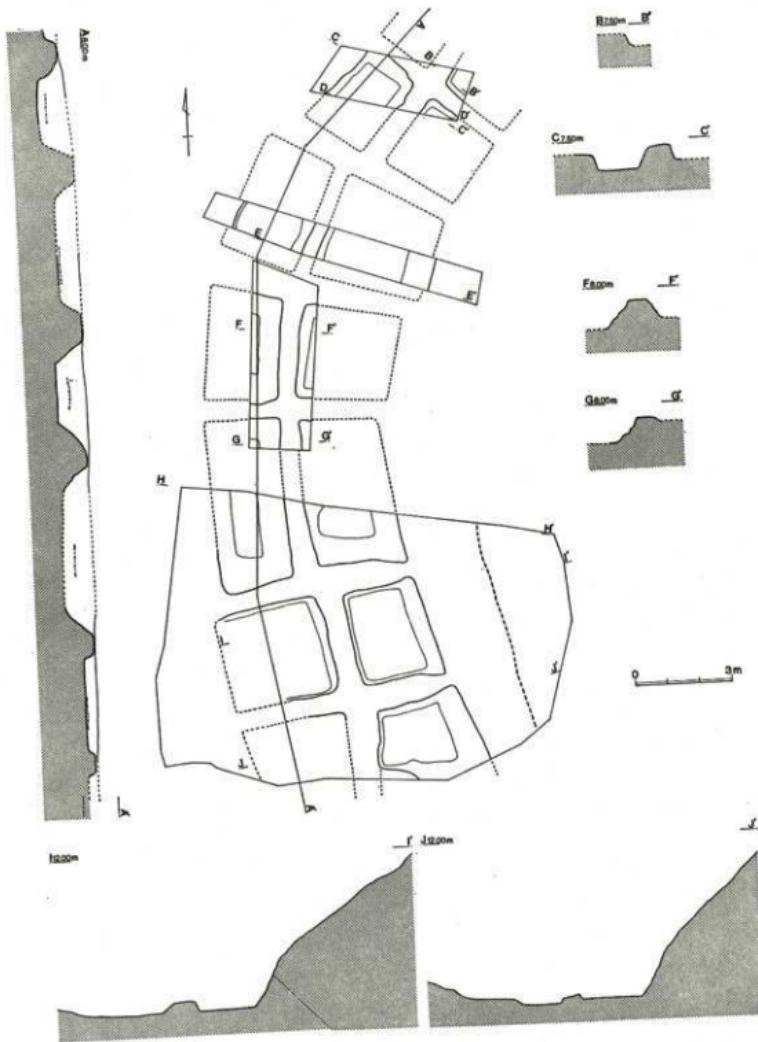


第109図 伊奈氏屋敷跡I-4 東区溝

## 第 109 図の説明

D-D'

- 1 明茶褐色シルト 粘性なし、しまりよし、 $\phi 0.2 \sim 0.5$ mm程の白色バミスを若干含有。
  - 2 黒色シルト 粘性ややあり、しまりよし、①層と混じるところが部分的にある。②層本来の部分にはバミスを含まず、植物繊維を微量に含有。
  - 3 黒褐色シルト 粘性微弱、しまり悪い、毛根状の植物繊維を多量に含むためにやや褐色味を帯びる。
  - 4 黒色シルト 粘性弱、しまり悪し、毛根状植物繊維を多量に含有（③層より少ないと）繊維や大型化。
  - 5 明灰黄褐色シルト 粘性中、しまり悪い、植物繊維多、④層よりさらに大型のもの増加。
  - 6 明灰黄褐色シルト 粘性中、しまりやや良い、植物繊維多、大型のものが本セクション中最も多い、セクション両端に近づく程、明黄色に強くなる、⑤層より明灰色。
  - 7 暗灰褐色シルト 粘性中、しまりやや良い、帶水性增加、植物繊維減少、 $\phi 1 \sim 3$ mmの炭化粒を少量含有。
  - 8 灰黄色シルト 粘性中、植物繊維⑦層と同じ、しまり悪い。
  - 9 明灰黄色 粘性中、しまり悪い、植物繊維やや減、⑦層と同じ炭化粒を含有。
  - 10 灰白色シルト 粘性やや強、毛根状植物繊維増大、帶水性良好、炭化粒減少。
  - 11 明黄褐色シルト 粘性中、植物繊維多、しまり良し。
  - 12 暗茶褐色砂質シルト 粘性なし、帶水性良い、植物繊維を含めて多い、植物繊維と砂のため層全体がボロボロしたかんじ。
  - 13 暗褐色砂質シルト ⑫層を基調にローム粒が多量にまじる、しまり良好。
  - 14 暗茶褐色シルト ⑫層よりさらに暗い、砂粒含まず粘性なし、しまり悪い、植物繊維多。
  - 15 明黄色ローム 粘性弱、しまりきわめて良し。
- 
- 1 耕 作 土
  - 2 黒褐色シルト 粘性なし、しまり悪い、毛状のまこもを多量に含む、帶水性良まこもは厚さ数ミリで層状に堆積する。
  - 3 黑色シルト 毛状のまこもを多量に含む（②よりは少し）粘性なし、しまり悪い、帶水性良。
  - 4 黑褐色シルト 粘性なし、帶水性良、しまり悪い、②等に多量のまこもを含む、②よりやや黄色、大底部でやや黒味が強い、同層中央に黄色のテフラしきものを点々と含む。黄色ブロックはやや砂質を帯びる。
  - 5 暗黄褐色シルト 粘性弱、帶水性良、しまり悪い、左半部では上方から黄一黒一黄となり、下底部の黄色が細粒砂質のテフラである。本テフラは、セクション右半まで連続と続く、まこも極めて多。
  - 6 黑色シルト 粘性弱、帶水性良、しまり悪い、相隔は③に似るが下半部でやや褐色味を帯びる。
  - 7 暗灰褐色シルト 粘性弱、帶水性良、しまり悪い、まこもは③と同様、やや大型のもの増加。
  - 8 暗褐色シルト 粘性、帶水性、しまり⑦と同じ。まこも⑦と同じ。
  - 9 黑褐色シルト 粘性、帶水性、しまり⑧と同じ、まこもやや増加するが、下底部で再び減少、色調は上層で黒く、下層ほど明褐色を帯びる。
  - 10 灰褐色粘質シルト 粘性やや強、しまりやや良、帶水性良、まこもかなり減少。
  - 11 黑褐色シルト 粘性よりやや減少、しまり悪い、帶水性良、まこも増加しかなり含む。
  - 12 灰白色粘土 粘性強、しまり悪い、帶水性良、まこも少量含む。
  - 13 灰黃褐色粘質シルト 粘性やや強、しまり良、帶水性良、まこも少量含む。 $\phi 1 \sim 5$ mmの小礫をまれに含む、炭化物微量に含む。
  - 14 黑褐色シルト 粘性弱、帶水性良、しまり悪い、まこも少量含む、やや灰褐色（粘土分）を帯びる。
  - 15 黑褐色シルト 粘性弱、帶水性大、しまり悪い、まこも大量に含む、上層部で黒く、下層部で褐色味を帯びる。
  - 16 黄灰白砂質シルト 粘性ややあり、しまりややわるい、まこもやや多い、 $\phi 1 \sim 5$ mmの小礫をかなり含む。
  - 17 暗黄灰白砂質シルト しまり良く、他の層相は⑩と同じ。
  - 18 黑褐色シルト 粘性なし、しまり悪い、帶水性良、炭化物粒（ $\phi 1 \sim 2$ mm）をかなり含む。まこも多。
  - 19 暗灰褐色粘質シルト 粘性やや強、帶水性良、しまりやや良、炭化物微粒少含む、まこも少量。
  - 20 黄灰白粘質シルト 粘性かなりあり、しまり良く、まこも少量、粗粒シルトを少量含む。
  - 21 暗黄灰白粘質シルト 粘性かなりあり、帶水性あり、しまり良し、 $\phi 1$ mm以上の炭化粒を多量に含む、まこも少量。
  - 22 黄灰白粘質シルト 粘性強、しまり良し、粗粒シルト分を多量に含む。
  - 23 暗灰白色粘質シルト 白色粒土を挟む他の⑪と同じ。
  - 24 暗黄褐色粘質シルト 粘性強、しまり良し、まこも微量、細粒及び小礫を若干含む。
  - 25 暗灰褐色粘質シルト 粘性強、しまり良し、炭化物粒、多量に含む、まこも微量、細粒砂を含む。
  - 26 黄灰色砂質シルト 粘性やや強、しまり良好、炭化物粒かなり含む、まこも微量に含む。
  - 27 青灰白砂層 基盤
  - 28 黑褐色シルト 粘性弱、しまり悪い、帶水性良、まこもやや多。
  - 29 暗褐色シルト 粘性なし、帶水性良、しまり悪い、まこも多、細粒砂をかなり含む。
  - 30 黄灰粘質シルト しまり良し、粘性強、砂粒かなり含む、小礫少量含む、⑩番等は本層の再堆積と思われる。
  - 31 黄灰粘質シルト 粘質やや強、しまり良し、⑩より灰褐色が強い、他は⑩類似。
  - 32 暗黄灰白シルト 粘性なし、しまり悪い、帶水性良く、木根による腐触の進行した結果か、まこもやや多。
  - 33 暗褐色シルト 粘性ややあり、しまりやや良、まこもかなり含む、細粒砂若干含む、ローム粒らしきものを鹿子まだらに含む。



第110図 伊奈氏屋敷跡 I-5 東区鉢堀(1)

E—E'

- 1 表土 褐色ローム質
- 2 褐色土 ロームブロック状で下層近くは粘性あり、表土近くは、ぼろぼろ。
- 3 褐色土 ②層に比べて多少黒く、粘性あり、炭化物も若干含まれている。
- 4 明褐色土 ⑥層とやや同じで白色粘土のブロック状が含まれている。
- 5 明褐色土 ⑥層と同じだが砂質シルトを若干含んでいる。しまりがよく粘性強い。
- 6 明褐色土 ④層と比べて明るく北壁②層と等しい。
- 7 暗褐色土 白色粘土粒子を多量に含み粘性強い。
- 8 暗褐色土 黄褐色土で粘性強、帯水性少、部分的に明黄灰色のシルトを含む粘土質層又少量ながら腐植を含む。
- 9 明黒褐色土 堆積過程において腐植が混入されたものと考えられる。
- 10 暗褐色土 粘性やや弱く、帯水性少、黄褐色の粘土粒及び腐植土を少量含む(北側 section ④層に対応)
- 11 暗褐色土 ⑩に比べやや暗い、しまりが弱く少量の砂を含む、腐植が流入したものと考えられる。
- 12 明黄灰色土 部分的に明褐色の粘土を含む、少量ながら腐植を含む(北側 section ⑥層に対応) 少量ながら淡黄灰色シルトブロックを含む。
- 13 淡黄灰色土 ⑫と均質であるが明褐色ロームの混入率がかなり低く、灰色土の割合が高い、帯水性良く、粘性は大きい、多

E110m

H110m

H110m

E

D

H

0

2m

- 量に暗い灰色シルトを含み微量ながら腐植をも含む。
- 14 暗黄褐色土 しまりが非常によく帶水性少、少量の明黄褐色シルト粒子を含む。更に堆積時に混入したと思われる黒褐色の腐植を含む、この黒褐色シルトは北側 section (7)と均質。
  - 15 暗黄灰色土 帯水性少、粘性強、⑩層に比べ明褐色土の混入率が高い、⑫層と均質。
  - 16 暗黄褐色土 腐植が多量に混入している（北側 section (6)層に対応）
  - 17 暗褐色土 帯水性あり、粘性弱し、褐色粘土粒子を少量含む、⑩層に比べやや暗い色を呈す。
  - 18 青黄灰色砂質シルト やや黄褐色の粘土を含む（北側 section (6)層と対応）
  - 19 黄灰質粘土層 腐植少量あり、やや水っぽい。
  - 20 暗青灰色砂質シルト 北側 section (6)層に等しい。
  - 21 暗褐色土 少量ながら黄褐色粘土粒子を含み又部分的に多量の明灰色シルトを混入する（北側 section (6)層に対応）

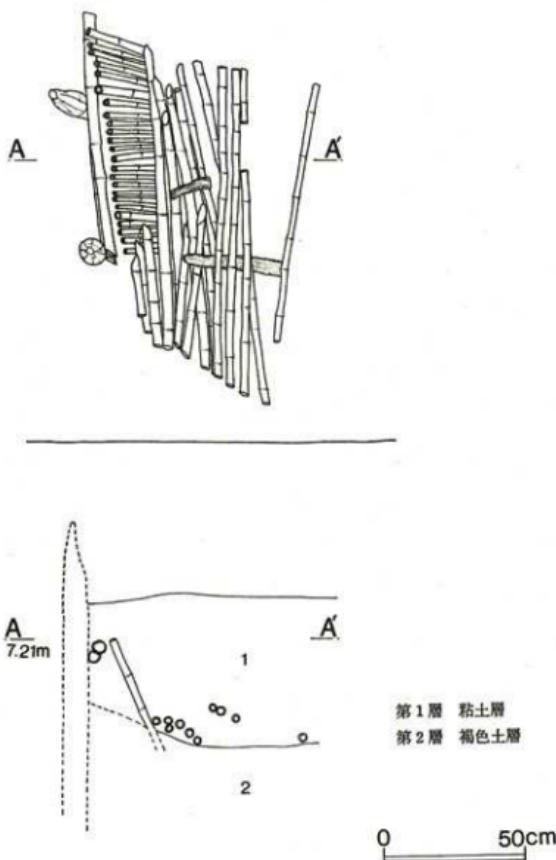
H—H'

- 1 黄褐色粘土質土 一部砂と粘土が混入する土墨の崩壊土、しまりなし。
- 2 茶褐色土 ①よりロームと白色粘土粒が混入する。やや粘質のある土、しまりなし。
- 3 青灰色砂質土層 大変よくしまっており、つきかためられていて、黄白色粘土含む。
- 4 黄白色粘土 つき固められ固い。
- 5 明黄色土 土墨から流れて来た砂と粘土粒が混じるようしきっている。
- 6 明黄色土 ⑤より白い。より黄白色粘土を多く含む。粘性さらに増す。
- 7 暗茶褐色土 一ム しまりなく、さらさら、一部黄色の微粒子を含む。
- 8 茶褐色土 粘土微粒子を少なく含む、しまりよし。
- 9 褐色土 ロームを主体とする流れ込み。純粋、しまりやや悪い。
- 10 茶褐色土 ⑥に似るが、さらに暗色で粘性、しまり増す。
- 11 淡黄色粘土質土 ⑫に似るが、黒色、茶褐色粒が多く混じり、粘性低下。
- 12 黄色粒土 一部白色粘土を混じる、しまり強。
- 13 黄白色粘土 一度に埋積した可能性強い、しまりよし、粘性強、一部に砂の小ブロックを含む。
- 14 茶褐色土 黒色土・黄白色粘土の混合土 粘土部分をのぞきしまり悪い。
- 15 ⑬と同じだが、個々の粒子が小さくなり、トーンが灰色基調になる、上層の一部に砂を含む。
- 16 ⑯がさらに進む。
- 17 黄灰質粘土層 上層の粘質土により、やや粘性をおびる。
- 18 ⑯と似るが、環元状態にあるため、基調青灰色をおびる。
- 19 青灰色粘土層
- 20 黑褐色土
- 21 黑色土
- 22 暗黄褐色土
- 23 黄灰褐色粘土質土 粘土粒と砂質土が混合
- 24 青色粘土質土 ⑯と同じだが、還元状態
- 25 青灰色粘土 一部砂粒を含む。
- 26 暗青灰色砂質シルト 一部に砂粒を含む、粘性、しまりともになし。

- 27 黄灰色粘質土 しまりよし。
- 28 黑褐色粘質土 しまりよし、上層でより灰色
- 29 黄青色砂層
- 30 明褐色砂層 やや粘質 } 堀の掘られた基盤層
- 31 暗灰色砂層 下層ほど粗砂
- 32 淡黄灰色粘質土
- 33 青灰色砂層 細度は⑬と同じだが色がちがう、谷に向かうと粘質をます。
- 34 灰色粘土 しまり大変よい。
- 35 暗灰青色粘質土 黒斑あり。

D—D'

- 1 表土 褐色土、ローム質。
- 2 明褐色土 粘性弱、白色の粘土がブロック状に混じり全体にボロボロしている。
- 3 黄褐色土 粘性強、やや帶水性あり、鉄分の沈着が少し認められ、このため白色の粘土が部分的に強く褐色を帯びる、暗褐色の汚れた土を少量含む。
- 4 暗褐色土 粘性ややあり、帶水性ややあり、①より若干暗い。②③④⑥に比べ均質。
- 5 褐色土 粘性やや強、しまり、まちまち、⑥と④が混ざったような層で白色粘土をブロック状に含む、部分的に非常に硬い。
- 6 明黄灰色 粘性強、帶水性あり、部分的に褐色を帯びる白色粘土の堆積、本層はローム台地の基盤を形成する粘土層の再堆積したものと考えられる。
- 7 黑褐色シルト 粘性弱、帶水性あり、堀を堆積する過程で腐植が混入したものと思われる。
- 8 褐色土 ⑤とほとんど同じだが、若干粘土が多く混じる。
- 9 暗褐色土 粘性強、しまり悪し、白色の粘土を若干含む。
- 10 明オリーブ色シルト 粘性強、しまりよし、層内は均質。
- 11 青灰色粘質シルト 粘性強、帶水性良い、しまり悪い、上層は⑥に近い、下層は粘土粒がさらに細くなり砂を微量に含むようになる。⑥が還元状態でグリアイ化したものと思われる。
- 12 青灰色砂質シルト ⑪と基盤の砂層がラミナになって互層に堆積する。
- 13 黄褐色砂質シルト ⑫と同じだがやや砂分が強、⑬と對、鐵あるいはマンガンが沈着したと思われる褐色層が発達し、全体に黄味が強くなる。
- 14 暗青灰色砂質シルト ⑪に対応するが腐植が多量にまじり暗褐色を帯びる。
- 15 黄褐色シルト 粘性弱、帶水性ややあり、白色粘性を少量含む、部分的に硬くしまって、青灰色砂をブロック状に少量含む。



第112図 伊奈氏屋跡Ⅰ—3区埋め立ての橋

## 4. ま と め

### (1) 石器について

#### <先土器時代>

該期の資料が出土したところは、大宮台地の北東部、小室支台の一支丘上で、東に向かって突出した支丘の肩部から緩斜面にかけての部分である。

標高はおよそ11m～12mほどで、沖積地との比高差は約3mを測る。調査の対象面積は約280m<sup>2</sup>と狭い。

調査区の西側すなわち本遺跡の乗る支丘の平坦部分は、路線からはずれるため調査の対象外であった。該期遺跡の一般的なあり方を考慮すると、今回の調査は遺跡の東端部分を発掘したにとどまり、その大半は未だ土中に眠っていると考えられる。したがって、遺跡全体についての分析などは行なえないままになっている。

また、台地下の低湿地調査区からも該期の資料が出土しているが、それらは縄文時代以降の遺物と共に出土しており、本来の位置を失なっていると考えられる。そこで、ここでは台地上から検出された資料を中心に記述をすすめ、低湿地出土のものに関しては、その都度必要に応じて触れることする。

また、出土層位はソフトロームの下面からハードローム上半にかけての部分であり、その中心はハードローム上位にあると考えられる。黒色帶まで及んでいないのは明らかである。各ブロックの垂直分布をみても、出土レベルは安定しており、層位的に石器群を分離することはできない。したがってここでは一応、出土した石器、礫とともに同一時期の所産という前提で記述する。

#### <遺物の平面分布>

今回の調査で台地上から出土した該期の資料は8点のナイフ形石器を含む総計162点の石器群、隼大の礫290点余である。それらは約20mの間隔を置いて二箇所に集中して分布する(第29図)。便宜的に北側の集中箇所をN群、南側のそれをS群と呼ぶ。以下各群毎に出土資料の平面的なあり方を略述し、まとめてみたい。

N群はおよそ4×8mの広がりをもち、台地の肩部から東面する緩斜面にかけて、南北に細長く展開している。同群のほぼ中央部にナイフ形石器を含む石器群が分布するが、これをN<sub>1</sub>ブロックと呼ぶ。同ブロックは約4×3mの範囲に弧状に広がるが、その分布は散漫である。

また、N群全体には隼大の礫が分布するが、その多くはN<sub>1</sub>ブロックを南北から挟むようなかたちで展開している。礫群としては命名しなかったが、散漫に分布する2つの礫群として認めてよいかも知れない。礫の大部分は熱を受けており、表面が赤く変色し、割れているものも多い。

一方、N群の垂直分布をみると、石器群、礫ともにほぼ同じレベルを保ち、斜面の傾斜に沿って分布しており、両者を分離することはむずかしい。したがって、N群においては一箇所のブロックと二箇所の礫群が南北に隣接しながら、併存していたと考えることができようか。

N<sub>1</sub>ブロックは、2点のナイフ形石器と小形の剥片類からなる。前述したようにその分布は散漫で

ある。ナイフ形石器は同ブロックの東端と南端からそれぞれ出土しており、中心部分からはずれたところに位置している。ブロックの主体をなす小形の剥片類は2点のナイフ形石器に挟まれるようにして分布するが、多くのものに使用痕とおぼしきものが認められる。また、第30図1のナイフ形石器は、今回の調査では同一母岩のものが検出されていないことから、未調査の他ブロックあるいは他遺跡からの搬入品と考えられる。

S群は $14 \times 10$ mほどの範囲に疎、石器群が分布するものである。石器群は3箇所にまとまりがみられ、それぞれS<sub>1</sub>、S<sub>2</sub>、S<sub>3</sub>ブロックとした。疎の大部分はS群分布内に散漫に分布するが、同群北端部に疎30数個が $0.5 \times 0.8$ mほどの広がりの中に集中して検出され、これを疎群1とした。

ブロックを中心にまとまっているが、各ブロック間にも疎、剥片等が散布しており、集中度に欠けるまとまりといえる。

S<sub>1</sub>ブロックは調査区の南東端に位置し、台地が東に緩く傾斜する部分にある。約 $6 \times 4$ mの広がりをもち、ナイフ形石器、角錐状石器、鋸歯状石器等を含む石器群である。これらの石器群はブロックの周辺部に分布し、その内側に剥片が分布する。N<sub>1</sub>ブロックでも同じようなあり方であったが、特徴的な展開をみせている。また、同ブロックの内外には拳大の疎がみられるが、まとまることなるく散布している。ブロックの範囲を疎の散布部分まで広げると、隣接する他ブロックと重なり、ブロック間が明瞭に区分できなくなる。

S<sub>2</sub>ブロックはS<sub>1</sub>ブロックの西約5mのところにあり、台地の肩部に位置している。およそ $2 \times 3.5$ mほどの広がりをもち、南北に帯状に広がっている。ブロックの北側には疎がまとまって隣接しており、N<sub>1</sub>ブロックと同様なあり方をしめている。ただ、N<sub>1</sub>ブロックと異なる点はナイフ形の石器、石核などの資料がブロックの中央部分に分布している点である。垂直分布をみても比較的レベル差が少なく、20~30cmの範囲内に疎と石器群が混在している。ここでも、N<sub>1</sub>ブロックのように1箇所のブロック、1箇所の疎群が重なって存在したものと理解される。

S<sub>3</sub>ブロックは、S<sub>1</sub>ブロックの北約3mのところにあり、台地の斜面部にかかっている。0.8×1.2mほどの範囲に広がる小規模なブロックである。ブロックの南側にはまばらに疎が散布するが、N<sub>1</sub>、S<sub>2</sub>ブロックでみたようなあり方とは異なり、本ブロックとの直接の関係は見出せない。

疎群1はS<sub>1</sub>ブロックの北約2mのところにある。他の疎がある程度のまとまりをみせながらも、やや集中度に欠けるのに対し、本疎群は狭い範囲に密集している。命名はしなかったがN<sub>1</sub>、S<sub>2</sub>ブロックに隣接して分布するやや散漫な疎群とは趣きを異にする。ブロックとは明らかに分離され、単独で存在するものである。垂直分布からみた出土位置も安定している。また、同疎群には石核が1点出土している。疎群の南端からの単独出土であるが、疎群と直接かかわりがあるのか否か不明である。

さて、今回の調査で検出されたブロック、疎群の平面的な分布についてその事実関係を略述してきた。ただ、ここでは発見された石器、疎などが、本来の位置を失なわず、原位置を保っているという前提に立っている。自然の営力あるいは人為的な擾乱の有無については検証しない今まで記述をすすめた。後者の場合、他時期の遺構との重複あるいは深度の天地がえしなどがひとつの目安となろうが、前者の場合、詳細に検証するすべを知らない。本遺跡では、平面的な分布からみると全

体にやや散漫な感じを受けるが、垂直分布をみると安定した状態を保っており、後世の大きな擾乱もみられないようである。多少の移動はあるとしても、上述したブロック、疎群の構成、内容は大きく変わるものではないと判断している。遺物が廃棄された後の移動は、ブロックの規模、石器組成などをはじめ、多方面に影響を及ぼす。ブロックあるいはユニットなどと呼称される石器群の中箇所、疎群、配石、炭火物集中地点などが、先土器時代の解明に重要な鍵を握る重要な遺構であるということには異論はない。だが常に、検出される遺物群が原位置を保っているか否かを検討しながら調査、分析をすすめるべきであろう。

さて、本遺構からは4箇所のブロックと1箇所（命名しないものを含めると4箇所）の疎群が検出された。これらはいくつかの共通する面と異なる面を持っている。まず地形的な位置関係をみると、N<sub>1</sub>、S<sub>1</sub>ブロックが台地の肩部に、S<sub>1</sub>、S<sub>2</sub>ブロックは斜面上に在る。前者は等高線に沿って南北に細長く分布し、北側あるいは南北両端に散漫な疎群を伴なっている。石器組成をみても1～2点のナイフ形石器に20点前後の剥片といった単純なものである。一方、後者は円あるいは梢円形にその広がりをみせ、疎群をともなわない。ただ、後者の場合、今回の調査で検出されたブロックでは最大規模のものと最小規模のものという好対称をみせている。また、視点をかえて石器の出土状況をみると、台地肩部にあるN<sub>1</sub>ブロックと、斜面上にあるS<sub>1</sub>ブロックでは、剥片類がブロックの中心部に集中し、石器が周辺部に散在するという共通点がみられる。これらを短絡的に分類することは可能であろうが、遺跡の大部分がまだ土中に埋もれている現在、平面的なあり方についての結論は留保せざるをえない。

#### 〈先土器時代の石器〉

該期の石器はその大部分が台地上から出土したが、低湿地調査区からも若干検出されている。低湿地調査区からの出土資料は、その出土状態から、すでに本来の位置を失なっており、ブロック内から検出された資料とは区別して扱うこととする。ここでは台地上から出土した石器群を中心に記述する。

出土した石器の内訳は、ナイフ形石器12点（台地上8、低湿地4）、角錐状石器2点、鋸歯状石器1点、石核4点（台地上3、低湿地1）、剥片144点（台地上138、低湿地6）となっている。

ナイフ形石器を中心とする単純な組成の石器群といえよう。

ナイフ形石器をみてみよう。素材に関しては、台地上検出の8点のうち、7点が縦長剥片を用いている。横長剥片を利用しているのはN<sub>1</sub>ブロックから出土した切出形のものだけである。低湿地出土のものはすべて縦長剥片を用いている。ナイフ形石器に関しては縦長剥片を多用する石器群であるといえる。

次に、調整加工が施された部位についてみてみると以下のように分類できそうである。つまり、一侧縁加工のもの（1類）と二側縁加工のもの（2類）である。さらに1類は、先端部に部分的に加工を施すもの（1a類）、基部に加工を施すもの（1b類）、側縁の1/2以上にわたって加工を施すもの（1c類）に細分される。2類については、基部を中心に加工を施すもの（2a類）、全側縁の1/2以上にわたって加工を施すもの（2b類）に二分される。本遺跡出土の12点のナイフ形石器は上記したように、調整加工部位からみると5分類できる。

また、これらを形態的な面、形の大小などからみると個々に異なり、バラエティーがある。

さらに石材をみると砂質頁岩、チャート各3点、硬質頁岩4点(低湿地3)、黒耀石2点(低湿地1)となる。

次に、前述した分類にもとづいて各ブロックをみてみよう。

N<sub>1</sub>ブロックは1a類と切出形石器で構成される。1a類のものは基部に平坦な打面をそのまま残す、平縁のものである。石材はとともにチャートであるが母岩が異なる。

S<sub>1</sub>ブロックからは3点のナイフ形石器が出土しているが、すべて一側縁加工のものである。しかし、1a、1b、1c類とそれぞれ加工部位が異なる。これら3点は、用いられた素材の形状、大きさもちがっており、バラエティーがみられる。中でも1b類とした第32図20のものは特異なものである。

S<sub>2</sub>ブロックからは1c類が出土している。1a類との中間形であるが、調整加工が側縁の1/2に及んでいるため1c類とした。

S<sub>3</sub>ブロックからは形の整った2c類のナイフ形石器が出土している。

グリットから出土した黒耀石製のナイフ形石器は1b類のものである。S<sub>1</sub>ブロックの20と同様、打面、バルブを除去するように基部の一側縁に調整加工が施されている。

上記したように、台地上出土のナイフ形石器は1類が大半を占める。しかし、1a～1c類は平均的なあり方を示し、ブロック毎による片寄り、石材によるある種の規定のようなものはみられない。

一方、低湿地からは1類、2類各2点が出土している。第30図1は2c類の典型的なものである。

さて、これまで遺物の平面分布とナイフ形石器について略述してきた。最後に総括的にまとめておきたい。

○ 今回は遺跡の一部分を調査したにとどまるが、ナイフ形石器を主体とする石器群が検出された。

○ 出土層位はソフトローム下面からハードローム上半にかけてであるが、本来の位置はハードロームの上位にあると考えられる。ハードローム下半、黒色帯には及んでいない。

○ 石材はチャート、砂質頁岩、硬質頁岩が主体を占めるが、他の安山岩、黒耀石、凝灰岩など多様である。

○ 4箇所のブロックを検出したが、地形的な立地、規模、礫群隣接の有無、石器組成、出土状態などから、2グループに分けられそうである。

○ 出土層位、垂直分布の状況などから同一時期の所産と考えられるが、ナイフ形石器の形態などから若干の時期差を考慮しなければならないと考えられる。

○ 組成は比較的単純で、ナイフ形石器の他角錐状石器、鋸歯状石器、石核が伴い、彫刻器、搔器などはみられない。

以上、事実記載に終りし、さらに詳細な分析、他遺跡との比較などがなしえなかつたが、今回の調査では大略上記したような結果を得た。

第5表 伊奈氏屋敷跡先土器時代石器計測表

番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ(g)	石材
1	N <sub>1</sub> ブロック	ナイフ形石器	5.5	2.3	0.9	7.4	チャート
2	〃	切出形石器	4.3	1.9	1.2	6.0	チャート
3	〃	剝片	4.0	3.9	0.7	13.4	チャート
4	〃	〃	3.1	2.6	0.7	6.2	チャート
5	〃	〃	2.1	2.2	0.8	5.1	チャート
6	〃	〃	2.9	4.3	0.5	6.6	チャート
7	〃	〃	2.3	2.2	0.5	1.6	凝灰岩
8	〃	〃	1.5	3.3	0.6	2.3	チャート
9	〃	〃	1.7	2.1	0.7	1.3	チャート
10	〃	〃	2.2	2.3	0.5	1.6	凝灰岩
11	〃	〃	2.1	1.7	0.3	1.0	チャート
12	〃	〃	1.3	1.9	0.3	0.6	チャート
13	〃	〃	1.1	1.8	0.2	0.4	チャート
14	〃	〃	1.0	1.6	0.3	0.4	チャート
15	〃	〃	1.5	2.1	0.6	0.9	黒耀石
16	〃	〃	1.1	1.2	0.3	0.3	チャート
17	〃	〃	2.1	1.0	0.4	0.7	チャート
18	〃	〃	2.4	1.1	0.4	0.8	チャート
19	〃	〃	2.2	1.4	0.2	0.4	チャート
20	S <sub>1</sub> ブロック	ナイフ形石器	5.5	2.1	0.8	6.0	砂質頁岩
21	〃	〃	3.3	1.3	0.7	2.2	硬質頁岩
22	〃	鋸齒状石器	3.2	3.3	1.2	12.8	黒耀石
23	〃	ナイフ形石器	2.2	0.8	0.3	0.5	チャート
24	〃	角錐状石器	4.9	1.4	1.2	8.5	安山岩
25	〃	〃	2.6	1.3	1.5	4.9	黒耀石
26	〃	石核	4.9	4.7	3.0	72.4	安山岩
27	〃	〃	3.5	4.6	2.0	4.0	砂質頁岩
28	〃	剝片	8.2	4.7	1.7	52.4	安山岩
29	〃	〃	6.9	4.3	1.7	57.6	安山岩
30	〃	〃	5.6	6.9	1.9	90.6	安山岩
31	〃	〃	7.1	5.4	1.8	76.9	安山岩
32	〃	〃	4.8	7.6	1.6	60.6	砂質頁岩
33	〃	〃	6.3	3.9	1.6	27.9	砂質頁岩
34	〃	〃	6.7	4.0	2.7	61.1	砂質頁岩
35	〃	〃	3.5	5.7	1.4	20.5	安山岩
36	〃	〃	3.3	4.3	1.2	17.8	安山岩
37	〃	〃	2.1	4.6	0.6	5.5	砂質頁岩
38	〃	〃	3.0	3.8	1.1	8.5	砂質頁岩
39	〃	〃	3.7	2.9	0.9	6.9	砂質頁岩
40	〃	〃	2.2	3.2	0.7	5.9	安山岩
41	S <sub>1</sub> ブロック	ナイフ形石器	3.5	1.2	0.6	1.7	砂質頁岩
42	〃	剝片	3.2	2.7	0.9	6.6	安山岩
43	〃	〃	8.4	5.9	2.1	102.6	安山岩
44	〃	石核	4.5	5.2	1.5	45.1	安山岩
45	S <sub>2</sub> ブロック	ナイフ形石器	3.6	1.2	0.7	3.1	砂質頁岩
46	〃	剝片	1.6	0.7	0.3	0.3	砂質頁岩

番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重さ(g)	石材
47	S: ブロック	剥片	1.3	0.8	0.3	0.2	黒耀石
48	疎群	石核	3.5	3.6	1.3	14.6	黒耀石
49	グリット	ナイフ形石器	3.1	1.6	0.5	1.2	黒耀石
50	"	剥片	5.2	1.7	1.0	6.7	硬質頁岩
51	"	"	3.9	2.4	1.0	6.6	硬質頁岩
52	"	"	1.9	2.4	0.9	3.2	硬質頁岩
53	"	"	3.4	4.0	1.4	17.1	安山岩
54	"	"	3.5	1.3	0.7	2.3	砂質頁岩
55	"	"	3.7	5.2	1.4	21.3	砂質頁岩
56	"	"	2.0	2.1	0.9	3.5	チャート
57	"	"	3.5	3.3	1.5	8.2	硬質頁岩
58	"	"	2.0	1.4	0.7	0.8	黒耀石
59	"	"	2.1	1.2	0.5	0.6	チャート
1	低湿地調査区	ナイフ形石器	5.5	2.2	0.7	6.0	硬質頁岩
2	"	"	3.8	2.0	1.0	4.4	黒耀石
3	"	"	3.0	1.2	0.3	0.8	硬質頁岩
4	"	"	1.6	2.0	0.3	0.7	硬質頁岩
5	"	剥片	2.2	2.0	0.9	1.1	硬質頁岩
6	"	"	4.5	1.2	1.4	4.4	黒耀石
7	"	"	5.5	2.3	1.2	10.6	チャート
8	"	石核	3.4	4.0	1.3	11.6	黒耀石